
幻少女 ～ 儚げにほほ笑む彼女 ～

野木坂 園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻少女　　～ 儚げにほほ笑む彼女～

【Nコード】

N1096J

【作者名】

野木坂　園

【あらすじ】

大学生である天宮幹土は、同じサークル仲間や高校時代の同級生を誘って、ある山奥の洋館に旅行に出かける。そこで出会った少女ミキと、仲間達と二晩を過ごす、そこで不思議なことが起きる。
長編ミステリー小説。

休日の朝。住宅街の狭い道を、青年は走っていた。

その茶色の髪は汗に濡れて毛先が細くなり、Ｔシャツの背中には染みがにじみ出ている。

彼は走りながら腕時計を見て、九時半、とぼつりとつぶやいた。その瞬間、スピードがさらに上る。

久しぶりに全力で走っていた。長いこと運動してなかった所為か、息が切れて仕方がないけれど。会うのが本当に久しぶりだから。

曲がり角をいくつか折れていくと、前方に、白いワゴン車が一台見えた。そこに、懐かしい人影が寄りかかっているのに気付いて、ようやく彼はペースを落とした。

ストレートの長い髪。それが微風に揺れて、彼女の長身に垂れ掛かっている。彼女は車体に寄りかかって、携帯を打っていた。

彼は、足を止める。

「只今……天宮幹土、到着しました」

膝に手を当てて息を切らしなら、そう言った。

「十分、遅刻」

先生は車体に寄せていた体を起き上がらせて、携帯を折り畳んでそう言い、

「……ほら。暑いから、さつさと中に入りなさいよ」

そう首で促した。

「……わかってますって。疲れてるんですよ、今。久しぶりに走ってきたから」

そう言つて車の後部を迂回して助手席に乗り込む。と、その瞬間、凍える冷風が体を包んでぞくりとした。

「寒ッ！　なんだこの低温ッ！」

幹土はすぐに、ダッシュボードの空調ボタンを荒っぽく叩く。

「あーあ、そんなに上げちゃうんだ……って、それより、幸美はど

うしたの？ 一緒に来るはずだったじゃない？」

「……一足先にデパートに行って、旅行の買出ししてくるって。それで、俺達とは後で合流するらしいです」

「そう。何だか悪いわね。一人で行かせて」

「そう言いながら、全然全く気にしてなさそうあなたです。……」

幸美は大丈夫ですよ、基喜が後で手伝いに行ってくれるって言っし。二人でなら、大丈夫でしょう」

「そう」

先生は呟いて、車を発進させる。

会話が途切れて、幹土はぼんやりと助手席の窓を開ける。

日曜の朝の、ひっそりとした住宅街。日差しの強い青空の下で、蝉がみんみんと声を喚かせていた。するとふと。

「幹土君……幸美とは、うまくやってるの？」

そう尋ねられた。幹土は一瞬押し黙ってから、

「今まで通り……仲良くやってるよ」

そう窓の外を見つめてぼつりと言った。その様子をちらりと見た先生は、

「……なら、良いんだけどね。幹土君が浮気してそうで、少し気になったのよ」

「なんだよ、それ……」

幹土がそう振り向くと、先生は無言で笑った。

先生の濃い眉毛は綺麗に整えられていて、アイラインの入った目元には、ほくろがある。高校時代に毎日拝んだその顔を、久しぶりにじっと眺めてみる。

すると、その視線に気付いたのか、何？ と先生が訊いてきた。

「先生……」

幹土がつぶやく。

「……だから……何よ？」

「化粧濃いですね」

一瞬、沈黙が流れた。

だがその途端。車がズゴツと前傾した。ブレーキを思い切り踏みつけたのだ。

幹土がうわ、と咄嗟に手すりにつかまる。

「どうせ、私は化粧濃いですよッ!!」

ズゴツズゴツ、と車体が何度も傾いた。幹土は、お願いだから止めれっ、と青白い顔で叫ぶ。

すると突然、車の揺れは収まった。

幹土が青ざめた顔をようやく上げて、先生の横顔を窺がうと。

先生はぶつぶつと「悪かったわね」と呟きながら、眉を引きつらせていた。

それから幹土が手すりを握り締めながらしばらく萎縮していると、車は三十分ほど大通りを進んだ後に、デパートに隣接するコンサート会場の駐車場で停止した。

二人で会場に入り、ホールへと続くその赤い扉を開く。真っ暗な背景の中できらめくように光り輝くステージが見えた。グランドピアノの前にワンピースを着た少女が座り、指を機敏に動かしていた。

「……あらあら、可愛らしい」

「席は前の方ですよ。……ほら、行って行って」

幹土は先生の背中を押して、通路を下っていく。

前の方まで来ると立ち止まって見渡してみる。見知った顔を見つければ、彼女が座る列へと歩み寄った。

「よう、加賀」

その声に、じっと演奏を聴いていた彼女が、弾かれたように振り返った。浸っていたところを突然跳ね起こされて、少し驚いている。

「天宮君」

そう呟きながら、彼女はそっと幹土の横に立つ先生を見遣る。すると、先生は長身を屈めてあいさつする。

「この人、俺が言ってた例の昔の担任な。……先生、この人は同じサークルの仲間で、加賀美代子さん」

幹土はそう囁き声で二人に説明した後で、手を振って、美代子に

席をずれるように合図する。

美代子は「あ」と声を掛けられてやっと気付いたように、慌てて立ち上がって席をずれた。

幹土は美代子に向かって、

「春芳の演奏まで、あと何人ある？」

と訊く。

彼女は、えつと……と、膝の上のパンフレットを開き、「五人かな」とつぶやいた。

「五人……結構あるな」

寝てよつと、と早くも目を閉じようとすると、横からつねられた。

「……痛つて。何だよ？」

「……あのね、幹土君。せっかく来たんだから、ゆっくり演奏聞い
てなさいよ」

先生は、あんなに可愛らしいのに、と、たった今演奏が終わった少女へ向けて、猛烈な柔らかい笑顔と拍手を送る。「ブラボー！」

「はいはい……わかつてるよ」

幹土はそう息を吐いて腕を組みステージをにらむが、ものの数分で、睡魔と手を取り合い、再び先生に腰をつねられることになった。

すべての演奏が終わり、幹土はゆっくり話しこんでいる先生と美代子を置いて、明るいエントランスホールへと出た。

大人が数人ずつ集まって談笑し、そのいくつかのグループの隙間を、正装した子供達がきやらきやら笑いながらかけっこをしている。

さて、コンサートも終わったし。

幹土はきよろきよろと見回して、見知った姿がないか、探す。

その時、肩を叩かれて振り向くと、案の定、それは。

「おはよう、幹土」

幹土と並んでも、そう背丈が変わらなそうな彼女は、バイトの帰りなのか、スーツを着たままで、しなやかな長い足がこちらに近寄ってきた。

「……どこのモデルかと思った」

「そりゃ、どうも」

彼女が不敵に笑う。

「……久しぶりだな、鈴木澄子。お変わりないようで」

「そっちも。ていうか、フルネームで呼ぶか普通？」

そう笑って、彼女はふと気付いたように、幹土の体を頭から足の先までじろじろと眺めた。

「なんだ？ その値踏みするような嫌な視線は」、

「いや、少し太ったなっと思ってね。……幸美に甘えてばかりで、働いていない証拠だ」

「会って早々、説教かよ。……まあ、鈴木らしいけど。……相変わらず口調が男っぽいし」

澄子は、一言余計だ、と笑い、視線を幹土の背後へ　ホールの奥へと伸ばした。そこでは、先生と美代子が立ち話をしている。

「おい。茂川先生の横にいるのは誰だ？」

「加賀だよ。俺のサークル仲間。加賀美代子」

お前も挨拶して来いよ、と、ぽん、と彼女のヒップを叩く。すると、その手を、彼女は渾身の力でつねってくる。いてつと叫んであわてて手を引く。

「いつまでも、セクハラされて気にしない女と思ってたら大間違いだぞ」

「……痛って。昔のお前はもっとダンディーだったのになあ。いつの間にか女に目覚めたか」

「なんか誤解を生みそうな表現だな、おい」

そう言って澄子は、じゃあなと男勝りに笑って、歩いて行った。それを見送った後、腕時計を見遣った。

「……そろそろ時間だよな」

ガラス越しに、会場の外で往来する人々の顔を確認する。その中には、彼女の顔はない。

「遅いなあ、幸美。手間取ってるのか？」

その時、奥の廊下に、眼鏡をかけた、黒いスーツの若い男を見かけて、幹土は「お」と笑みを浮べた。

「おい、春芳」

声をかけると、春芳がぴくつと身体を震わせて振り向き、

「幹土か……」

「良かったぞ、演奏。お前、自分で言ってた通り、全然緊張してなかったな。見てて解った」

春芳は、いや、と首を振る。

「やっぱり緊張したよ。本番になると、手首が震えた。少し間違えたけど、聴いててわからないような箇所だったから、助かったよ」

春義は眼鏡を外し、ハンカチで額を拭く。

「幹土もピアノやってみたらどうだ？ 気分転換になるぞ」

「いい、俺には向かないから。……それより、みんな、もうほとんど集まってるから、行こうぜ」

ホールを親指で指差して歩きだすと、春芳は浮かないような顔で、ああ、とつぶやいて続いた。

その時携帯が鳴って、幹土は取り出して「はい」と明るく応答する。

『幹土？ もう目の前まで来てるんだけど』

「すぐ行く」

幹土は後ろの春芳へ振り向いて、あそこだとばかりに、ホールの奥で談話している三人を指さす。

春芳は無表情のまま頷き、彼女達に近づいていった。

ガラス越しに外を見ると、片手に買い物袋を下げ、もう片手に携帯を持った幸美が歩いているのが見え、その後ろに基喜が重そうに顔をゆがめて荷物を抱えて歩いている。

外へ出て近づく。

幸美が気づき、「幹土」と笑う。その隣で基喜が顔を苦々しく歪めて、

「……なあ。やたらと重くねえか、これ」

手に提げた大きなバックを、かすかに上げて言う。

「一体、何入ってんだよ……」

「別に何だって良いでしょ。……男なんだから、そのくらいの荷物我慢しなさいよ」

そのくらいって……と泣きそうな顔を浮べる基喜を尻目に、幹土は、

「とりあえず、荷物を車まで移動させよう」

そう言ったと同時に、澄子たちが会場から出てきて、「よっ、幸美、基喜」と近寄ってくる。先生が「車はこっちよ」と先導して歩いて行く。

基喜が先生の背中ににやけた視線を向け、「また一段とお美しくなりましたなあ」と、先ほど文句を垂れていたのが嘘のように、重たい荷物も何のその、駆け寄っていく。幸美がこちらへ振り返り、行こ？ と手を引いてきた。

「じゃあ、自己紹介でもしておこうか」

高速道路を走る車の車内で幸美のよく通った声が響く。運転席に座った幹土が、「やっとか。じゃあ、前から順番に」と片手をあげて促す。

全員と顔見知りの幹土は当然パスされ、トップバッターには、助手席の先生が抜擢される。

「茂川美世、二十六歳。幹土君の担任をやってました。一応、今回の旅行では、皆さんの保護者に当たるのかな。……いくら成人してるからって、この三日間、くれぐれも破廉恥な真似は慎むようにね」

そう言っ先生は幹土へ露骨な視線を送る。

「何で俺なんだよ」

幹土が眉をしかめてつぶやく。

「次」

すると、後部座席に座る春芳が眼鏡を押し上げながら、口を開く。「外海春芳。あまり賑やかなのには慣れていない性質ですが、ご迷

惑にならないように、最善の注意を尽くします」

幹土が、おい、と呆れたようにつぶやく。

「そんな自己紹介あるかよ。やり直し」

春芳は視線を伏せ、わかったよ、と小さくつぶやく。うけ狙いでないことは彼の無機質な表情が物語っている。

「外海春芳。趣味は、ピアノです。先ほどは、俺の演奏を聞いてくれて有難う。困った事があつたら、何でも言ってくれ。宜しく」

全く心のこもってない声で、淡々と喋り終える。お前も懲りない奴だな、と基喜が横から睨む。すると、先生が助手席から後ろへ振り向き、春芳を見据える。

「君、私のクラスの子に似てるわね。ぶっきらぼうに喋るところがそっくり」

そう穏やかな笑みを向けられても、春芳は、「そうですか」と興味もなさげにつぶやく。

「気を取り直して、次！」

基喜が、手を叩いて促すと、美代子が口を開く。

「加賀美代子と言います……」

少し緊張してるのか、声が震えていた。

美代子がノーマルな自己紹介を終えると、基喜が身を乗り出して、待つてましたとばかりににこやかに笑い、口を開く。

「清水基喜、高校の時は、幹土と美術部やってた。当然、絵は俺が断トツでうまかった。俺が一番最初に描いた傑作の題名は、」

長く続きそうなので、幹土が次、と促す。基喜は、んだよ！と

幹土のシートを蹴る。

次に、幸美が、よく通った声で自己紹介をする。

「……その、幹土と実は付き合ってたります」

そう言った途端、春芳がはつとしたように振り向き、

「幹土の彼女だったとは。……知らなかった」

そう言って幸美に頭を下げる。

「幹土からは、あなたのことをよく伺ってて……」

態度をころりと変えて話し始める。基喜がそれを横目で見て、
「外海は、幹土だけには寛容なんだよな。俺への扱いはひどいの何のって」

とつぶやく。

「次。鈴木行ってくれ」

「オッケー、幹土。鈴木澄子。美大に行っています。絵を始めたきっかけは、この」

幸美の肩を掴んで自分の前に引き寄せる。

「この幸美です。幸美が誘わなかったら、きっと私は今、美大になど進んでなかった」

「鈴木。お前、彼氏できたって本当なのか？」

突然幹土が訊くと、鈴木は、え、と声を上げて赤面し、

「ほ……本当、だけど」

とぼつりとつぶやく。すると、先生が「そうなんだ。良かったわねえ」と棒読みで言う。先を越されたわ、と小さなつぶやきが聞こえたような気がした。

「どんな奴なんだ？」

幹土は、バックミラーに映る彼女の赤くなった端整な顔に訊く。

鈴木は言いかねるように視線を逸らした。

「教えてくれたっていいだろ」

幹土がそう追求すると、彼女は何故かむっとした顔を浮かべ、

「幹土よりかはイケメンだよ」

と、ぶっきらぼうに言つて、そっぽを向いてしまった。

高速を下りて山道に入った車の中は、いつしか静まり返り、かな寝息と幹土の欠伸の声だけが響いた。

山道の周りはブナやモミが多く、光の霏が、背高い木の網をくぐり抜けて、ドアにもたせかけた腕にグロテスクな縞模様を浮かばせる。

……叔父さん、なんでこんなところに洋館なんて持ってたんだろ。

そんなことを考えてると、瞼が重くなってきた、ふと視界が細くなった時、ワゴン車が道を外れかけた。幹土は寝惚けた頭を跳ね起こさせ、ハンドルを切る。

「……危ないわよ」

美代子が、一人起きてたのか、半目でつぶやいた

「ごめんごめん。何か眠くなってきたやつて」

「これ、食べて」

ガムを差し出す美代子。サンキユ、と言って、口に放り込む。

「加賀は眠くないのか」

「眠いけど。せつかく来たんだし、ゆつくり景色を見たいなあって思ってた」

「同じような景色ばかりだけどな」

「空気が良いもの。それで十分」

美代子がそう言つと、幹土はドアに設置されたボタンを押して、窓をさらに開けてあげた。

「ありがと」

美代子はそうつぶやいて、心地よさそうに大きく息を吸う。

「……洋館か。相当古い建物らしいし、大丈夫なのかな」

ぼんやりと独り言のように言う幹土。

「平気でしょ、きつと。幹土君の叔父さん、使えない建物なんか、幹土君に貸さないよ」

「俺もそう思うけどさ。どうも、嫌な予感がするっていつか……」

「予感って……殺人事件でも起こるって言つの？」

可笑しそうに言う美代子に、

「ま、山奥の洋館に泊まるって言ったら、それが定番だよな」

そう言つて、アクセルを強く踏んだ。

急な坂にかかり、眠っている皆の頭がことごと揺れて、いくつかの頭は起き上がった。

「もう着いたの？」

隣で、先生が眠そうな声を上げる。

「後少し」

幹土はそう言って先生を見た際、その頭の上にちよこんと青葉が載ってるのに気付く。幹土はそれを掴むと、ぽいと外へ投げ捨てた。青葉は風によって舞い上がり、山を見渡せる高さまで上昇する。

その葉の先が、鬱蒼とした林の中で、唯一ぽっかりと開いた一つの空間を指差す。そこには大きな洋館が佇んでいた。まるでそこだけが外界と切り離されているような そんな幻想的な空気を滲み出させて。

「でかいな……」

思わず震えた声が喉から漏れる。

その古びた洋館の前に前庭が広がり、中央の噴水を色とりどりの花壇が囲んで、さらにその周囲を、高い木々が並列している。

「幹土の叔父さんって、ありえないね。こんなところに、広い敷地持つてるんだから」

幸美の声に、「資産家だからな」と返す。

「とりあえず、車置いてこなくちゃな。……先生」

「あ、うん」

周囲の景色に見入ってた先生が頷き、車に近づく。幹土は幸美に、「荷物を、玄関まで運んでおいてくれ」

と、足元に置かれた荷物の山を視線で指し、運転席に乗った。そして。

「いい加減、起きやがれ、アホ」

未だシートに寝そべってる基喜へ、空のペットボトルを投げつける。

基喜は耳を掻きながら起き上がり、首を左右へ振り向けた。

「……どこだ、ここ」

「寝惚けてないで、さっさと降りろ。お前の荷物、下敷きになってるぞ」

基喜は視線を窓の外へ向け、荷物の山の土台になった一つのボストンバックに気付き、「ひっでえ！」と叫ぶ。

すぐさま車から飛び降りると、基喜はボストンバックを引き抜いた。山が崩れる。

「何すんのよ！」

幸美が駆け寄って、二つある自分のバックをぎゅっと抱きしめる。「基喜。どうしてくれるんだ……これ、ブランド物だぞ」

鈴木が、自分の鞆を慎重にばんぽんと叩きながら、地獄の眼差しを基喜に向ける。

「何で、俺の所為なんだよ！ 自業自得だ！」

そう威勢良く言い返すものの、基喜の足は徐々に後ずさり始める。唯一、美代子だけが、「まあまあ」と彼女達を宥めようとしていた。春芳は興味なさげに花壇を見ている。

「大体お前、口調とか性格とか、男っばい癖に、こういうことだけは女みたいに細かいんだな！」

その声が響くと同時に、幹土は「……終わったな」とつぶやいてエンジンをかけた。助手席の先生も、終わったわね、と続く。

発進すると同時に、基喜が澄子に耳につけたピアスを引っ張られて、悲鳴を上げているのがサイドミラーに映った。

「相変わらず、賑やかな」

煙草に火をつけながらそう言う先生。

「美世ちゃん、煙草俺にも」

幹土は助手席へ、顎を突き出す。

「何よ、その呼び名。やめなさいよ」

先生は箱から一本抜き取り、幹土の突き出た唇に差し、火を近づけてやる。

「……やつぱり、こんな広い敷地に七人っていうのは、寂しいんじゃないかしら」

先生は口紅の付いた煙草を離し、白い煙をなびかせた。

「そんなことないですよ。このくらい広くてちょうど良いんです」

そう言つて、「ほら……」とサイドミラーの中で騒いでいる基喜たちを顎で示す。

「そうね……違いないわ」

先生はそう肩を揺らして笑った。

「……この辺ですね」

建物の横に敷かれた石畳の上に車を停止させる。

「やっと今日の労働が終わった……」

「ご苦労様、幹土君」

二人は同時に降りて、向かい合ってドアを閉じた。幹土は後ろへ振り返ると、目の前の洋館を見上げる。

「荷物はもう運んだから、さっさと扉を開けてくれ」

玄関へ来ると、春芳が、上着を脱いだワイシャツ姿で急かすように言う。

「そう焦るなよ」

幹土は錆びた鉄のノブを握り、懷から鍵束を出して差し込ませる。鍵がなかなか回りにくく、強く捻ると、やっと施錠が解かれた。

「どうぞ」

そう言う中に入る。そして、目の前に広がる景色を見つめて、
「……写真どおり、だな」とつぶやく。

視界に収まりきれない広いホール。その正面にある木製の階段。吹き抜けになっていて、二階の廊下の欄干が視界の端から端まで伸びている。

ホールの左の壁には食堂へ通じるドアがあり、対して右の壁は半分ほどで途切れ、その先は広間へ続く通路になっている。それから頭上を仰ぐと、シャンデリア風の照明が爛々と輝いていた。

「……ここ、押すよ」

美代子が横の壁のスイッチを押す。シャンデリアから黄色い光が降りる。

「すげー」

基喜が間拔けた声を上げながら、階段の前にボストンバックを降ろした。それにみんなが続き、バックの上に次々と荷物を置いている。

「おいお前ら！ また俺のバックの上に乗せやがって！」

基喜の非難の声に誰一人耳を傾けない。

幹土達は二階へ上がると、狭い通路に並ぶドアを開いて、部屋をチェックし、その後で振り分けを行うことになった。

「一つ部屋があれば、それで事足りるじゃん」

そう提案する基喜に、澄子が再びピアスを引つ張って、「テンション下げさせるな」と、引き伸ばされて大きくなったその耳に囁くすみません、すみません、と基喜は悶えながら謝った。

結局、階段から向かつて左の廊下の部屋を女子、男子はその反対を使うことになった。

各自荷物を持って部屋へ向かい、幹土はその際に「幸美」と声をかける。

「俺さ、後でそっちの部屋に……」

そう言いかけると、振り向いた幸美は嬉しそうに頷いて、

「荷物置いたらすぐ行くから」

と言つて、早足で廊下の先へ消えていった。基喜が背後で、「ごちそうさん」とにやけながらつぶやいく。

幹土は「うるせえ」と言いながら、ドアを開く。

部屋には、大きなベッドが一つと、壁の隅に使い古された机があった。

その他には正面の壁に、一つだけ窓があり、その黄色いカーテンの隙間から、部屋の中央に敷かれた灰色のカーペットに光の模様が降りていた。

幹土は机へ近寄って、その前に鞆を降ろす。

机の表面に目を近づけると、文字のような、かくかくした線の羅列が、至る所にあつた。机に載った空の本立てを見ると、埃で真っ白になつてゐる。

幹土はティッシュを取り出して埃を拭き取り、それから机の下に引き出しがあるのに気づいて、手を伸ばした。

一段、二段と、何もないように思われたけれど、三段目の奥に、四角い木箱が入っていた。

幹土は取り出して、顔に近づける。

「オルゴールか」

金色の鍵穴に、金色の蓋縁。ずしりとした重さを手に味わいなが

ら、少し傾けて眺める。

「ふーん……誰のかな、これ」

そうつぶやきながら、オルゴールを戻そうと手を下ろす。その時、カーテンの隙間から雄大な景色が目につき感嘆の声を漏らした。その途端、手から、その重い感触がずれ落ちた。

鈍い音を立てて、それは足元に転がる。幹土は慌てて、「……壊れたか？」としゃがみ込んだ。

その時、蓋の開いた箱から音が流れ出した。それは、瞼の重くなるような、夢のような物語を紡ぎだす。

幹土は箱を手にとって耳に近づけてから、その箱の中の精密なオルゴールをじつと眺める。それは傷一つなく、どんなに大切にされていたか、すぐにわかる。

「……まずいことしたな。蓋、壊れちゃったか？」

オルゴールの蓋を開け閉めしてみる。

「大丈夫か……」

それを元の場所へ戻すと、後ろめたそうに見下ろす。音はゆっくりと途切れ始め、そしてすぐに止まった。

……なんだ、この感じ。

上着の胸の辺りをぎゅっと握り締める。

懐かしさにも似た感情。それでいて、どこかもの悲しくて、胸を締め付けられるような。

「幹土」

振り向くと、幸美が戸口に立っていた。

幹土は、すぐに笑顔に切り替え、引き出しを無造作に閉めた。

「幹土の部屋、広いよねえ」

幸美は近づいてきて、窓の外へ身を乗り出した。

「危ないぞ」

そんな幹土の声を気にした様子もなく、彼女は欄干に寄りかかって、新鮮な目で山の景色を眺める。

「来て良かったね」

幹土も彼女の横から顔を外へ覗かせつつ、ああ、と頷く。

「本当は、二人で来ても、良かったんだけどね」

「けど、皆で来れば、それはそれで楽しいし」

幸美は、「うん」とうなずき、

「この洋館、昔、誰かが住んでたんでしょ？」

「……まあ、そうなんだけど。叔父さんが言うには、親戚が戦前から使用してた建物なんだってさ」

「……どんな人達が住んでたの？」

「……叔父さんと同じ、資産家。うちの家系はどれだけすごいんだか」

そう言つと、ベッドに近づいて寝転がった。

幸美も、窓から離れて、幹土の隣に座る。少し沈黙が流れた後に、彼女は口を開き、

「どうなの、あのサークルの人達とは」

「どうって……加賀も春芳も、いい奴だよ。基喜は、高校の時と何も変わってないけど」

「美代子さんって、良い子だよな」

「どんなところが？」

「落ち着いてて、礼儀正しいところとか」

幹土は目を開け、幸美の方へ振り向く。彼女は、視線を床へ落としながら、どこか不安そうに微笑んでいた。

「気をつけていれば、大丈夫だよ、きっと」

幹とは幸美を宥めるようにつぶやく。幸美はでも、とつぶやいたが、その後に無言で頷いた。

幹土が「大丈夫だって」ともう一度言つて、彼女の頬へ手を伸ばしかけたその時、

「幹土君。皆、もう下に降りてるわよ。昼食当番には、呼びがかつてる」

ノックをしてくる先生に、幹土は体を起こして、「すぐ行きます」と返事をする。

「今日は、俺達が作るのか」

「……面倒ね」

どこか暗いままの幸美の声に、

「そんなこと言ってたら、うまいもん作れないぞ」

そう軽快に言って廊下へ出ると、その奥へと歩き出してた先生が振り返って、

「なんだ幸美、幹土君の部屋にいたのね」

と、にやけた笑みを浮べて引き返してくる。

「この三人でなら、なんとかうまいもん作れるかな」

ふとぽつりと言つと、

「私、無理よ。料理苦手なの」

先生が、言いにくそうにつぶやいた。

「同じく私も」

幹土はもうご存知よね、と言っばかりに、先生とは対称的に、事も無げにつぶやいた幸美。

「頼むわね、幹土君」

「頼んだよ、幹土」

女としての意地がかかっているのか、懇願するような二人の視線に、幹土は息を吐く。

「……やる気ねえなあ、あんたら」

他のメンバーは広間のソファアに座って、勝手に取り出したティーカップに、湯気を立ち上らせて談笑していた。幹土達が来ると、基喜が、ステーキだの中華だの、無茶なリクエストをし始める。

「そもそもそれを作る素材がない。……却下」

幹土が冷たくそう言い放つと、

「幹土の料理か。あまり高望みしない方が良くもな」

澄子がからかうように言った。むっとした幹土は、

「なら、お前が作れよ。……もっとも、男装の麗人さんに、作れるのなら、の話だけと」

そう鼻先で笑う。すると、澄子は結構堪えたのか、唇を結んで肩を震わせる。そして突然、

「良いぞ、やってやる」

その長い足で地面を踏み鳴らして立ち上がると、厨房へ歩いていつてしまった。「ちよつと、澄子」とその後を追う幸美。

「あーあ。やつちやつたな、幹土」

基喜が、啞然としてる幹土をはやし立てる。

「……つたく。これだから、短気な女は」

幹土は首を振って、隣で笑ってる先生を「行きましょう」と促して、向かった。

ホールから厨房へと入ると、がらりと空気が変わった。というのも、部屋全体が新しく改装されて、キッチンなんて一度も使われてないんじゃないかと思うくらい。

澄子と肩を並べ、争うように食材を洗っていると、

「幹土、お皿、どこにあるの？」

幸美が背後から声をかけてきた。

「……えつと、確かこつちだ」

流し台から離れ、食堂へ通じるドアを開けた。

幸美を連れて食堂へ入っていくその背中を、澄子は横目で見遣って、ふん、と鼻息を漏らす。

薄暗い食堂の奥の棚に近寄り、皿を取り出して、二人で厨房へ持ち込む。そして、テーブルの上に降ろすと、幹土は気付いたように幸美の首下を見た。

「幸美、エプロンは？」

忘れちゃったの、と苦笑する幸美。

すると、幹土は自分の背中から紐を解き、彼女の背後へ回ると、それを結んであげた。

「ありがとう……でも、幹土のは？」

「俺、もう一枚持つてるから。……取ってくる」

幹土は再び階段を上って、自分の部屋の前まで来ると、ノブを引いた。そして、目を瞠った。窓の前で、小さな影がこちらを向く。少女はその細い足を前へ出して、机に近づこうとしたまま、こちらを見て固まっている。一重瞼の瞳が見開かれ、少女の唇は何かを言おうとする。幹土は、

「誰？」

と、呆然と訊いた。

「誰」

ほぼ同時に訊き返し、少女はゆっくりと後ろの窓へ後ずさる。長い黒髪が、黒いワンピースの背中に溶け込むように揺れた。

その顔をじつと見た瞬間、心臓が大きく飛び跳ねた。

この子は。

その顔の輪郭は、記憶に残るあの人のそれと一致し、目、鼻、口――その一つ一つに、胸が掻き立てられる。

幹土は、ゆっくりと少女に近づき、見下ろした。彼女も、じつと見返してくる。

そうしてお互いの目の奥深くから、何かを探し出そうとしたけれど、その無言の会話は、カーテンが突然彼女の首に絡みついたことで、遮られた。

「んっ　んっ！」

声を詰まらせる少女の首に、ますますそれは絡みつuki、彼女はもがいて、苦しげに手をぱんぱんと背後の壁へ叩きつけた。そして、彼女の上体が仰け反り　開いた窓の方へ傾く。

「危なッ」

幹土は手を伸ばして背中を抱きとめる。

「ぶはっ」

少女の顔が、カーテンの中から滑り出てきた。幹土は倒れかけた少女の体を立ち上がらせて、一息吐く。

ありがとう　少女が首に手を当てて咳をしながらつぶやく。

「……親戚の子か？」

そう訊きながら、幹土は窓を閉める。

「もしかして、親戚の人？」

「またも同じように訊き返してきて、幹土は「そう。親戚の人」と頷き、

「天宮 幹土って言うんだ」

「私もよ」

少女はそう言うのと笑って、「天宮 ミキ」と、明るくつぶやいた。すると、幹土は子供に向ける優しい笑みで、

「ミキさんは、なんでこの洋館にいるのかな？」

そう訊いてみる。ミキは少し驚いたように、

「私は、あなた達が来る前からここにいたわ。突然やってきたから、泥棒かと思って隠れてたの」

そこに、と彼女は机の下を指差す。幹土は目を点にする。

「……どういうことだ？」

額に手を当てて考える。

「ここに泊まっている訳じゃないよな？」

泊まっているわ。平然とそう切り返す少女。

「……マジかよ」

幹土は深く溜息を吐く。

「叔父さんなら絶対事情知ってるな、きっと」

……知って何も言わなかったんだ、あの資産家。

「じゃあミキさん、とりあえず下へ降りて、叔父さんに電話しようか。そうすれば、どこの家の子なのかもはつきりする」

「嫌よ」

ミキは、つんとした顔でそう首を振る。

「面倒なもの」

幹土は、見た目と裏腹な彼女の性格に衝撃を受けながら、

「それでも、電話しないと駄目だ」

少し強く言った。すると、ミキはむ、と唸った後、わかったわよ、と肩をすくめる。

幹土は少女を促して、階段を降りた。

広間に来ると、騒いでいる基喜の背後を通り過ぎ、棚の上にある黒電話の受話器を掴む。

そこで、広間の連中が彼女に気づき、驚いた声を上げる。

「誰だ、その子」

基喜が啞然として言った。

「俺の子」

えー！ と、美代子が素っ頓狂な声を上げる。

春芳は耳を塞いで、嘘に決まってるだろ、と眉をしかめて美代子に言う。

「俺の親戚の子だよ」

幹土がそう言い直すと、ミキは好奇の視線を三人の顔へ向けて、彼らの座るソファーへと近づき、美代子の隣に腰を下ろした。そして、彼女のティーカップの側にあった、角砂糖を盛ったミニボウルから、一つ掴んで頬張った。

そんな飄々とした彼女の様子に、思わず笑みを零した時、突然、もしもし、と中年の男の声が耳に響いた。

「あ……叔父さん？」

「幹土か？」

どこか沈んだ叔父さんの声。

「これは、どういうことだよ」

「……すまない。親戚の子が一人、そっちにいるだろ。ミキという名前の子なんだが」

「聞いた」

「……ミキちゃんは、前からその洋館に行きたいってずっと言っていたらしくて。お前が友達連れてそこに行くことを、ふと彼女の母親に話したら、それはちょうど良いわって、喜び出してな……」

「そっか、わかった。ミキさんってもしかして、良子おばさんの娘だろ？ ……赤ん坊の時、会った以来だな」

幹土は途端に懐かしそうな表情で、ちらりとミキを見遣った。

「……ミキちゃん、似ているだろ？ ……すごく」

突然そう訊いてきた叔父さんの声はどこか暗い。

幹土は視線を伏せて、「ああ、良く似てるよ。あの人に」と頷いて、ミキを見つめる。

「……良子は、幹土君にならミキを任せられる、って言ってな。：

…今朝、使用人にミキちゃんを洋館まで送らせたんだ。ミキの世話役よろしくね、と良子から伝言だ」

「どうして断らなかつたんだよ」

「私は断つたさ。けれど、後で電話がかかってきてな、それがミキちゃんからだつたんだ。……私、ずっとあの洋館に行きたいって思ってたの、ありがとう、叔父さん　そんな嬉しそうな声をかけられたら、もう断るわけにはいかないだろ？」

「あの叔母さん、そんなことを……」

「……つまり、叔母さんは、「OK貰ったわよ」とミキさんに嘘を言つて。何も知らないミキさんは大喜びして。そして、さらに、ちやんとお礼の電話かけておきなさいよ、とミキさんに言つたんだらう。……なんていう凶行手段。俺が電話取つても、抵抗するの無理だ、絶対。」

「俺にそのことを伝えて、もし、行くの止めるなんて言い出されたら困るから、今の今までずっと黙ってたわけか……」

「すまない、幹土」

幹土は笑みを浮べて、叔父さんらしいな、とつぶやく。

「だから……ミキちゃんのこととは、」

「わかつたよ。平気。こつちで預かるから。……何日間、居るんだ？」

「帰る時は幹土と一緒に、と良子は言ってきている」

「俺の家まで、連れてくればいいんだな？」

叔父さんは、「そうだ」と安心したような声で言い、

「物分りが良くて助かる。……お前の友達には、迷惑かけてしまうから謝っておいてくれ。……仕事だからもう切るが、何かあった

ら掛け直せ。……旅行、楽しんでな、幹土」

「ありがとう、叔父さん」

それだけ言って、受話器を下ろした。そして、振り向くと、

「幹土兄さん。誰と話していたの？」

口いっぱい砂糖を詰め込んだひょうたん顔をもごもご言わせて、ミキが訊いてくる。

「天宮 義一。俺の叔父さん」

幹土は行儀悪いぞと言うように眉をしかめて彼女を見て、ソファ
ーへ座る。

美代子がカップに紅茶を淹れて、ミキに差し出すと、ありがとう、
とても言いたいのか、彼女は口から雑音を漏らして、カップに赤い
唇を付けた。

「マナーというものがこの世にあることはご存知かな、ミキさん」

幹土の声に、ミキは返事を返さず というより何も言う事がで
きず、ただ音を立てて紅茶を啜った。そうして口の中が空になると、
「知ってるわ、義一叔父さん。昔、病気で寝込んでる私に、花束を
一杯贈ってくれたの」

「そうなんだ。ほら、皆に自己紹介して。これから世話になるんだ
から」

ミキは観念したように頷いて、口を開く。

「天宮ミキです。……十三歳になります」

ぶつきらぼうにつぶやいて、静かに立ち上がると、お辞儀をした。
その緩やかな動作に驚く。

顔を上げると、ミキは「よろしくお願いします」と、高らかに言
った。

一瞬、ミキがどこかのお嬢様に見えて、啞然としたけれど、彼女
が腰を下ろすと、

「ごめんな。迷惑はかけさせないから」

と無言のままの三人に言う。

「気にするな、幹土。一人二人居たって大して変わらない」

春芳が微笑んで言った。その横で、基喜が、

「良いつて良いつて」

と、どうしても良さそうに片手を振る。一方の美代子は、膝に手を当てたまま、良いよ、とだけ。

「悪いな」

そう言つて、苦笑を浮べた後に、視線をミキへ戻すと、彼女は鼻歌を歌いながら、角砂糖を積み重ねてピラミッドを作り始めていた。幹土は、再び額にミミズを復活させる。

ミキを厨房に連れて行くと、幸美がちょうどエプロン姿で出てきた。

「どこ行つてたのよ」

そう眉をひそめて けれど、すぐに幹土の隣に佇んでいる少女に気付く、「誰、その娘」と啞然とする。

「どこ行つてたんだ……幹、」

続いて出てきた澄子と先生が同じような反応を繰り返したのを見届けると、苦笑しながら事情を説明した。

「幹土の親戚の子なのね」

幸美はミキの手を取って、名前は何て言うの？、今いくつなの？ と彼女に喋りかける。

「天宮 ミキと言います。十三歳になりました」

ミキは幸美が気に入ったのか、退屈そうな態度をころりと変えて、憎らしいほどに明るく笑顔で答える。

「よろしくね、ミキちゃん」

「よろしくね」

先生と澄子もそう言って、緩みきった頬を彼女に向けて近づいた。ミキは澄子と先生を、値踏みを踏むように、足先から頭のとっぺんまでじつと眺めた。

「鈴木は、高校の時の同級生で、幸美の親友なんだ。それでこの人は、」

「私は昔、幹土君の担任をやっていたの」

先生が言葉を遮って、説明する。幹土は頷き、

「……そういうこと。先生には昔から色々世話になりっぱなしだね。明るくて美人なんだけど、どういう訳か、男運に恵まれてないようで」

ね、先生、と幹土は先生に視線を向ける。

「そんな紹介の仕方、ないでしょ」

先生は眉を寄せて、頬を膨らます。

「へえ……このおばさん、先生なんだ」

ミキの声に、先生の表情がぴくりと震えて歪み、そして、彼女は堪えるように肩を震わせる。

幹土はうわ、と同情の視線を先生に送った。

「そうなのよ。私、教師をやっててね。色々大変な職業なんだけど、やりがいはあるわよ。……ミキさんも、担任の先生をあまり困らせちゃ駄目よ？」

かろうじて口だけは動いているが、その声は無常と哀しみに震えていた。

先生の言葉を聞いたミキは眉を寄せて、視線を逸らし、
「困らせようにも、困らせられないもの」

と、ぽつりと零した。幹土はそのつぶやきに気付かずに、

「……じゃ、とりあえずもう作業に戻るか。……な？」

幸美と澄子に視線を向けると、彼女達は頷いた。

「ミキさんは、広間で待ってなさい」

はい、とミキは再びつまらなげな顔で、背中で腕を組みながら歩いていく。

その時突然、幹土の脛に、横蹴りが直撃した。

「痛ってッ！」

片足を抱えて振り向くと、先生がにつこりと穏やかな笑みをこちらに向けていた。男運に恵まれなくて、悪かったわね、と静かにつぶやく。

「終わったな、幹土」

そんなスマートな鈴木の声が背後から聞こえた。

食堂の長細いテーブルは、パスタにかけられたソースの鮮やかな色に、華やかに飾られていた。それを囲うように、木の椅子が並べられて、皆はそれに座って談笑している。

年月を思わせる食堂の古い壁には、不釣合いな新品のエアコンが設置され、手持ちぶたさなミキがそのリモコンをピッピッピと鳴らせて悪戯する。

「やめろよ、壊れるだろ。どうしてミキさんは、そう悪戯ばかりするんだよ？」

「暇だと、勝手に手が動いてしまうのよ」

幹土がりモコンを引ったくる。

「……お前の怒り方って、凄みがないな」

見ていた澄子が、肩をすくめる。彼女は、スーツワンピから、涼しい水色のシャツにジーンズといったラフな格好に着替え、プロポーションの良さがますます強調されてる。

隣で美代子が、目を丸くして、「すごいなあ……」とその胸元を見てつぶやいているのに本人は気付かずに、フライドポテトを頬張っている。

「だって幹土は、子供好きだから仕方ねえよ。こいつ、子供や婆さんにはとことん優しいんだよ」

基喜が澄子にそう返すと、将来は親馬鹿ね、幹土君、と一番端の席の先生が笑う。

「何とでも、言ってる。……じゃあ、皆揃ったことだし、食うとするか。……春芳」

春芳は無言で頷き、数本のシャンパンの瓶を開けて、それを回していく。

「じゃあ、久しぶりの旅行に 乾杯！」

基喜がグラスを掲げると、皆のグラスが一斉に上がり、ガラスのぶつかり合う軽快な音が食堂に響いた。

「お前、よくこんなの作れたな」

さっそく豪快に食べ始めた基喜が、口の端からパスタを垂らしながら、もごもご言う。

「当たり前だ。よく家で作るからな。一人暮らしだし、俺」
すると、澄子が悪戯っぽく笑い、

「そうか？ 家には、もう一人の同居人がいるだろ？」

すると、ミキが不思議そうに幹土を見る。

「いるかよ、馬鹿！」

幸美は、聞こえていない振りをして、グラスを一気に煽り、朱に染まった頬をグラスに映す。

「幹土兄さん、誰かと住んでるの？」

ミキが、無垢な目で幹土を見る。

「いないいない。こいつらの言う事は信じるな、ミキさん」

幸美はグラスを置きながら、ふと向かいの席に座った美代子を見遣る。

彼女は、会話に参加しようとは度々口を開こうとするが、言い出せずに、下を向いてしまう。

幸美は微笑んで、彼女に声をかけようとするが、ちょうどその時、美代子は意を決したように隣の基喜の、空の皿を手に取り、パスタをよそって差し出した。彼女の頬は赤くなる。

「おっ、サンキュ。さすが気が利くな、加賀は」

基喜は、軽快に笑って、

「どっかのオトコ女とは、訳が違う」

と澄子に視線を向ける。

「何だと、基喜」

ピアスのついた耳に手を伸ばしかける澄子に、基喜が、すみませんすみません、と彼女のグラスにシャンパンを注ぐ。

幸美は、美代子の真つ赤な嬉しそうな顔を見て、なるほどね、と人知れず笑い、自分の空のグラスを満たした。

「ミキちゃんも、いる？」

につこりとミキに笑みを向ける。ミキは、人形のような白い顔を頷かせた。

シャンパンを注いでやると、ミキはそつとグラスに口をつけ、静かにテーブルに下ろした。その優雅な仕草に、思わず目を釘付けにしていると、彼女がこちらを見て、目が合った。幸美は慌てて微笑

みを取り繕って、視線を皿に向けなおす。

……どこかのお嬢様なのかしら。

幸美はフォークにパスタを巻きつけながら、ちらりともう一度ミキを見て思った。

「春芳君、さつきから静かね」

先生が、黙々と食事を進めている春芳に声をかける。

「食事中は、話さないのが主義なんです」

無機質な声でそう告げ、上品にフォークを扱う春芳。

「春芳君は、彼女はいるのかしら？」

「恋愛とかには興味ないんです」

「そうなんだ。でも、それってあまりにつまらなくない？ …… かななら、私と付き合ってみる？」

パスタを飲み込んだばかりの春芳は大きく咽て、慌ててグラスを煽ぐ。

「な、何ですか。いきなり……」

「冗談よ、冗談」

先生はどこか憎めない笑みでそう言う。春芳は、調子狂うなあとばかりに彼女を見た。

「春芳君は、なんでこの旅行に参加したの？」

「幹土が誘ってくれたからです」

すぐにそう切り返す春芳に、先生は、ふーん、と探るようにその顔を見て、

「どうして幹土君だと、良いわけ？」

と訊く。すると、春芳は真顔で黙って、何か考えるようにフォークの動きを止めた後、

「たぶん、似ているからだと思います。俺に」

ふーん、と先生は、楽しそうに他のメンバーと会話している幹土を見遣って、

「何となく、春芳君の言ってること、わかるような気がするな。幹

土君って、すごく仲間想いで……寂しがり屋さんだから」

春芳はそれには答えずに、また無表情に戻ってフォークを動かした。再び心を引くためってしまった春芳に、先生は、つれないわね、とばかりに息を吐く。パスタのハーブの葉が、その息にくるりと回った。

食後、皆で一丸となって重い腹を引きずらせて前庭を散歩してから、広間へ戻ってきた。

ミキは、ふああ、とこちらへ喉仏をのぞかせて欠伸すると、「少し昼寝してくる」と大きな目をとろんとさせて、広間を出て行った。皆でテーブルを囲み、紅茶を飲む中、

「午後、どうしよっかな」

ソファーに寄りかかってぽつりとつぶやいた幹土に、幸美は突然思い出したように口を開いた。

「良いものがあるの。ちよっと待ってて」
目を輝かせて、広間を駆け出て行く。

「……なんだ、あいつ」

基喜が眉をひそめる。嫌な予感がするらしい。
しばらくすると、幸美は大きなバックを抱えて戻ってきた。

「何、その荷物」

呆然とバックを見て言う。

「ふふふ。これはね……」

幸美は上機嫌にバックのジッパーを下ろし始める。まさか……と、持ってたカップを下ろす幹土。

「そのまさかよ」

バックから飛び出したのは、大分くたびれた感じの大きな紙の箱。その表面には、エアホッケーという文字が。

「持ってきたのか……」

呆れたように息を吐く幹土。

「道理で重いと思ったら……こんなもん入れてたのかよ、お前！」

今朝の重労働を思い出したのか、基喜が人差し指を幸美に向けて、まくし立てる。

「誰が何持つて来ようと、勝手にしょ」

幸美は澄ました顔で箱を開けると、エアホッケーの台を絨毯に置いた。そして、

「やろうよ」

笑顔を上げて言う。しかし、幹土は「俺はいい」と首を振る。

「なんでよ。幹土、これ好きじゃん。久しぶりにやろうよ」

幹土は頬を指先で掻きながら、苦笑する。

「ここまで来てやるのも……なんていうか……ちよつとな」

……だって、やり出すと、妙なライバル意識燃やして止まらなくなるんだよな、こいつ。

「そんなあ……」

落胆して、絨毯にひれ伏す幸美。すると、

「幹土なんて放っておいて、私とやろう」

横から澄子が、身を乗り出す。

「俺も、やるぜ。……よく持ってきたな、赤司」

興味が湧いてきたのか、態度をころりと変える基喜。しかし、それを二人は無視して、さつさとマレットを手にし、盤を挟み合う。

「おい！ 聞いてんのかよ！」

すると、お茶を飲んでいた春芳が眉をしかめ、うるさいとばかりにカップを強く置く。

「スイッチオンつと」

幸美がスイッチを入れると、盤上から空気が噴出す。基喜は、おおっと叫びながら、ぺたりと頬を盤につけて、涼しそうな顔をする。

「それじゃ幸美。じゃんけん……」

顔をへばりつかせている基喜の頭上で、二人は「ぽん」と手を出す。

「よし、私からだ」

鈴木はパックを盤上に載せると、すぐにそれをマレットで弾いた。につこりと目を細めていた基喜の頭に、軽快に当たる。

「何しやがる、このオトコ女！」

澄子に掴みかかるうとする基喜を、美代子が、まあまあ、と後ろから押さえた。その時、

「あら。何やってるの？」

部屋から戻ってきた先生が、興味深げに覗いてくる。

「ご覧の通りのエアホッケー。先生もやったらどう？」

幸美はそう言つて、澄子の腕の間に猛烈な速さでパックを貫通させる。澄子は「なんだ、お前」と果然と幸美を見る。

「あら。うまいじゃない」

「だてにこの十年間、練習してきた訳じゃないもの。……ね、幹土？」

幹土は「ああ」と苦笑する。澄子と基喜が、何だよそれ、とばかりに非難がましく幸美を見た。それを眺める先生は、「ふふふ」と笑つて、

「私は中庭を散歩してくるわ。……春芳君もどう？」

突然振られた春芳は、危うく口の中のものを零しかける。

「……いいいです」

つれないわねえ、と先生は笑つて、広間を鼻歌交じりに出て行つた。春芳はその背中を見送ると、溜息を吐いてカップを下ろす。その時突然、

「……おい、赤司。さつきから幹土が寂しそうにお前を見てるぞ」

基喜の声に、え？ と嬉しそうに振り返る幸美。その隙に、基喜は彼女を足蹴りして、席を陣取る。

「よし、やるぞ。鈴木」

予備用のマレットを手にして、にやける基喜。

「お前とはやる気がしない」

そう言つと、澄子はあっけなくマレットを放り捨てる。「なんだと！」と、またしても顔を真っ赤にするが、しかしすぐに表情を緩め、

「……まあ良い。加賀、一緒にやろう」

傍観していた美代子は、突然話を振られて、えっ！？と肩を飛び跳ねる。

「そうだ。加賀さん、君がやれ」

マレットを差し出す澄子。美代子は、えっと……、と視線をめぐらせた後、恐る恐る受け取る。顔が真っ赤だ。

「よし、俺から先攻な」

さっそく基喜はパックを弾き、美代子はきゃっ、と何故か悲鳴を上げて慌てて弾く。するとパックは、豪速で、幾重にも折れ曲がる軌跡を描き、おまけに基喜の腕を弾いて、ゴールした。

やるじゃねえか。そう言った基喜は、引きつった笑みを浮べていた。

幹土はぼんやりと、エアホッケーを続けている幸美と澄子の姿を眺めていた。横では、基喜が力尽きたようにぐったりと伸びている。「大丈夫？」

白目を剥いているその顔を、美代子は心配げに覗きこんでいる。春芳はというと、何杯目かの紅茶をカップに注いでいるところだ。向かい合って、わいわいとホッケーを続けている二人。大分慣れたきたのか、澄子が何度かゴールを決める。そんな時は、いつも澄ました感じの彼女の顔が嬉しそうに目を細めた。

幹土は微笑みながら、その笑顔をじっと見つめる。

けれど、そんな自分にふと気付いて、幹土は慌てて視線をずらしてホッケーの台を見た。何やってんだ、俺。

「きつと……昔の名残ってやつだな」

そう囁いて、苦笑する。しかし、その時突然、バンッ、と大きな音と共に、足元にマレットが回転し転がってきた。視線を上げる。

「大丈夫、澄子？」

駆け寄る幸美に、澄子は自分の指を押さえながら、痛って……と、唇を結ぶ。その細い指を伝う赤い雫。

「どうした!？」

幹土は目を見開いて、立ち上がって澄子の横に屈む。

「大丈夫だ。突き指……かな」

痛みをかみ殺しながらつぶやく澄子に、幹土は

「大丈夫って……結構ひどいんじゃないのか、これ」

と、指を押さえる彼女の手に、自分の手を重ねる。

「突き指って確か……引つ張ると良いんじゃないかなかったっけ」

起き上がった基喜が、ぼつりとつぶやく。すると、「いつの時代の噂だ、馬鹿」と春芳が言い、

「突き指したら、冷やすのが普通だろ。誰か、ビニール袋持ってきてくれ」

「幸美、持ってきてくれ」

幹土はすぐにそう言うが、幸美は、「大丈夫?」と心配げに、澄子の背中に手を当てたまま動かない。

「聞いているのか? と幹土はつぶやき、顔を険しくさせ、
「幸美、ビニール袋持ってきて来いって言うてるだろ!」

と怒鳴る。幸美は啞然と幹土を見る。

「大体お前、あんなに本気出すことないだろ! だから、こんなことになったんだぞ!」

澄子の手を掴んでそう叫ぶと、幸美は幹土を睨み、

「何よ、それ! 私はただ……!」

「……何、喧嘩してんだよ、お前ら」

ソファから立ち上がった基喜が、冷やかな視線で二人を見て、
「おい、加賀。……悪いが、持ってきてくれ。あるだろ、ビニール袋くらい」

と、背後の美代子へ、振り向かずと言う。うん、と美代子は戸惑いがちに頷くと、すぐに広間を出て行く。続いて、春芳が黙ってこちらへ振り返った後、何かを取りに小走りに出て行った。

「大丈夫だ、幹土……」

澄子は苦笑して、心配そうにのぞきこんでくる幹土の顔を押し退

かせる。そして、痛、と目元をぴくりとさせた。

「こんなエアホッケーぐらいで怪我してんじゃねえよ、馬鹿」

幹土は、テーブルにあるティッシュを引き抜き、それを彼女の指に巻き付ける。白い生地に赤い染みが広がり始め、それを握る幹土の指が濡れ始める。

幸美は、険しく眉をよせながら立ち上がると、二人から離れてソファーに座り、顔を背ける。

基喜は、やれやれとばかりに肩を竦めて、ソファーに踏ん反り返った。

「ほら、これで冷やせ」

氷を詰めたビニール袋を持ってきて、無表情で渡してくる春芳。サンキュ、と幹土は受け取って、澄子の手をテーブルに寝かせ、その上に袋を当てる。

「どうしたの？」

先生が美代子を携えて、真剣な顔で広間に入ってくる。澄子を見ると、その隣に膝をついて、冷やしている手をじっと見る。

「突き指ですよ。ただの」

澄子はそう言って、「大体、お前は大げさすぎる」と、横に居る幹土へ視線を向ける、それに無言で苦笑する幹土。

「大変だったんですよ、バカップルが喧嘩し出して。……こういう時こそ、収め役の教師がいてくれなきゃあ」

と、基喜が軽快に言って、頭の後ろで手を組んだ。

先生は目を伏せて、本当ね、と頷き、「肝心な時に、何もできないのよね、私」と自分にしか聞こえない声で言って、どこか寂しげな表情を浮べた。

夕食時になって、ようやく部屋から出てきたミキが、

「おやつのかきかき」

そうぼんやりつぶやいてふらふら階段を下りてくるのを捕まえ、食堂に連れて行った。

夕食中は、幸美とは会話することはなかった。

食事の片付けの後、春芳と基喜を伴って、風呂から出てくると、ちょうど先生とミキ、それに幸美の三人がこちらへ歩いてきた。

幹土は幸美をわざと見ないように、ミキにいつこりと笑みを向け、「今から、風呂か。この屋敷、男湯と女湯に分かれてるから、広々としてるぞ」

そう言つと、ミキは小首を上げてじつと幹土の顔を見つめた後、

「阿呆ね、兄さんって」

ぽつりとつぶやいた。

胸にぐさりと来るものを感じて、幹土は力なく笑いながら、どういうこと？ とつぶやく。

「確かに阿呆だ、幹土は」

横で頷いている基喜に、お前が言つか、と睨む。

「確かに幹土君は阿呆だけど、ミキちゃん、そんな風に言う事ないんじゃないの？」

あんたも言ってるから、とつぶやく。

「とにかく、行きましよう。おばさま」

ミキが、無表情でこちらを見遣りながら、顔をぴくぴくと悲しく引きつらせた先生の腕を引いて、女湯の暖簾を潜っていく。ぽつんと一人残される幸美。彼女は我に返って後に続こうとするが、

「行くぞ、春芳」

基喜がその前をいき、赤い暖簾を潜ろうとする。その襟首を掴んで、ずるずると引きずっていく春芳は、意味ありげな視線を向けてくると、廊下の奥へ消えていった。二人だけ、ぽつんと廊下に残される。

「別に、怒ってないから」

俯いていた幸美が、にっこりと笑って顔を上げた。

「悪かったよ」

幹土は視線を逸らす。すると、幸美は、幹土の顔に自分の顔を近づけてきた。そして、

「阿呆」

「お前まで言うか」

思わず顔を退けて、眉をしかめる。

「だって幹土、本当は仲直りしたいくせに、自分からじゃ何にも言うてくれないんだもん。変に意地張ってないで、素直に、私とまたいちやつきたいです、とおっしゃいなさい」

はいはい、いちやつきたいですよ、俺は、と幹土は唇を笑わせて肩をすくめる。

「それで、良し。じゃあ、私は入ってくるから、出てきたら一緒にアイス食べよ」

幹土は「OK」と吹っ切れたように笑って、歩き出す。幸美は暖簾を片手で上げたまま、幹土の背中へしばらく微笑を向けていたが、徐々に表情を消していった。

「……幹土の馬鹿。ホントはめっちゃくちゃ怒ってたんだから」

雑誌をベッドに広げていると、突然ドアがノックされた。

「はい」

ドアを開くとそこには、Ｔシャツにトレーニングウェアという身なりの澄子が、長い髪を結えて、そつぽを向いて立っていた。

「何だ？ そんな照れ臭そうな顔して」

「誰もそんな顔してない！……とりあえず、入るぞ」

彼女の髪から、シャンプーの匂いが鼻を掠めて、胸がどくんと一鳴りする。

「肝試しに行かないか？」

ベッドに腰を下ろし、澄子は二重瞼をこちらに向ける。

肝試し？

「……俺は勘弁しておくよ。……こんな所まで来て、肝試しかよ、お前……」

「だって、つまらないだろ。ここ、何にもなくて、刺激に乏しいんだよ」

「夜は静かに過ごすもんだ」

「……つまらない。行こう、幹土」

彼女は顔を不機嫌そうにして、じつとこちらを見てせがむ。

「仕方ねえなあ。でも、二人で行くのかよ」

「それはつまらないに決まってる。誰か誘おう」

その時、ちょうど良いところに、春芳がドアをノックしてきた。

「幹土。開けるぞ。良いか？」

「OKだ」

澄子が、勝手にそう言う。春芳は、少し躊躇したのか、ノブを回したまま動かなかったが、すぐにドアは開いた。

春芳は入ってくると、勝手に部屋の隅の、机の下の椅子に座った。眼鏡をかけていない所為か、表情の無機質さに拍車がかかっている。

「じゃあ、外海君にも、一緒についてきてもらおうか」

これみよがしにそう提案する鈴木。春芳は、二人の顔を交互に見て、

「どこ行くんだよ、お前達」

そう訊いた。幹土は、肝試しだつてさ、と肩を竦ませ、「やっぱりあそこしかないか」とつぶやく。すると、澄子が口を開き、

「夜は外へ出ないように約束したから、あと残っているのは、」

別棟か、と春芳がつぶやいた。澄子が「そうそう」と満足げに頷く。

「確かにあんた、別棟に行きたいって、昼間零してたな」

春芳は、澄子にそうつぶつきらばうに言う。

「とにかく、別棟。雰囲気出でて、凄く面白そう」

澄子はそう言って、口元をにやけさせる。

……どうせ、怖がっている俺を横からからかってやろう、とでも思ってるんだろう。

いいさ、返り討ちにしてやる、と幹土は笑う。

三人が部屋を出て、階段の前を通り過ぎた時、

「あれ？ どこ行くの？」

階段を上ってきた美代子と、鉢合わせした。

彼女は、ノースリーブの青いシャツに、ホットパンツという身軽さで、風呂帰りなのか、首にタオルをかけていた。

彼女は明るい笑顔を浮べていて、昼間よりはずつと打ち解けてくれているみたいだった。本当は結構明るい女の子なのかも、と少し身近に感じたりする。

澄子は悪戯っぽい笑みで、肝試しだ、とつぶやいた。春芳も、「そういうことだから、今から別棟に行くことになった」

ぶっきらぼうにそう説明する。

すると、面白そうね、と美代子は首からタオルを下ろした。

「山奥まで来て、どうしてこんなことしなくちゃいけないんだ」
「山奥だから、だよ。こんな幻想的な雰囲気の場合でやるから、面白んだ」

母屋と別棟の二階の廊下を結ぶ、細い空中廊下を歩いていると、窓から中庭が見える、そしてその先に、霞がかった緑の色彩が広がっていた。

幹土はそれを見て、確かに幻想的だよな、と感慨深げに言う。

「この建物だって、すごく雰囲気出てるよ」

美代子が言うと、

「そうだな。この洋館、ゴシック様式だし、かなり本格的だからな」
春芳が廊下の隅々を、機械的な目で見渡す。

「中庭から続く、別棟の入り口のペディメントなんか、相当装飾が凝っていたし」

独り言のようにつぶやく春芳の、ぼんやりと薄く浮き上がった顔が、気のせいかな、どこか楽しそうに見えた。

……春芳は普段、誰かとつるんで楽しそうにすることなんかないから、誘ってみて正解だったかも。

幹土は横顔を見ながら、そんなことを考える。

別棟の扉の前まで来ると、幹土は、懐から鍵束を取り出し開いた。

別棟の廊下は、窓から差す月明かりに、空中廊下よりもいくらか明るい。

「扉、開けたままにしておこう」

澄子が震えた声でそう言っ、て、扉を壁際で固定させる。……こいつ、怖がつてるな。

春芳へ視線を移してみると、彼は動じた様子もなく、さつさと廊下を進み始めている。さすがというか、何というか。その時、突然腕を引っ張られる。美代子だった。

「やっぱりやめた方が……」

「なら、一人で帰れば？」

そう悪戯っぽく笑って言っ、と、腕を握ったまま、うつつ、と泣きそうな声で唸る美代子。

幹土は歩きながら、窓の欄干にそつと指で触れてみる。月明かりに指先を掲げると、灰色の粉がこびり付いていた。

……随分長い間、人は入ってなかったみたいだな。

一ヶ月に数度、叔父さんに雇われた人がここへ掃除に来るといつても、比重は母屋の方が断然大きいのだろう。別棟の掃除は、もしかしたら数ヶ月に一度程度なのかも。

そこで、春芳から大分離れていることに気付き、

「おい、ちよつと待てよ」

と声をかける。それでも、春芳は立ち止まらず、さつさと進んでいく。

「何、あいつ」

無意識に幹土にべつたり体を寄せている澄子が、敗北感を否めないのか、つまらなげに声を上げる。こんなはずじゃなかったのに、とそんな感じ。

とはいっても、春芳のその動じない様子があつてこそ、幹土達の足が進んでいることも事実で。と、その時、突然幹土は呼吸が乱れてきたのを感じ、唇に手を当てた。

……まずい。やっぱり、来なければ良かったか？

「どうした？　もしかして、怖いのか？」

澄子が薄暗い中で、悪戯っぽい笑みをのぞかせた。

「怖くなんて、ない……」

その声に本当に余裕がないことを感じたのか、澄子の目が真剣になる。

「大丈夫か、幹土？」

ああ、と幹土は苦しげに笑って、肩に置かれた彼女の手を払った。おい、と彼女が追及するのを無視し、幹土は逃げるように早足で春芳に近づき、その後を歩く。手持ちぶたさになった美代子は、しがみつく対象を、慌てて澄子の腕に変えた。

「ここ、何の部屋だ？」

春芳が白いドアが並んでいるのを見遣って、つぶやく。

「確か、この階には使用人の部屋があつて、そんで下の階には書斎があるらしい」

幹土は、深呼吸を繰り返して、息をようやく落ち着かせてから、春芳の隣に並んだ。

「お前、大丈夫か？」

突然の春芳の言葉に、「え？」と声を上げる。

「さつきから荒い息遣いが聞こえてたけど、喘息もちだったか、お前？」

「いや、少し空気が悪いだけだよ」

慌ててそう取り繕う幹土に、春芳は何かあるとすぐ見抜いたのか、

「帰るか」

突然足を止めた。そして、振り返って、背後の二人に、

「何にもなさそうだし、この辺で帰らないか」

と、提案する。澄子は美代子を付着させたまま、駆け寄ってきて、

「嫌だ」

と断固としてつぶやい。すると、春芳は眉をひそめ、

「明日の朝にでも、また来れば良いだろ」

と、有無を言わせない声で言った。

澄子は唸って春芳を睨んだが、わかったよ、とつぶやく。

「幹土は何か、調子悪そうだしな」

「いや、俺は大丈夫だよ」

澄子の声に、慌ててそう言う幹土。

「せっかく来たんだし、もう少し回ってこうぜ」

幹土は、ほら行くぞ、と歩き出す。

「お前、本当に大丈夫なのか？」

春芳が近寄ってきて言う。

「だから、平気だって」

「……みたいだな。さっきは、どうしたのかと思ったぞ」

春芳は、安心したようにそう言った。その背後で、

「ったく。何だ、あの男」

澄子は、春芳の後頭部を睨む。

「外海君、ああぶつきらぼうだけど、結構優しい人だから、怒らないであげてね」

美代子は澄子の腕を胸に抱えながら、そう言う。

廊下の突き当たりまで来ると、その横に階段があり、側の窓から、ぼんやりと白い光が床へ垂れている。

すると、突然春芳が、「光なしでは、もう限界だろう」と言って、懐中電灯を取り出して、点けた。明りなしで回ろうという取り決めはあっけなく破られる。

あーっ！ と、澄子が声を上げたが、懐中電灯の光を頼りにさつさと階段を下り始める春芳を見ると、彼女は溜息を吐いて、もういいよ、とあきらめたように肩を下げた。

幹土は笑いながら、肝試しには変わりないだろ、と彼女の肩を慰めるように叩く。

一階の廊下の一番奥には、大きな木扉があった。それに空いた金色の鍵穴を見て、

「ここが、屋敷の主人が使ってた書斎だってさ」

そう言つて鍵を差して捻ると、扉を開いた。

鉄の軋む音が廊下に響いて、膨大な本を腹に収めた巨大な本棚が現れて、四人の視界を塞いだ。

「すごい……すごいぞ」

春芳は感嘆の声をもらしながら、奥へと進む。

幹土は窓際にある机に近寄ると、横の壁からスイッチを探し出した。広い書斎が淡い色に明るくなる。

幹土は机の前の肘掛け椅子に座つて、近づいてきて横に立った澄子を見遣る。

「……座り心地、最高だ」

幹土はそう言う。

「……幹土、今日はありがとう」

ふとそんなつぶやきが聞こえた。

「俺は、別に何にもしてないけど」

「幸美とは仲直りしたのか？」

「……ああ、さっき風呂場の前で……て、いけね。一緒にアイス食べる約束してたんだった」

あいつ拗ねてるだろうなあ、とつぶやく。それを見て、澄子が、ふ、と笑みを零し、

「幸美には、頭が上がないんだな、お前は」

すると、幹土は視線を伏せ、

「……ああ。あいつは、俺を救ってくれた恩人だから」

澄子は、「何だよ、それ」と真顔で言ってくる。

「俺がまだ小学生の時、すっごくシヨクなことがあつてさ。塞ぎ込んだじゃったんだよ。ゲロ痩せて、栄養失調になって、医者は、こりやばいぞと血相変えてさ」

そんな時、幸美が俺ん家に来て。何度もチャイム鳴らして出ないから……あいつ、家に無断で入り込んだんだよ。

「確かに幸美は、幹土のことになると、何するかわかんないしな」

澄子はそう言つて、笑う。

「……それでそのまま、俺の部屋のドアを開けて、隅で縮こまつて俺へ、怒鳴り散らしたんだよ。泣き喚いたんだよ。何言つてたのか、もう覚えてないけど、それが良く効いてさ。……こうして今、元気にやつてるのは、幸美が居てくれたおかげなんだ」

そう一気に喋ると、澄子は穏やかな笑みを浮べて、なるほどな、とつぶやき、

「お前が幸美をすごく大切にするのは、そういう訳か」

「だから、俺、幸美を裏切ることだけはしちゃいけないんだ」

幹土はそう言つて、澄子の横顔をどこか寂しげに見た。

「でも……俺を救ってくれたのは、幸美だけじゃない。お前らが、居てくれるから、今の俺はやっていけてるんだ。幸美だけじゃない」

「そんなこと面と向かつて言うもんじゃない」

澄子はそう言つて、笑う。

「でも、本当のことだから。……もし、お前らがいなかったら、俺はとつくに……」

そうつぶやいたところで、春芳が本棚から戻ってきて、うるさくて本が読めないんだが、と言いにくそうにつぶやいた。

「結局、何にも不思議なことはなかったね」

そう零しながら、扉を出る美代子に、

「そりゃ、ある訳ないさ。肝試しは、単に雰囲気を堪能するものだからな」

そう言いながら澄子が続く。

幹土は扉の前に立ちながら、視界の隅に二人が入り口を出るのを捉え、そして、続いてこちらに来る春芳を見遣つて、

「電気消してくれよ」

窓際のスイッチを指差した。

「ああ、そうか」

春芳は振り向き、壁へ近寄ろうとする。しかし、その途端、何も見えなくなつた。

「停電だな」

「何でいきなり……」

空気が張り詰め、四人の心を緊張で締め付ける。どこかで、ことりと物音がした。

春芳はじつと耳を澄ませて辺りに視線をめぐらす。そして、

「確かに今、人の声がしたような……」

「おいおい。驚かすなよ」

幹土は、扉に背中を寄りかからせてそう言う。

「電気消したの、春芳君？」

澄子に身を寄せた美代子が震えた声でそう言い、春芳の影を見る。

「いや。俺じゃないよ」

その無機質な声に、澄子が、

「いや、どうかな。私達を驚かせて結構楽しんでるのかも」

そうからかうように言う。春芳は相手にせず、後ろへ振り返り、壁に近づく。

けれど、幹土は照明が点くのを待ち切れずに、気付けば懐中電灯を取り出して、春芳の背中を照らし上げていた。その時。驚いた。

机の横に、幼い少女が立ち、こちらへ顔を向けていた。黒い髪にカチューシャをして、大きな瞳でぼんやりこちらを見据えている。

黒いスカートからのぞく細い足が、微動だにせずそそり立ち、足先は黒く掻き消えていた。

消えた。その幻像は、春芳の、スイッチへと伸ばした腕の下で、薄く掻き消えた。それは、一瞬の出来事、瞼を瞬かせるほんの短い間の錯覚。

幹土は荒い息を零しながら、扉の上で背中をずれ落ちかけさせる。

幹土は、

「まさかな……」

そう唇を引きつらせて笑い、首を振った。

「どうした、幹土？」

様子がおかしいことに気付いたのか、春芳と澄子が同時に訊いて

くる。

「何でもないよ。もう行こう」

「汗びっしょりよ？」

美代子が持っていたタオルで、顔を拭いてくれる。

ありがとう、と幹土は無機質に答え、春芳へ視線を向ける。春芳は頷いて、再び電気を消した。

扉は甲高い音を立てて閉められた。施錠される重い振動が、鍵を握った手に伝わってきて、鼓動の激しい心臓をどくと強く高鳴らせた。

「どこ行ってたのよ！」

空中廊下から戻ってくると、幸美はちょうど自分の部屋へ帰って来たところで、こちらの姿を見つけた途端、大声を上げた。

「ちよつと、肝試しに……」

肝試しって……、と幸美はちらりと澄子の顔を見て視線を伏せた。そして、

「まあ、良いけどさ。……お化けとは会えたの？」

「あ……会っわけないだろ」

幹とは震えた声でつぶやく。

「鈴木と加賀の怖がりようはすごかったぞ。俺の腕にこう、膨らみを寄せて抱きついてきてさ」

そう言った途端、澄子と美代子から肘つきを食らう。

「勝手に変な描写付け足すな」

「最低、幹土君」

同時にそう言う二人。

春芳はそれを見て、やれやれというように、首を振りながら笑う。
「……自業自得ね」

幸美はそう言って、澄子と美代子に従えて、ずんずんと歩いて行ってしまう。その後ろで無言でついていく春芳。

「待ってくれよ」

そう手を伸ばしながら、うつうつ、と屈む幹土。廊下に誰もいなくなると、幹土は下を向いたまま、息を吐いた。ゆっくりと、後ろへ振り返る。

廊下の先には、たった今出てきたばかりの空中廊下の扉があつて、その隙間からかすかに黒い空気が漏れ出ている。

「……あれ、錯覚な訳ないよな」

確かに怖かったけれど、あの瞳の中に、黒い感情は感じられなかった。ただ霧のように存在感の薄い、とろんとした瞳だった。

「まさか、俺、祟られるわけじゃないよな」

そう言つて、やっと自分の口に笑みが戻った事を、指先で確かめると、すぐに幸美達の後を追った。

綺麗だった。軽やかに踊るその姿が。少女の手の先は宙へと伸び、花々を揺らす微風を指に纏わせる。

裸足で踊るその少女はくると回転して、フリルのついた黒いスカートが弧を描いた。

幹土は、それを上からじっと見下ろしていた。辺りは中庭で、母屋と別棟はあやふやな白い影となって、噴水や石畳の地面だけがはつきりと浮き上がっている。

……ミキさん？

そう思つてよく見つめてみるけれど、彼女はミキより一回り年下みたいだった。

彼女がくると回転すると、長い髪が日差しに煌めき、流れるような舞の軌跡が描かれる。立ち止まると、髪ははらりとその白いシャツへ降りた。

少女は、振り向く。その視線の先に幹土の透明な体は佇んでいて、二人は見詰め合った。けれど、その目に映っているのは、幹土の顔ではなく、ぼんやりとした青空だった。

彼女の瞳は、何かに期待を膨らませているように、艶々と輝いていて、その透明な輝きに、幹土は啞然とした。

……綺麗だ。

そう思つた時、彼女の髪が、ふわりと風に浮き上がり、幹土の透明な鼻先を撫でて。そして、夢は終わりを告げた。

「……なんだ、夢か」

定番の言葉をつぶやいてみた後、幹土はベッドの上で起き上がり、大きく欠伸する。そして、ふと視線を横へ向けた途端。

「うわっ！」

隣でかすかに寢息を立てている幸美に気付いて、声を上げる。

「あ、そうか……あのまま寝ちゃったんだな」

自分の服装を確認しながら、昨夜、二人でベッドに腰掛けて、話に夢中になってたことを思い出す。

彼女の髪を優しく梳くと、幹土は起き上がって、部屋を出た。そして一階へ下り、中庭に出る。

幹土は噴水に近づき、水の満たされていない石の底をのぞいた。

……夢に出てきた子、昨日のあの娘だよな。

あの背丈、そしてあの瞳。間違いない。

幹土はかすかに微笑みながら、身を引いた。

「不思議なところだな、この屋敷は」

そうつぶやきながら、中庭を見渡す。さわやかな朝の風に甘い匂いを乗せて、囲いの中の花々が同じ向きに頭を揺らせていた。

幹土は石のベンチに腰掛け、別棟を　昨日行った書斎の窓を見る。カーテンは引かれておらず、肘掛け椅子の背もたれが窓に顔を出していた。その時。

「み、き、と」

頭上から、明るげな声がして振り向くと、窓から幸美がのぞいてこちらに小さく手を振っていた。幹土は笑って、「おはよ」と手を振り返した。

「どうだ、俺の目玉焼きは」

基喜が、こげこげに焼かれた半熟の目玉焼きを、指差して言う。

幸美は黄身がべつたりと染み付いた自分の皿と、他の人の皿を見比べた後、一言、

「……あげる」

そう言って、その皿を幹土へ差し出した。幹土は眉をしかめ、黙ってフォークを刺して口に入れる。

「貴様！　俺がせっかく作った目玉焼きを！」

「お前が、「唯一」作った目玉焼き、だろ」

そう言って、幹土は手の付けていない自分の皿を幸美へ差し出す。ありがと、と幸美は受け取り、皿に載った形の良い目玉焼きにフォ

ークを当てる。

「慌てて作るからそうなるんだよ、基喜君」

朝食当番だった美代子が、寝坊で仕事を九割すっぱかした基喜へ、眉を寄せて言う。

いつも優しい美代子に言われると、基喜は少ししょんぼりとして、「悪かったよ、一人でやらせて。……だけど、どうして昨日は俺を誘ってくれなかったんだよ」

基喜は、恨みがましく美代子を見る。

美代子は「だって……」と幹土へ視線を向ける。

「お前な、ベッドにあんな本をたくさん広げて、にやけて寝てるどころ、加賀達に見られたら、シヨックだろ？」

「お前、見てたのかっ!？」

牛乳を噴き出す基喜。隣の美代子が、きたないっ、と即座に皿をどける。

「誘おうと思って部屋の前まで来て、ノックしたんだけど出てこないから、そつとドアの隙間からのぞいてみたら……んなことやってるし。どうやら奴は寝てるようだ、って皆には言って引き返したんだよ」

「ふざけるな! 誰がエロ本なんかベッドに並べて、ダイブするかよ!」

基喜は真顔で、墓穴を掘る。

隣で、「そうなの、基喜君?」と青ざめた顔で、美代子と言う。

ち、違う、これは誤解だ、陰謀だ、と両手を左右へ激しく平行移動させる基喜。

「大体、幹土だって、何冊か持ってきてるだろ!」

「持ってきていないわよ」

幸美が、平然と答える。

「鞆には、必要最低限のものしか入ってないんだもの。幹土って、本当に、そういうのには興味がないのよね」

そつもあつさり言われるとかえって情けないのか、幹土は、そん

なことないさ、と眉をしかめて、パンをかじる。

「でも幹土君、高校の時は、よくヌードの絵を見てたじゃない。私はてつきり好きなのかと思ってたけど」

静かに食事を進めていた先生が突然、にやりとして言った。幹土は思わずパンを噛まずに飲み込み、喉に四角いでっぱりが通り過ぎる。

「熱心な目で、こう……じっと、色んな部分を見ててねえ」

ジェスチャーを付けて説明する先生。

幹土はグラスを慌てて煽り、

「何言ってるんですか！ あれは、あくまでも美術への興味で見たんですよ！」

「そうかしら？」

先生は、両肩をわざとらしく上げる。

「おいおい。幹土、どういうことだよ」

基喜が、これみよがしに幹土に食いかかる。

幹土は顔を赤らめて、「だから、」とつぶやくが、

「そう言えば、確かに幹土、裸婦の画集、いっぱい持ってたよね」

口元に指先を当てて宙を見る幸美や、

「むつつりだったんだな、幹土は」

見損なったとばかりに首を振る鈴木とか、

「お前達、幹土のプライベートにあまり口を挟んだら可愛そうだろう」

少し頬を赤くして弁護する春芳。

美代子はというと、無言で、意外そうに顔をじっと見つめてくる。最後のとどめとばかりに、隣のミキが、「変態さん」とつぶやき、笑顔を向けてくる。本気でぐさりときた。

幹土は、「変態さん、か……」と彼女に力ない笑みを向けて、うな垂れた。

朝食の片付けをやっていると、幸美達が来て、

「暇だから、ちょっと別棟の書斎まで行ってくるわ」

そう言つて、後から幹土もおいでよ、と厨房を出て行った。

「ねえ、幹土兄さん」

いつの間にか立っていたのか、傍らにミキが居る。

「幸美達と一緒に رفت たんじゃなかったのかよ」

ミキは、どこか不機嫌そうな顔で、首を振る。

「書斎なんて行つてもつまらないもの」

幹土はエプロンを外して、冷蔵庫にかけてあつたタオルで手を拭く。そして、テーブルにエプロンを畳んで置いた。

「そんなこと言わずに行こうよ」

その背中を押して、厨房を出た。

「いやつたら嫌」

腕を払つて、激しく首を振るミキ。幹土は、頭を掻く。

……なんて、わがままなんだ。

そう思つたけれど、本心を言つたら、後で仕返しに悪戯をするとも限らないし。

とりあえず幹土は広間へ連れて行つて、彼女にお茶を淹れてあげた。ついでに、クッキーもつけてやる。

「……良い香り。ありがとう、幹土兄さん」

ようやくご機嫌を直したのか、ミキはカップを鼻に近づけ、幸美に借りただだぼのジーパンをふらふらと揺らせて鼻歌交じりにクッキーを頬張り始める。

「じゃあ、ミキさん。俺はちよつと電話するから」

電話？ 口元にクッキーの粕をつけたミキが小首を傾げる。

「ほら、昨日、言つてた義一叔父さんにだよ。少し聞きたいことがあるんだ。ミキさんも、どう？」

そう訊いてみると、ミキは脇を見て少し黙つた後、

「私はいいです」

とぶつきらばうに言つて、クッキーを口の端でがりつと頬張つた。
「そう……」

幹土はそう言いながら、ダイヤルの穴をまたポチツとしそうになつて、「あ、そうか」と苦笑しながらそれに手をかけて回す。

数回の呼び出し音の後、「もしもし、天宮です」とどこか威厳のある声が響いてきた。仕事モードに入ってるな、こりゃ。

「忙しい中、ごめん。ちよつと気になる事があつて」

「なんだ？　今、出勤の仕度してるんだ。手短にしてくれ」

「あ、うん。……あのさ、この洋館に住んでた家族つて、もう世界してるの？」

叔父さんの息遣いが聞こえなくなつて、しばらくした後、どこか暗い声が返ってきた。

「……死んでしまったよ。十年くらい前に、両親の後を追つて、娘が屋敷で息を引き取つた。まだ七歳でね」

……七歳。

「その娘つて、病氣持ちだったのか？」

ああ、と叔父さんの低い声が返ってくる。

「彼女の両親、どうして亡くなつたんだ？」

「その……事故……だ」

叔父さんの声に、幹土は目を見開く。

反射的に蘇る、ある凄惨な光景。一人の女性が、愛する男性の、もう動かないその体へとしがみつき、泣き叫んでいる。

「聞してるのか、幹土？　お前、大丈夫か……？」

心配そうなその声に、はつと我に返つて、

「なんでもない。ちよつと考え事してた」

そう言つて、幹土は真顔になる。

「……なあ、幹土。できれば、この話は今でない時にしてほしいんだが」

その声が、震えていた。幹土は慌てて、

「ごめんな、こんなこと話して。仕事に差し支えたら困るから、もう切るよ」

「……ああ、そうしてくれると助かるよ。また夜にかけ直せ。その

時に、詳しく話してやるから。じゃあな、友達やミキちゃんによるしくな」

叔父さんは、感情を帯びた声を再び冷静なものへと切り換えて、切った。

……事故で死んだのか。彼女の両親は。

幹土は受話器を置いたままじっとしていたが、ふとソファの方へ向いた。

「ミキさん？」

クッキーを頬張っていたはずの彼女の姿が、いつの間にか消えて、ティーカップの中で、冷めた紅茶が、静かに波紋を立てていた。

すぐに中庭へ出てみると、彼女は渡り廊下を別棟の方へ歩いていて、幹土は、「ミキさん！」と彼女に駆け寄る。

肩を並べると、

「何ですか？」

ミキは、不機嫌に戻った顔をこちらへ振り向けた。

「どうして、突然出て行っただよ」

息を切らせてそう訊く。

「何となく、出て行きたくなっただんです」

「何となくって……」

幹土は別棟の扉を開いて、彼女を中へ促す。

「つまらない？」

「つまらないです」

廊下を歩きながら、はつきりとそう答えるミキ。気難しい娘だな、と幹土は溜息を吐く。しばらく歩きながら、

「……お父さんとお母さんは、元気かな？」

会話を弾ませようと、ふとそんなことを訊いてみる。

ミキは少し黙って何かを考えた後、

「……知らないわ」

と、無機質な声で返してきた。

……知らない。なんだそりゃ。

幹土は苦笑して、じゃあ、とつぶやき、

「別の話。ミキさん、学校で何か部活動やってるのかな？」

「……知らない」

不機嫌そうにただそうつぶやくミキに、幹土は、参ったな、と肩をすくめる。

しかしその時、ぽつりと、

「だって私、学校なんて行ってないもの」

そう聞こえて、幹土はミキの顔を見遣って足を止める。

ミキはその横を通り過ぎ、

「行きたくても行けないの」

とつぶやいた。そして、立ち止まって、

「幹土兄さんは、学校、行つてたの？」

振り向かずに訊いてくる。

「……行つてるよ。今は大学」

「良いわね、幹土兄さんは」

振り向いたミキの顔はどこか寂しげだった。ミキは無言で幹土を見た後、睫を伏せて俯き、長い黒髪が胸へと垂れ下がる。

「どうして、ミキさんは……」

幹土は呆然とつぶやく。

「幹土兄さんには、関係ないわ。行きましょう」

ミキは途端に明るい笑みを浮べて、幹土の腕を引いて歩き出す。

幹土は彼女の横顔を見ながら、表情を暗くした。

……今、気付いた。この子がいつもにこにここと笑ってるのは、きっと……。

「幹土兄さん、もっと早く歩けないの、あなた」

そう振り向いて、大きな瞳をにっこりと笑わせるミキ。

彼女が振り向けるその無邪気な笑みが、胸をちくちくと突き刺した。

ミキはしばらく歩いて、幹土の足が遅いのに痺れを切らしたのか、

もういいわ、とばかりに腕を振り解き、背中で手を組んで鼻歌交じりに歩き出す。

……ミキさん。

何に悩んでいるのか、それが聞きたくて、でも彼女の笑みはその問いを寄せ付けないように、いつも崩れることがなくて。

幹土は首を振って、横の窓へ視線を向けた。林が遠くに見えて、幹土は何とはなしにそれに近づく。その途端、目を見開き　そしてすぐに、穏やかに微笑んだ。彼女が居た。

少女は、カチューシャを頭から引き抜いて、長い髪は紺の輪をすり抜けて、ひらひらとそよいだ。

彼女はこちらに背を向けて無言で林の方へ歩き出し、その前でぴたりと足を止める。そして、じっと佇んだ。

「君が、あの　」

幹土は穏やかに微笑んだまま、そうつぶやきかける。

黒いスカートをなびかせて、彼女はそっと振り向いた。その無表情な顔が少し微笑んで　そして、瞼を閉じると。もう消えていた。幹土は窓の鍵を解いて、開く。

流れ込む風。くせの激しい髪が逆立ち、幹土は目を伏せて、右手を窓の隙間から外へ出した。

手首に当たる日差し。強い風が腕を揺らし、鉄棒の冷たい感触が肌に当たる。

「　似ているな」

幹土はそうつぶやいて手を引き抜き、すつとジーパンのポケットへしのばせると、中にあるそれに指先を当てた。

じつと窓の外を見ていた幹土はふと我に返り、後ろへ振り向いた。

「ミキさん？」

廊下にはもう、彼女の姿はなかった。

……ミキさん、怒って先に行っちゃったのかな。

幹土は書斎へと歩き始めるが、ふと足を止めた。

「……行ってみるか」

くるりと体の向きを変えて、廊下の先の階段へと向かう。三階まで上がると、その廊下には大きな窓が連なっていて、そこから見える山が朝の日差しに輝いて綺麗だった。

幹土は廊下の奥へ歩いていき、大きな木扉の前で立ち止まった。そして、鍵を差し込む。

「……失礼します」

一応そう断ってからノブを手前に引き、中へ入った。

……ここが、この屋敷の主人が使ってた部屋か。

薄暗いその部屋を見渡す。

木棚がそろって左の壁に寄せられて、向かい合うように右の壁には、額物に入った絵が掛けられていた。

天井にかかった金縁の吊り輪の照明が、奥の窓から差し込む日差しに光っている。

幹土はそのまま、窓際の仕事机に近づいて、その上に腰を下ろした。

そして、額縁を見遣ると、それは。

「中庭か、これ？」

中央には噴水、背景には別棟。植木の鮮やかなグリーンに、点々と散りばめられた花々の色。

幹土は机から立ち上がり、それを迂回して、大きな肘掛椅子に座った。

「これも……座り心地、最高だな」

そう言って、頭を背もたれから後ろへ逆さに垂らし、カーテンを引いてみた。逆さになった中庭の景色が、視界に広がる。

「……あそこから描いたのか」

今朝に座った、石のベンチを見遣る。

幹土は背後へ垂れた頭を持ち上げると、正面を向いた。そして。

「……なっ」

息を吞んで、見る。彼女の瞳を。間近で。

少女は、机に身を乗り出し、幹土の顔へ自身の白い顔を近づけて、笑っていた。

彼女の瞳は爛々と光り、純粋な興味に満ちた視線を幹土の顔へ向けていて。

幹土の腕が震えて、肘掛から垂れ下がる。

少女の唇が、三日月に歪んだ。その隙間から声なき笑いが零れて、そして、瞬きすると同時に消える。

幹土は肩を激しく上下させ、椅子に深く背中を沈めて、天井を見た。

「あの娘は……」

間近で見た少女の顔は白く、その瞳は大きかった。それから鼻は細く、眉毛は少し濃くて 何から何まであの人にとっくりだった。……母さんに。

部屋を出て、扉を施錠していると、背後から、「おい」と怒鳴り声が響いてきた。振り向くと、廊下の先に、鈴木 of 険しい顔が小さく見えた。

「どこ行つてたんだよ」

鈴木は大腿で近づいてくる。

「……少し用があつてな」

「ずっと待つても来ないから、探してみれば、こんなところに」

鈴木は、幹土の背後の扉を見遣つて、眉をしかめる。

「何だ、ここ」

「この屋敷の昔の主人の部屋だよ。別に何もないさ」

そう言つて、幹土は、「さてと」と歩き出す。

……次は、下の階の、使用人の部屋でも見てみるか。

「ちよつと待て。どこ行くんだ？」

幹土の腕をひんやりと冷たい鈴木の手が掴んだ。引つ張られる。その時、

「あ……」

突然視界がぐらりと傾いた。足の力が抜け、膝が廊下の木の床に付く。

「痛……」

頭を押さえた。針が頭の芯を突いているような、ちくちくとした痛みが起こる。

「大丈夫か、お前」

鈴木が、しゃがんで顔の高さを合わせ、覗き込んでくる。

「眩暈だよ、ただの」

そう言つて、幹土は立ち上がる。その際に、痛、と歯を噛み締める。

「部屋で休んだ方が良くないのか？」

鈴木が肩に手を当ててくる。

「平気だよ。幸美が待つてるし」

そう言つて、幹土は肩に載った鈴木の手を剥がそうとした。

「今は、幸美のことより、体の方が大事だろ」

強くそう言ってくる鈴木へ、

「良いんだよ、別に。……お前には、関係ないだろ」

そう言つて、肩を動かして無理矢理払い除けると、歩き出す。

「何だ、それ……関係ないって……」

すると、腕を強く掴まれ、無理に振り向かせられる。

「何が関係ないだよ！ 昨日、お前、私に自分のこと話してくれただろ！ 関係ないって何だよ！」

啞然として、鈴木の怒った顔を見る。彼女はそう言った後、懇願するような視線を向けてきて、幹土はそれから逃れるように目を伏せて、

「離せよ」

静かにそうつぶやく。すると、鈴木は歯を噛み締めたまま、無言で離れた。

「もう平気だつて言ってるだろ。……今日のお前、変だぞ」
そう言つと、

「……関係なくなんて、ない……」

彼女はそう震えた声でつぶやいて　その結えられた長い髪が幹土の肩に触れた。幹土は無言で、間近に近づいた彼女の顔を見つめる。

「私……本当は、幹土が良かったんだ」

彼女の言葉に、幹土は視線を逸らす。

「好きじゃないんだよ、私。今の彼氏なんて」

「……なら、何で付き合っただよ。相手は気づくぞ、いつか」

そう言つと、鈴木は少し微笑んだ。

「もう気付いてるみたい」

その声に、幹土は唇を結ぶ。

「幹土には、幸美だけしかないってわかってる。……けど」

彼女の息が、首筋にかかってくる。

「最初から、駄目だってわかってても、どうしても。……不可抗力ってやつだよ」

すると、幹土は視線を逸らしたまま、口を開く。

「俺はな鈴木、最初、幸美をただの家族としか見ていなかった。……他に好きなやつがいたんだ。だけど、俺は幸美と付き合うことにした」

そう言つて、幹土は憂いのこもった視線で鈴木を見る。

「幸美が、恩人だから？」

静かに訊いてくる。

「違う、大事だったからだ。……幸美の存在が。彼女を手放したくなかった」

幹土はそうつぶやくと、そつと鈴木の肩に手を回し、胸に引き寄せた。左肩に彼女の頭が載る。

「……初めてだ。幹土の腕の中」

細い体が腕の中でかすかに揺らぐ。幹土は寂しげに微笑み、

「……もつと早く言ってくれば、きっと俺は……」

そつつぶやき、彼女の後頭部を撫でた。艶々とした髪の柔らかさ

が手の平を滑る。

「私はずっとお前が好きだった」

鈴木はそう囁いた。幹土は黙って彼女の体を離し、彼女を見据える。

「俺……今は、幸美だから」

そう言つと、わかつてる、というように鈴木は静かに頷く。

「でも、あいつは俺がいる所為で、苦しんでる」

幹土は、つらそうに目を落として、頭を押さえた。

……そう。俺の存在が、幸美を苦しめている。

「違つだろ。幸美はお前がいないと……」

「俺がいるからだ。いつか俺は、幸美の心を壊してしまうかもしれない。けど、彼女がそれを望むなら」

幹土はそう言つと、笑みを鈴木へ向け、

「お前から言つてくるとは、正直意外だったけど……嬉しかった。でも」

……どうして、今になってそんな事を。遅すぎる。

「遅えよ、馬鹿」

幹土はそうつぶやいて、齒を噛み締め、鈴木の横を通り過ぎた。すると、

「幸美がいたから、私は何もできなかったんだ。……出来る訳、ないだろ」

背中にかかる鈴木の涙声に、幹土は立ち止まり、

「この話は、もうなかったことに」

そう強く言つて、廊下を歩き去った。

気付いてみれば、頭痛は消えていて。けれど、代わりに胸が軋んで痛みを訴えていた。

「今日は、やたらきつかったな」

プシュッと缶を開ける音が電話越しに伝わってくる。

「ご苦労様」

「……どうだ？ そっちで何か変わったことはあったか？」

「ありまくったよ。……ホントに色々」

……怪奇現象体験するわ、変な夢見るわ、彼女の親友に告白されるわ……。列挙しようにも切がない。幹土は溜息を吐く。

「ははは、そっちも大変みたいだな。……ミキちゃんもう寝たか？」

「いや。今、皆とわいわいやってる」

ビール缶とお菓子で埋め尽くされたテーブルを囲って、宴会をしている皆の中に、いつの間にか溶け込んでいるミキを見遣る。

「……のようだな。あまり飲み過ぎるなよ？ 明日、運転手がいなくなったら帰れないぞ」

「わかってるって」

「……それで、今朝の話、なんだが」

こん、と缶をテーブルに強く下ろすのが耳に伝わってくる。

「……ああ。ここに住んでた家族の事、教えてくれ」

よし、と叔父さんは言って、深く息を吸った後語り始めた。

屋敷に住んでいた夫婦には一人娘がいて、彼女は生まれつき病弱で、屋敷から出ることは許されなかった。

年を経ても、同い年の友達はおらず、話し相手は、付き添いの使用人だけ。

そんな彼女も、体の調子の良い時は、中庭へ出て、よく一人で遊んでいた。体は弱いけれど、心は明るくて、芯の強い子だった。母親にそっくりだったよ、彼女は。

彼女が六歳の時、両親が交通事故で亡くなった。ちょうどその頃から、彼女の容態も悪くなってな。使用人は当然、真実を打ち明けることができず、彼女はずっとベッドの中で二人の帰りを待ち続けた。

そして、そのまま 彼女は両親の名を呼びながら。亡くなったんだ。七歳でだぞ。七歳で、まだ外の世界へ一歩も足を踏み出せずに。同じ景色を、同じ時間を繰り返し味わい続けた。なのに、彼女

は一度も笑顔を崩したこともなく。にっこりとその微笑みを浮べたまま、息を引き取ったんだ。

叔父さんの震える声に、いつしか嗚咽が交じり始めていた。今までに一度だってこんな声は聞いたことがない。

「……叔父さん？」

「私は本当に、何もしてやれなかった。うんざりしたもんだよ、自分に」

怒りに震えた声が、く、と齒軋りする音と混じる。

「……叔父さんってさ」

幹土はぼつりとつぶやく。

「すぐに自分を責める癖があるんだよな。色んな事に関して背負いすぎなんだよ。もっと、肩の荷、下ろせよ」

幹土の声が、同じように震えていた。

すると、叔父さんは無言になり、

「……そうかもしれないな。いや、全くその通りだ」

鼻水を嚙る音を立てて、そう笑った。

「自分を責めたところで……彼女はもういないのだから、どうにもならないんだよな」

叔父さんはそうつぶやき、

「……幹土は、やっぱり私を一番良く知っているな。……けど、幹土、」

お前だって、そうだ。……お前は私によく似ている。背負いすぎるな。

そう言って、叔父さんは黙った。

……背負いすぎるな、か。

こうして電話をしていながらも、頭に浮かんでくる一人の少女の姿。

……俺は一体、彼女の何を知って、何を背負おうとしてるんだろう。それとも、単なる興味か？ そう思って、いや、違う、とすぐさま否定する。

……彼女と出会うその一瞬が、強く心を惹き付けてくるから。だから俺は、彼女を知ろうと心を動かせたんだ。

幹土は、目を閉じて、ふ、と微笑むと、

「余計なお世話だぞ、叔父さん。俺は確かにそっちに似て、神経質で、自分で何でも抱え込む癖がある。……ただどな、俺にはそんな自分を支えてくれる大切な人がいるんだ。だから、大丈夫」

そう言うのと、叔父さんは嘖き出し、

「そんなことを真面目に話せるお前が羨ましいよ。……お前の神経質は、私よりまだ軽いらしいな」

幹土は、そうみたいだ、と笑い、

「ごめんな。悲しい事思い出せちゃって」

「良いんだよ。……私はもう、かれこれ十年程、その屋敷へ足を伸ばしていないんだが、今でもはつきりと、あの景色と、暮らしていた住人のことは覚えている。……今ではもう誰も住んでいない古びた屋敷でも、かつて暮らしていた人々にとっては、本当に思い入れの深い場所だったんだ」

ああ、わかるよ、と幹土は小さくつぶやく。

「だから、幹土も、彼らの大切にしていた屋敷を同じように 大切に扱って欲しい」

そう言うってから、こんなこと言うの、柄でもないんだがな、と叔父さんは笑う。

幹土は、叔父さんの言葉に、「俺は……」とつぶやいて視線を伏せた。

「ごめん、叔父さん。……俺、今日、昔の住人の部屋に勝手に入ってたんだ。使ってた人はこの世にはもういないんだし、いいだろうって軽い気持ちで……」

ごめんな、ともう一度つぶやく。すると、叔父さんは、ふ、と笑みを漏らし、

「別に、入ったって構わないよ。ただ大切に扱ってくれば良いんだ。その人が大事にしていた物を勝手に持ち出したり、壊したりす

るのは、けしからんがな」

その言葉に、幹土は唇を結んだ。

「……幹土？」

「ああ、いや……もう部屋には入らないようにするよ。使わせてもらうのは、書斎だけにする」

「そうか？ ……幹土がそう言うなら」

そう言つて、叔父さんは少し黙った後、ぼつりと、

「なあ、幹土。……お前、娘を想う親心つて、わかるかな」

突然訊かれ、幹土は、は？ と声を上げる。

「……わからないよ。まだ娘なんて持つてないし」

「直、そうなるだろ？」

そう言つて、軽快に笑う声が聞こえてくる。幹土は少し顔を赤らめて、

「何で、いきなりそんなこと訊いてくるんだよ？」

と口を尖らせる。

「……幹土のいるその洋館はね、彼女への想いが強くこめられているんだ」

……彼女への、想い。

そう心の中でつぶやいて、幹土ははつと気付く。

もしかして、あの花壇や、噴水は。

そのつぶやきに、叔父さんは「ああ」と答え、

「すべて、彼女の為に作られたものなんだ。……屋敷が、唯一彼女が過ごすことのできた場所だったから。父親は、せめてこれだけはと豪華な中庭を作ったんだ」

「そっか、そうだったんだ……」と幹土はつぶやく。

「……この辺で良いか？」

突然つぶやいた叔父さんの声が、再び震えていた。二本目の缶を空ける音がする。

「……ああ。仕事で疲れてるのに、長く付き合わせて悪かったな。じゃあ、俺、もう切るよ。明日で帰るけど、何かお土産は欲しい？」

「ぜひとも、幸美さんとの甘酸っぱい思い出を頂戴したい」

「あげれるか、そんなもの！……ていうか、酔ってるだろ、叔父さん……」

そうらしい、と叔父さんは笑い声を返す。それが涙でぐしゃぐしゃにしがれていることには、幹土は触れず、

「……あんまり浮かれて飲み過ぎるなよ？ 早めに寝るんだぞ」

そう言っても、戻ってくる返事は、言葉にならない声で、それでも幹土は「うん」と頷き、

「……じゃあ、おやすみな」

穏やかにそう言つて、受話器を置いた。そのまま深く息を吐いた後、ソファの方へ振り向く。

「どうだったよ？」

基喜がビールの缶を上げて言う。その横で、さあ、どんどん飲んでください、と鈴木がほろ酔い顔で、瓶を先生のグラスに傾ける。ちよつと、大丈夫なの？ と先生は苦笑しながら、溢れ出しかける泡を吸い込んだ。

「……どうつて。特に何も」

幹土が答えると、

「あつそ。じゃあ、とりあえず飲めや」

基喜がビール缶を一つ取つて、幹土へ投げつけた。

「うわっ！」

慌てて手を伸ばすが、缶は絨毯の上に落ちて転がる。ミキの足元へ。

ミキは屈んでそれを手に取り、顔に近づけた。細長い鼻を、その表面に付けて、冷たい、と小さくつぶやいて。そして、大きな瞳をぱちぱちして眺めると、突然プルトップを上げて、口に流し込んだ。

「おい！」

基喜が、春芳が。そして少し遅れて、顔の赤い鈴木が立ち上がり。ミキの抱える缶を引っ張る。

ミキは口を真つ白にしながら、爆笑する顔をこちらへ向けてくる。

「何やってるんだ！」

怒鳴っても、ミキは気にした様子もなく、きやはははと笑い転げている。

「ジーパンにビールが。あーあ、こんなにしちゃって、もう」

幸美が苦笑しながら、布巾で彼女の腿の辺りを拭いている。

「駄目だろ、さすがに」

基喜が、呆れたようにミキを見下ろして言う。

春芳は、ビールの缶を彼女から離してテーブルの角へ置き、

「何か飲ませた方が良くもな」

と、手元のミネラルウォーターのペットボトルを、近くのグラスに傾けた。

「ほら、ミキさん。飲んで」

「嫌よ、幹土兄さん。そのグラス、その金髪さんが使ったグラスよ」

汚いわ、と払い除けるミキに、基喜がショックで顔を固まらせている傍ら、幹土は額にミミズを張らせて彼女の頭に手を当てる。

「君は、何歳だね？」

「……十五歳です」

「十五歳。もう、小さな子供じゃないのだよ？　こんな悪ふざけばかりしてるとね、」

「変な味がしましたわ、兄さん」

ミキが唇に指を添えて笑う。

ミキさん、聞いているのかね、君、と手を頭の上ではたたと叩いているうちに、幹土は自然と笑みを浮べていた。

「ビールってまずいけど、面白い味。また飲みたいわ」

「それは、成人まで取っておく事だね」

二人のやりとりを遠くから眺める基喜が、

「こりゃ、駄目だ。必ず親馬鹿になるぞ、この男」

自分の額に手を当てて、首を振る。

「そうなるわね、これは」

鈴木はそう言うと、どこか寂しそうに微笑んで幹土を見る。その側で先生が、

「教師の立場からすると、これは相当まずいのだけれど」と、眉をひそめていた。

「別に他言なんてしませんから、平気ですよ」

美代子がそう笑う。

「……教師失格ね。未成年の子にお酒を易々飲ませちゃうなんて」

先生はそう言って、ソファーに腰を下ろした後、腿に肘を当てて、手に頬を載せた。

「少しくらい飲んだって、平気ですよ。俺も高校生の時、よく飲んでたし」

春芳が、視線を幹土達へ向けたまま、ぶっきらぼうに言う。

「あら？　もしかして、慰めてくれるのかしら？」

先生がにつこりと笑みを浮べて、春芳に振り向く。

「……違いますよ。単なる事実を述べただけです……ホントに」

先生に顔を背ける春芳。

先生は苦笑した後、再び前を向いて、黙り　そして、突然立ち上がる。

「少し酔ったみたいだから、散歩に行ってくるわ。何かあったら、すぐ呼んでね。中庭にいるから」

ウス、と基喜が頷き、横目で先生の背中を見送った。

「……どうしたのかしら、先生。少し暗くなかった？」

美代子が言うのと、基喜は、「そうかあ？」と、缶を置く。

「まあ、教師って、色々大変そうだからな。こんなご時世で、よく続けられるもんだ。俺にはとても向かねえよ」

「……でも、難しいからこそ、やりがいがあるって言えない？」

「やりがい、ねえ」

基喜は、ふうと息を吐きながらソファーに背を沈ませる。そして、何かを考えるように宙を見た後、

「……俺が一番求めているの、もしかしたら、それかもな。やりがい

か。人生にそういうもんは必要だよな……きっとそうだ」

独り言のようにそう言つて、基喜はふと気付いたように美代子を見る。

「お前、前より随分話すようになったよな」

美代子は、「え」と声を上げてきよんとする。

「明るくなつたつていうか……」

「そ、そうかなあ……？」

彼女は少し嬉しそうな顔をする。その時、

「う……」

ほんのり赤くなつた頬が、少し可愛くて、基喜は見入つてしまう。

「そんなこと言われたの初めてだよ。私って内気だし、人付き合いも苦手だし。……ありがとね」

そう言つて、茶色いショートヘアの髪を斜めに垂らせて、微笑む美代子。基喜は、口をあんぐりと開けたまま、無言で頷いた。

「ちょっと俺、用事があるから部屋に戻るわ」

突然立ち上がった幹土に、幸美が「何するの？」と続いて腰を上げようとする。それを手で制し、

「いや、お前はここで皆と飲んでろ。終わったらすぐ降りてくるから」

「誰もいない部屋で、一人ですることつて何だ？」

基喜が耳元で囁くと、幹土はにやりと笑つて、

「今日、書斎で熱心に何読んでたっけ、お前？」

「何を読んでいたの、金髪さん？」

ミキが、幹土の横に悪戯っぽく笑つた顔を並べる。

「ストレッチに役立ちそうな内容が沢山詰まつてたよな？ 複雑な

ポーズが色々載つててさ」

「……お、覚えてねえよ、そんなの！」

基喜が叫ぶのを背後で耳にしながら、幹土は笑つて広間を出た。階段に足を踏み出したところで、「幹土」と後ろから声がかかっ

た。振り向くと、春芳が苦笑いをして近寄ってくる。

「何だよ」

「書齋に眼鏡を忘れてきたらしいんだ。もう一度行って取って来たいんだが」

「お前が、忘れ物とは珍しいな」

そう言いながら、幹土はジーンズから鍵束を取り出し、失くすなよ、と渡す。

「すまない。ちゃんと戸締りはするから」

そう言つと、春芳は再び無表情に戻って、懷からペンライトを取り出すと、渡り廊下へと走っていった。

幹土はそれを横目に見て、階段を上り始める。手すりを掴む手の平に、さらさらとした感触がしてくる。年季がかつて、今では変色した木の手すりに、ギザギザに刻まれた傷が沢山あった。

……思い入れの深い場所、か。

幹土は、ぼん、と手すりを軽快に叩いて手を離して、廊下を進んだ。

部屋に入ると、壁際のスイッチを押して、部屋の隅の机に近づいた。そして、引き出しを見下ろして、目を伏せる。

……ごめんな、叔父さん。

幹土は引き出しを開いて、一つの埃まみれの日記帳を取り出す。

……明日、必ず元の場所へ返しておくから。

椅子を引いて座ると、その日記帳を机の上で開いた。

彼女の名前は、本田佐江子。この洋館に勤めていた二十二歳の使用人。

佐江子は「お嬢様」の世話役として、彼女が幼い頃からずっと時間を共にしてきた。

毎日決まった時間に部屋にお茶を運んだり、彼女に鼻歌を真似しなさいと言われて、恥かしいのを我慢して歌ったり、共謀してオネシヨを隠蔽したり。

これまでの飛ばし読みで大体掴めたのは、そんな程度だった。あまりゆっくり目を通すと悪いから、「お嬢様」の文字だけを探して読み進める。しかし、その「お嬢様」の数の多いこと。

ページを捲るにつれて、「お嬢様」との日常が目まぐるしく過ぎていつて、そんなある日彼女は……何だこれ。

「君と愛し合ったあの日、俺は心を決めた。君とずっと、繋がっていたい。性的にも、日常的にも。……あの人は、公園で二人つきりになった時、真顔でこう言ってきた」

これ……プロポーズか。

少し違うような気もするけど、と思いつつも、ごくんと唾を飲み込むと、血眼を向けて、ページを捲る。

初めて受けたプロポーズに、彼女は使用人の先輩に、助言を求めてみた。すると、

「こんな機会ないわよ、あなた。背が高く、優しく、男らしくて……まあ、本当はそんなことどうでも良いんだけどね。その人が、あなたを想ってくれている、それが何よりも大事な事。……結婚しなさい。幸せになれるわ、きっと」

そう言つて、その先輩は、我が事のように喜んでくれた。けれど、彼女は、

「私は正直、結婚なんて気が進まない。何故なら、結婚すると、この山を下りなくてはいけなくなるから。お嬢様の元を去るなんて

私にできるはずがない」

達筆な字がずらずらと続いていく。

……彼女のことを想っていたのは、両親だけじゃなかったんだな。

その後の日記の内容は、プロポーズの件は影を潜めて、再び「お嬢様」の話が現れ始めた。

こうして読んでいると、どうしてか、すごく胸が締め付けられてくる。まるで、実際にこの目で見ていているように、「お嬢様」彼女の、仕草の一つ一つが頭に浮かんでくる。

残された片手だけで、ページをぺらぺらと捲っていくと、すぐに

その手は止まった。

そこに書かれた、一行の文字。

「ご主人様と奥様が、お亡くなりになられた」

外出先で、事故に遭って。

その一文の横には、ペンを無茶苦茶に走らせた、黒い傷跡が残っていた。

夫婦が亡くなったと同じ頃に、「お嬢様」の容態も悪化した。

「胸を押さえて、苦しげに咳き込むお嬢様の口に、指を差し込んで薬を入れた。彼女はそれを、血のついた痰と共に吐き出した」

「突然彼女がベッドの上で、指を真上へ伸ばした。彼女は何を掴んだのか、その透明なものを握ると、父さんの手はおっきいね、と言そつつぶやいた」

……こんなの、読んでいられるかよ。

歯を食い縛りながら、ページを飛ばす。

彼女の同僚は次々とこの屋敷の使用人を止め、山を下りていった。そんな中で、彼女は。

「私だけは、お嬢様と共にいることを誓います」

涙で干乾びたページに、ぐらぐらに傾いたその字は書かれていた。「この家は、雇い主が見つからなくて、途方に暮れていた私を拾ってくれた。でも、それが、決意した理由の全てじゃない。私はただ、お嬢様が、あの美しい仕草で、あの純粋な瞳で、私に潤いを与えてくれればそれでいい。あの笑顔が、失われなければ」

そして、次のページを開き　すぐに日記帳を閉じた。そこに描かれていたのは。

お嬢様。お嬢様……。

同じ言葉を、何度も、願いを込めて書き綴り、その無数の羅列が、しわがれた紙を埋め尽くしていた。

「彼女は、愛されていたんだな、本当に」

よれよれの表紙に浮かんだ新しい涙の跡に、幹土は指を擦って、視線を伏せた。

書斎は真つ暗で、扉を閉めると、謂れもない閉塞感が襲ってくる。
……結構、暗いのって苦手なんだよな。

こないだの夜は、他の人のいる手前だったし、意地を張って澄ました顔をしていたけれど。

外海春芳は机に近づき、ペンライトを机に垂直に立てて、天井に丸い点を浮かばせた。

「おばあちゃんの書斎も、こんな感じだったな」

淡く浮き上がった書斎を見渡し、春芳は奥の本棚へ近づいた。

……確か、この辺だった気がするけど。

棚の、空いた隙間を覗き込んでいく。三つ目に覗いた隙間に、眼鏡ケースが入っていた。けれど。

「……おかしいな」

基喜は、辺りの棚を見回した。そして、ペンライトを立てた机の方を見て 彼女と目が合った。

白いシャツに黒いスカート。半袖から出た細い腕が、水平に左右へ伸びると、足が爪先立ちになり、そのまま、彼女はくるりと回転した。目を春芳へ向けながら、彼女は唇を笑わせる。

……誰、だ？

ケースが手から滑り落ちる。春芳は腰を抜かして、背中を棚に打ち付けた。

……何を、する気、だ。

近づいてくる彼女の白い顔が、春芳の見開いた目に映った。

少女は眼前に立つと、髪をこちらへ垂らして、のぞきこんできた。そして、少し顔を傾けてくる。

「君は」

春芳は、彼女の腰の辺りに触れようとした。その途端 ペンライトの光が消えた。

春芳は体を大きく跳ねて、悲鳴を上げた。

「誰だ、お前は！」

春芳は、前方へ思い切り腕を振った。しかし、それは空を切る。突然、椅子を引く音がした。木と木を擦り合わせた甲高い音が、やがてぴたりと収まる。

「……何、だ？」

震えながら立ち上がり、ゆっくりと窓際へと歩み寄る。そして、手を左右へ振って、ペンライトを探し当てると、そのスイッチを押す。

少女の影は、もうなかった。ただ。ケースになかった眼鏡が机の上に置かれ、肘掛け椅子が、座ってくれとばかりに、こちらを向いていた。

春芳は眼鏡を手に取り、濡れた髪の間へフレームを滑り込ませる。そして、椅子に座り、ようやく笑みを口元に戻すと、

「……全く。不思議なことがあるものだな」

そう震えた声で書斎を見渡す。

……そう言えば、おばあちゃんは。

不思議な話が大好きだった。おじいちゃんが使っていた書斎で、そんな話をいつまでも聞かせてくれて、いつも気付いてみれば夕方になっていた。

「お夕飯の仕度、手伝いましょうね」

そう柔らかに微笑んで、おばあちゃんは、続きはまた明日ね、と書斎の鍵を閉める。

その時決まって差し込む金色の鍵が綺麗で、ある時それをせがんでみたのだけれど。

……これは、魔法の鍵なの。

魔法の、鍵？

……そう。素敵なお人への出会いを叶えてくれる魔法の鍵なの。

ちようだいちようだいと欲しがる孫を見て、駄目よ、とおばあちゃんは意地悪くそれを高く持ち上げてしまった。

……あなたが大きくなったらあげる。ただし、この鍵は、1回ポツキリしか使えないの。大事にしなさいね。

こくこくと頷く孫の頭を、おばあちゃんはこのこと笑って撫でた。そこでふと、おばあちゃんは素敵な人に会えたの？ と聞いてみたのだ。

……会えたわ。おじいさんの形見のこの鍵を、昔、落としてしまったことがあるの。けれど、拾ってくれた女性がいてね。

優しい人？ と小さな口はつぶやく。

……彼女はとっても素敵な人だったわ。年の差はあったけれど、私達は友達になっただけ。

そう言っ、おばあちゃんはずと見せびらかすように、それを胸ポケットへと入れたのだ。

「……結局、もらえなかったんだけどな」

ジーンズのポケットに手を入れて、それを取り出した。ペンライトに近づけると、錆び付いたその鍵は、鈍く煌めいた。

……くれるって約束したのに、いなくなってしまうたら、もらいたくてももらえない。だから、俺は。

書斎の机の上に、無造作に置かれていたこの鍵を、自分から手にしたんだ。そして あいつと出会うことができたんだ。

「……あいつが素敵な人っていうのは、何か変だけどな」

そう独り言を言っ、笑いなから、春芳は視線を前へ向けた。もう恐怖は冷め、穏やかな気持ちに溢れていた。

「……おばあちゃんが信じてた通り、幽霊って本当にいたんだ。……」

……どうかこれが錯覚じゃありませんように」
今夜の出来事はきつと、おばあちゃんとの思い出を蘇らせる引き金となってくれる。

……きつとこの思い出は、どうしようもない孤独感から、俺を遠ざけてくれるから。

「……あら？」

中庭を歩いていた茂川美世は、別棟の一室に、ぼんやり明りが点っていることに気付いた。

……誰かしら。

そう思つて、窓に近づいた時、背後から、「せんせーい！」と呼ぶ声がした。後ろに振り向く。

「……澄子ちゃん」

「酔いはもう醒めましたか？」

「あいにく、まだよ。……一緒にどう？」

美世は、噴水の前で鈴木澄子に手を差し伸べて、にっこりと微笑む。

「お供します」

澄子は凜々しい笑顔を向けてきて、こちらの手に自分の手を重ねた。

手をつないだまま、ゆっくりと噴水の周りを回る。美世はふともう一度、窓を見遣つたが、電気は既に消えていた。

「……どうしましたか？」

「ううん。何でもないの」

「先生つて……彼氏、できましたか？」

「残念ながら」

舌を出して苦笑する美世に、澄子は、「やっぱりそうでしたか」と笑う。

「だって、作る暇なんてないんだもの。忙しいし」

「大変ですよ、教師つて」

美世は無言で頷いて、深いため息を吐き、

「……この旅行に、急に参加したいつて言い出したのは……実は、何もかも嫌になっちゃったからなのよ」

そう言つて美世は、うんざりした顔を夜空へ向ける。澄子は先生の手を引いたまま、振り返る。

「……つまらないですか？ 教師つて」

「大変よ。けど、楽しいこともあるわ」

澄子はふと俯いて、こちらに体を向けたまま立ち止まった。

美世は、ふ、と形の良い唇を笑わせて、「相談したい事、あるん

でしょ?」とつぶやく。

「私……」

「予想するに……幹土君関連かしら?」

黙って頷く澄子に、美世は肩に腕を回して、彼女を引き寄せた。そして、肩をぽんぽんと叩いて、慰めるように囁く。

「……言っちゃったのね?」

「馬鹿でした。今になって、なんで私は……」

澄子は、睫に滲んだ涙を月明かりに光らせる。

「いいじゃない、すっかりしたんでしょ? 本当のこと言えたんだもの」

「全然すつきりしてません」

澄子は寂しげな目を、自分の足先に向けた。

「幹土君は、何て言ってたの?」

そう訊いても、返事は返ってこなくて、

「……しょうがないわね。幹土君、真面目すぎるから、折り合いつける為に、どうせひどい言い方したんでしょ?」

「幹土は悪くありません、私が悪いんです……遅すぎたから」

その弱弱い声に、美世は眉をしかめて、「もう」と笑い、

「何、自己嫌悪? 澄子ちゃんは悪くないわよ。幹土君の優柔不断が原因……」

そう言って美世は、澄子の肩に自分の顔を埋めて、ぼつりと囁く。

「幹土君も、昔、色々あったの。仕方ないのよ、あんな風になっちゃったのも」

「幹土が、幸美に負目を感じているのはわかってます。……ただ、私は、今、自分がどうすれば良いのか、わからなくて……」

頬に触れる彼女の髪が、小刻みに揺れ始める。

「普段どおりでいいのよ、別に。……あなた、こうして女の子らしい一面見せてあげれば、幹土君だって擦り寄ってきたんじゃないの?」

「いやです、そんなの」

澄子は涙声で笑うと、体を離して、

「私は、幹土にこんな弱い姿、見せたくないんです」

そっか、と美世は微笑み、彼女の目元に手の先を当てて拭ってやる。

「……先生も、少しは恋愛に立ち返ってみればいいのに。仕事ばかりやってたら、あつという間におばさんですよ？」

「うるさいわね。幹土君と同じようなこと言うんだから」

澄子は肩にかかった髪を払って、吹っ切れたように笑うと、

「先に戻ってますよ、先生」

そうつぶやき、中庭を出て行った。

美世はそれを微笑んで見送ると、

「……私だって、そうしたいのは山々なんだけどね」

そう言って、溜息を吐く。

「帰ったら、あの小僧達、またなんか問題起こしてそうね。……あ

あ、面倒臭い」

気付けば、本音が出ていた。

……私は今、何を。

自分の口元に手を置きながら、美世は、ふと保護者達から向けられたきつい言葉を思い出す。

「……まったく、やんなっちゃうわね、あのオバサン達」

もう一度口から漏れた本音。

美世は首を振って、いけないわ、と自らを戒める。

……そんなこと言うなら、何で教師やってるのよ。

美世は、泣きそうな顔を浮べて、花壇の前にしゃがみこみ、膝を抱いた。

……せつかく気晴らしに来たのに、一日中、仕事のことばかり考えてもしょうがないじゃない。もっと楽しまないと。明日には帰るんだから。

唇を震わせて、目頭が熱くなってくるのを感じていると。

その時、肩に何かが載ったのを感じた。振り向くと、冷たい感触

が頬に当たる。

「酔い、醒めましたか？」

そこに立っていたのは幹土で、彼はペットボトルを差し出して笑っていた。

美世は慌てて前を向き、目をぎゅっと瞑って、涙を絞り落とすと、

「ありがとう」と肩の上のそれに手を伸ばした。

「……もう遅いから、部屋に戻りましょう」

「そうね」

そう言っ立ち上がり、もしかして慰めの言葉でもかけてくれるのかしら、と期待して振り向くと。

幹土はさっさと渡り廊下へ歩き出していた。

美世はむっとして立ち上がり、小走りに彼の背中を追う。

「冷たい男ね、君は！」

ペットボトルの底で、頭を思いっきり叩いてやる。

「痛って！ 何ですか、いきなり！」

「あれを見といて、何か言うことないの、あなた？」

「あれって……何のこと？」

本気で不思議そうにつぶやく幹土に、美世は。

「何よ、この男」

そう呆れたように、息を吐く。しかし、すぐに柔らかに微笑むと、

「……こんな感じ、かしらね」

不意打ちとばかり、彼の腕を両手で掴み、ぴったり体を寄せる。

幹土は「何ですか？」と眉をしかめて、腕を引っ張る。それをぎ

ゅつと掴んで離さない美世。

「……こういうの、久しぶりだなあ」

美世は顔を幹土の肩に載せながら、可笑しそうに笑った。

「ちゃんと恋人作れば、いくらだってできるんじゃないですか？」

「……なかなかそうもいなくてね。ここに、ちょうど良い実験体があるではないか」

まったく、と幹土は苦笑して視線を下げ、

「……鈴木、何か言っていましたか？」

ぼつりとつぶやいた。

「さあね。冷たい男には言う必要のないことよ」

「冷たい男って……」

「……そんなことより行きましようよ、ダーリン」

頬を腕にこすり付けてくる美世に、幹土はいい加減眉をひそめ、

「やめてくださいよ。……胸が当たってますよ」

とつぶやく。こんなの当たってるうちにも入らないわよ、と美世

はぐいぐいと引っ張って歩き出した。

先生と並んで広間へ帰ってくると、テーブルをすっかり片付けて、紅茶を飲んでいた幸美が、

「すぐに淹れるからね、幹土、先生」

そう言って、用意していたカップを引っくり返して、紅茶を注ぐ。

「サンキュ、幸美」

先生は、ソファで躰をかがいている基喜を足で転がしてどけ、幹土はすやすや寝息を立てているミキを、優しく腕に抱えて移しスペースを確保した二人は並んで腰を下ろす。

「どうぞ」

美代子がカップを手渡してきて、幹土はサンキュ、と腰を浮かせて受け取るうとする。その時。視界がぐらりときた。

「ちよつと……!？」

幸美が駆けつけてくるのが、視界の端に見えた。幹土はそのまま倒れ、絨毯に顔を伏せる。

「頭が」

両手で押さえて縮こまる幹土。

「どうしたの、幹土君!？」

先生が耳元で大声を上げてくる。

「頭が、痛い……」

割れてしまいかもしれない。血管の流動は感じられず、ただ、頭の中で光が閃いて、刺すような痛みが広がっていく。

「う ああッ!」

呻きながら、絨毯の上を転げ回る。

「ねえ!？ どうしたの!？」

幸美が背中に被さるようにして、訊いてくる。

……駄目だ……本当に。

頭痛は数秒のうちに劇的に激しくなり、幹土は痛みにも肩を跳ね上

げる。

そして、突然系が切れたように、体から力が抜け　意識はそのまま、まどろみの中へと飛

彼女は中庭で一人しゃがんで、花に言葉を投げかけ、くすくすと笑っていた。しかし、彼女は突然立ち上がると、踊りだす。ひどくぎくしゃくとした、機械的な足取りで。

いつか見た彼女の姿とはまるで変わっていた。踊るその足は折れてしまいそうに細くなつて、白い頬は青ざめて大きくこけていた。

彼女はふと、空を見上げた。その瞳には、青空も　そこに漂う雲も　何も映ってはいなかった。

以前見た、輝くようなあの瞳は、どこに行ってしまったのか。あの瞳がまた見たかったのに。

彼女は口元に笑みを浮べて、黒ずんだ瞳をにつこりと細めた。紙切れを顔に貼り付けたような、生気の抜けた笑顔。

以前の、わんぱくで無邪気なあの笑み。それを、誰が奪ったのか。ひどくいらだちが幹土の心を掠めた。

幹土は彼女の顔の前に、自分の顔を近づけた。俺を見ろ、と。そう訴えるように強くその瞳を見つめた。けれど当然、幹土の姿は瞳には映らず、瞳の中の黒い霧は取り除かれることはなかった。

ゆっくりと瞼を開くと、体はベッドの中にあつた。隣には幸美が、手を握って座っている。

目が合うと、幸美は、「幹土」と一言呼んで、良かった、と目尻を垂れて微笑んだ。

「……いきなり倒れるから。どうしたのかと思ったじゃない」
幸美はおでこに手を当ててきた。その手を掴んで、額から剥がさせる。

「もう、頭の痛みはないし、体にはどこも異常はないみたいだから」
普段どおりの笑顔を、取り繕おうとする。

「……たぶん、貧血だ。少し、はしゃぎすぎたみたいだな」
顔を濡れたタオルで拭かれながら、そう言った。

「無理したのね、きつと。今日はもう、眠った方が良いわ」

その時、ミキが部屋に入ってきて、しょんぼりした顔で近づいてきた。

「あ」

幸美はそうつぶやいて彼女を見ると、気まずそうに視線を逸らし、タオルを洗面器に浸す。

「今、起きたところ。もう平気だから」

幹土はそう言って机の椅子を指差し、ミキは振り返ったが、その時には、幸美がもう椅子を引いてきていて、

「はい、どうぞ」

優しい声でミキの背後へ置いた。ミキは無言で頭を下げ、腰を下ろす。

……どうしたんだろ、この二人。

どこかよそよそしい様子の二人をじっと見る。

「幹土、あれからどうなったか、覚えてる？」

沈黙に耐えかねたのか、幸美が口を開く。

「……全く。意識を失うなんて、やばいのかな、どこか」

「……疲労だと思うよ。澄子も、幹土が昼間、眩暈をしてたって言ってたし」

幸美は視線を逸らして、そう無機質な声で言う。

「そう……なんだ」

幹土は視線を伏せる。

「何にせよ、明日ここを出発したら、病院行った方が良いわね」
そう幸美が言った時、

「ごめんなさい、幹土兄さん」

ミキは突然椅子から立ち上がって、そう言った。

「ミキさん……？」

悲しげな顔を浮べているのに面食らったが、すぐに微笑んで、ミ

キの頭を優しく撫でた。

「どうしたの？ いきなり謝ったりして」

「この子が、」

幸美がそう何かを言いかけて、すぐに黙った。

「どうしたんだよ。何か、あったのか？」

「……何も、ないんです。ただ私、幹土兄さんを困らせてしまいました。ごめんなさい。もう二度としませんから」

ミキは、もう一度頭を下げた。幹土は「おいおい」と慌てて上げさせる。

「何なんだよ、急に」

「この子があんなことするから……幹土が大変なことになったんだって……私、責めちゃったの」

「そうか……なるほどな」

幹土はつらそうな幸美の顔を見て、視線を下げ、

「ミキさん、幸美も悪気があったわけじゃないんだ。許してやってくれ」

「ごめんなさい。違うんです、私の所為です」

ミキはそう俯いて、再び座る。

「……洗面器の水、入れ替えてくるね」

突然そう言うと、幸美は部屋を飛び出していった。洗面器の水が跳ねて、カーペットに染みを作る。

幹土は溜息を吐いて、

「ミキさんは悪くない。あいつ、怒った時すごい剣幕だったろ？」

……あいつがああなったのは、俺の所為なんだ」

ミキはそれでも、「ごめんなさい」と俯いたままつぶやき、震えている。彼女の穿いたジーパンに、ぽつぽつと青い染みができていく。

「……相当、ひどく言っただろ。叩きのめさんばかりに、強く」

そう言って幹土は、視線を下げる。

「あいつ、俺のことになると、すごく神経質になるから。ミキさん、嫌いになっちゃったか？……幸美のこと」

ミキはきゅっと唇を結んで、頷いた。頷いて――しかしすぐに首を振る。

「だろ？……ああもう、泣かないでくれよ」

幹土は自分の額に置いてあったタオルを取って、彼女の頬に当てる。

「……もう遅いから、寝た方がいい」

すると、ぽつりと「頭、痛くないんですか？」と小さな声が聞こえた。

「大丈夫大丈夫。大したことないから」

ミキは立ち上がると、椅子を机に戻し、そして椅子の背を掴んだままじっと佇んだ。けれど、突然振り返り　もうその顔にはいつもの笑顔が浮かんでいた。

「明日になったら、元気になりますか？」

「なるよ」

幹土は笑って頷いた。

「おやすみなさい。幹土兄さん」

「おやすみ」

戸口の前でもう一度振り返って、につこりと白い頬を緩ませて、
「幸美さんのぞっこんぶりには、参ったわ」

そう一言零して出て行った。

幹土は起こしていた体を横たえ、溜息を吐いた。

「……幸美が怒ったか」

その時、「幹土」と声が聞こえた。幸美が部屋に入ってきて、ベッドに近づくと、崩れるように幹土の胸に顔を伏せてきた。

「皆にひどいこと言っちゃったよ……」

「仕方ないさ」

幹土は幸美の髪を梳く。

「こうなったらもう、あきらめるしかないさ。嫌われてもいいやつ

て、開き直ってみるよ」

嫌だよ、そんなの。そんな声が聞こえる。

「……でもな、幸美。たぶん、あいつら、ちょっとやそつとのことでは嫌ってこないと思うぞ。……大丈夫、幸美は十分好かれてるさ」

幹土は、嗚咽を漏らす幸美に、

「何したんだ？」

と優しく訊いた。

「……まず、幹土を運ぶのを手伝おうとした先生の肩を……突き飛ばして。そして……外海君にもひどい八つ当たりをしたわ。それから……」

「もういいよ」

幹土はぼん、と彼女の頭に手を置き、

「皆には、謝ったのか？」

腕の中で、幸美が静かに首を振る。

「幹土の世話は、私一人でやるって言ったから……たぶん皆、今頃は私に愛想尽かして、もう寝ちゃってると思う」

「なら、謝るのは明日でいいよ。今日は、ここで寝な」

うん、と静かに頷き、幸美はシーツの中に頭から入り込み、こちらの顔の横から、ひょっこり頭を出させた。

「そうだ、幸美。俺の鞆に小さなポーチが入ってあるから、取ってくれないか？」

幸美は、「うん」とシーツから片手を出して、近くにあった鞆から白いポーチを抜き出し、無言で手渡してくる。

ポーチを開くと、小さなオルゴールがたくさん詰まっていて、その一つを取り出し、ぜんまいを巻いて、幸美に差し出した。

「この曲でも聞いて、落ち着け。……音質は落ちるけどな」

パールギユントの「朝」だった。昔、一緒に行ったコンサートで聞いたこの曲を幸美が気に入る、それ以来、毎朝、朝食の時に流していた。

「これって、北海道に行った時に買ったんだっけ？」

幸美はポーチから一つずつ取り出していき、ぜんまいを巻いて、それを幹土の胸の上に載せて並べていく。

そんな中、幸美は突然、「ぶっちゃった」とつぶやいた。

「……どういうことだ？」

幹土は跳ね起きて、胸からオルゴールを転がせる。

「ミキちゃんをね、ぶっちゃったの」

幹土は啞然と幸美を見て、

「強く……ぶったのか？」

そう訊いた。

一度、強く　幸美はつぶやいて、俯く。

「ごめんね。私、馬鹿だから。自分勝手に……本当に、ごめんね……」

幸美は肩を震わせる。

「謝ったんだろ、ミキさんに。……なら、許してくれる。あの子、優しいから。すぐく」

幹土は、幸美の頭を胸に引き寄せて、両手に包んだ。

嫌。

けれど、何故か幸美はそれを拒み、腕を払い除けると、突然ベッドから降り立った。

「もついいんだよ、幹土。私なんか、気を遣わなくていい」

「何……言ってるんだよ……？」

「幹土さ、」

澄子のこと、好きなんでしょ？

目を見開く幹土。

「わかってるんだよ、私には」

幹土は啞然と幸美を見遣ったが、すぐに引きつった笑いを浮べて、「おいおい」とつぶやく。

「こないだのアイスホッケーのこと、まだ気にしてるのかよ。あれは、ただ単に……」

「違うわ!」

幸美は幹土の胸を両手で強く押しやった。仰向けに倒れた幹土は、見開いた目を幸美に向ける。

「……それだけじゃない。私は、知ってるもの……幹土が高校の時からずっと、澄子のことが好きだったこと」

幹土は、息を止めた。

「幹土はいつだって、澄子を遠くから見つめてた……もう、ばれよ。……でも、私はそれでも良いと思った。こうして付き合えば、きつといつかは振り向いてくれると……」

幹土は唇を引き結んで、突然起き上がり、

「馬鹿!」

幸美の頬を平手打ちした。

「俺はこんなに好きだっていうのに、お前は……一度も気付いて、くれなかったのか?」

幸美は、首を横へ向けたまま、目を見開き、涙を溢れさせる。

「俺はとつくの昔に、お前が好きになっていた。鈴木を好きだったのは確かだけど、今は……今は俺には、お前だけなんだよ」

幹土は、腕を伸ばして、彼女の手を掴み、強引に引き寄せる。そして、抱きしめる。

「泣かせるなよ、男に。馬鹿」

幸美の髪に、熱い雫が零れ落ちていく。

「だって私……幹土が優しいから、べたべた付き纏って……邪魔じや、ないの?」

「そんなわけないだろ。幸美と出会って、幸福になったのは俺の方だ。お前が俺に執着してるように、俺もお前に馴れ馴れしく付き纏ってるんだよ。邪魔であるはずないんだ……好きなんだから」

幹土は、幸美の肩にかかった髪に顔を押し付けて、涙をそれに滲ませる。

「幹土……ごめん。私、最低な人間だ」

幸美は目を瞑って歯を食い縛り、幹土の震える背中をぎゅっと強

く抱きしめた。

また、少女の夢。

彼女の額には、汗に濡れた髪がべったりと張り付き、それは荒い息遣いと共に揺れていた。

もう長くはない。あと少しで、彼女は。

医師が煙草を銜えたまま、ぼつりとつぶやいた。

それを耳にした隣の女性は、目を見開いた。彼女は、医師の肩に手を伸ばし、触れるか触れないかの距離で制止させ。

それは、本当なのですか。彼女の唇は、そうつぶやいた。

本当です。

医師の、白ひげを被った赤い唇が、かすかに動いた。

二人の視線の先に横たわる少女。乱れたパジャマの襟からのぞく首筋を、昼間の日差しが照り輝かせる。

目を瞑っている少女は、その白い肌を薄く青色に染めて、苦しうに喘ぎ、体を右へ左へ……。

……なんで、この子がこんなに苦しんでいるんだよ。

そうつぶやいた時。ふと少女の手が上がり、部屋の隅へと向けられた。

震える指の先には、棚の上の、一つのオルゴールがあつた。

気付いた女性が、それを少女の胸の内に収めてやる。ぎゅっと抱きしめる少女。熱い吐息が、木箱の表面に白い膜を作らせる。

少女はもう一度手を伸ばそうとし、女性はその手を掴み、一つの鍵を握らせた。すかさず、少女は木箱に差し込もうとする。

鍵先は穴を逸れ、しかし女性の手に助けられて、入った。開かると、あの旋律が奏でられ始める。

その一室に、オルゴールの音階が、悲しく響き渡り、医師は窓の外を無表情で見つめる。短くなった煙草から、灰が床へ落ちた。その傍らで女性が、顔を覆って泣き出した。

……こんなことってあるのかよ。……笑った顔、見せてくれよ。

幹土は少女の頭をそつと撫でる。確かに、手に残る感触があった。それは、柔らかく、べたついた髪で。けれど、鼻を近づけると、優しい匂いがした。

夢から覚めて、起き上がって傍らを見ると、幸美の姿は消えていた。

…… 幸美、大丈夫かな。

彼女の部屋へ行こうとすぐに廊下へ出るが、ふと足を止めた。

「……行ってどうする気なんだ、俺は」

俺が皆に謝っておくから。そんなことを言つて、安心させる気か。

「…… 幸美が自分で謝らないと意味がない。それに、」

幸美はもう決心してる。俺がここでやろつとしてることは、ただの余計なお世話だ。

足先を変える。

「…… コーヒーでも、飲むか」

幹土は一階へ下りて、広間で一人でコーヒーを飲み、しばらくそのまま静かに過ごした。

ふと時計を見て、「まだかな」とつぶやく。時刻はもう八時を回っていた。

…… 皆そろって寝坊かよ。昨日、あんなに飲むから……。

幹土はカップを置くと、広間を出て、再び二階へ上がった。朝食当番の基喜の、部屋のドアをノックしてみた。何度叩いても、出てこない。

…… どうせまた、エロ本ダイブして寝てるんだろうな。

仕方なくドアを開ける。しかし、ベッドの上には基喜の姿はなかった。それどころか、シーツは綺麗に整えられ、散らかっていたはずの床の上には何もなくなっている。

「あの基喜が…… よく片付けなんかしたもんだ」

窓へ近寄り、外を見る。そして、目を見開いた。

前庭の、花壇に挟まれた道を、あの少女がゆっくりと歩いている

と思つたら。

「……なんだ。ミキさんかよ」

よく見ると、その影は、あの少女より少し背が高く、何より足取りが微妙。いささか自信に溢れすぎているというか、あの清楚な歩き方は見る影もない。

幹土は、窓を開けて、

「何してるんだ、ミキさん！」

そう大声で呼んだ。

声が庭に木霊しても、ミキは振り向かず、視界からすぐに消えた。

「全く。朝っぱらから何してるんだよ」

幹土は窓から身を乗り出して、歩いていった方向を見る。

……仕方ない、連れ戻すか。

窓を閉めると、部屋を出て、再び階段を駆け下りた。そして

驚いた。

広間にいつの間にか春芳、先生、鈴木　それに幸美がそろっていて、彼らの顔が一斉にこちらへ向いた。

「もう起きて平気なのか、幹土？」

春芳がソファーから立ち上がったて心配そうに訊く。

幹土は階段の前で立ち止まったまま、啞然と四人の顔を見つめていたが、すぐに我に返って、

「あ、ああ……心配させて悪かったな。貧血だったみたいだ。……それより、」

どうしてお前ら……、と不思議そうな顔つきで広間へ近づこうとする。その時、

「よう、やっとお目覚めか、幹土」

悪役のような声で、厨房から基喜が出てきた。

「起きてたのか、お前……いつの間に」

「そんなに驚くことねえだろ。俺は毎朝早起きだ」

胸を張る基喜に、「昨日、寝坊しなかったっけ？」と美代子のどこか怖い声が重なる。

彼女は広間へ入ると、皆の使ったカップをプレートに載せて、「もうちょっととできるから、待っててね」とこちらへ振り向き、厨房へ運んでいく。

「……いつの間に下りてたのか、お前達。俺はここで待ってたんだぞ。どこ行ってたんだよ」

広間に入って、啞然とした声で言うと、

「は？ 私達こそ、こうしてのんびりお茶飲んで、ずっとお前を待ってただけだ。……倒れたせいで、頭までいっちゃったか、幹土？」

そう言って笑う鈴木に、幹土は眉を寄せて、「本当に、俺はここで……」とつぶやきかけるが、

「幸美が、幹土の部屋で寝てただってな」

鈴木が可笑しそうに けれどどこか震えた声で突然言っ、遮った。

幸美は、「そうよ、それがどうかした？」と、澄ました顔で言う。幹土は幸美をじっと見つめた。すると、幸美はこちらへ目を向け、もう大丈夫だから、というように微笑んだ。

「なら昨日は……熱い夜を過ごしたのかしら？」

先生のからかうような声に、幹土はむっとする。

……ああ、そうだよ、確かに熱い夜だった。目頭の熱くなる夜。

「そうだ。熱々の夜を過ごしたんだ」

幹土がそう言つと、「え」と戸惑いの声が皆の口から同時に漏れる。

「ほ、本当に？」

先生が引きつった笑みで訊いてきた。

「本当に」

幹土は、平然と頷く。視界の隅で、鈴木が唇を引き結んで、俯くのが見えた。

「何言ってるのよ、馬鹿！」

幸美は真っ赤になって、立ち上がる。

「……こ、こんな話、訊くのは失礼だぞ」

春芳は、こほん、と咳一つして、赤い顔を脇へ向けた。

場に漂うどこか気まずい空気に、幹土は、ぷ、と笑みを漏らし、
「冗談に決まってるだろ。そんなマジになって、うるたえてやんの」
そう笑いながら、視線を幸美へ向ける。幸美は頬を紅潮させたまま、「もう」とそっぽを向く。

春芳と先生は、

「お前が言つと、冗談に聞こえないんだよ」

「教師の前で、そんな冗談言つの、やめなさいってば」
仲良く声をそろえて言う。

「じゃあ俺、ミキさんを探してくるから」

幹土は四人に手を上げて、広間を出る。

「どういうこと？ ミキちゃん、まだ澄子の部屋で寝てるんじゃないの？」

先生が訊くと、幹土は振り向き、

「さつき、前庭で歩いてるのが、窓から見えたんだ。ちょっと行つて連れてくる」

「私も行こう」

鈴木が立ち上がるとする。幸美がちらりとこちらを不安げに見た。幹土は、安心させるように幸美に視線を送り、「いいよ、俺一人で」と鈴木を制止する。

「でも」

じつとこちらを見つめる鈴木。

「それじゃあ、遅くなるようだったら、先に食べてて良いから」

「おい、幹土……」

背後から、すぐるような声が聞こえたが、そのまま振り向かずに幹土は玄関へ向かった。

……ごめんな。お前はもう、ただの友達だ。

扉を開けた途端、朝の日差しが眩しく下りてきて、幹土は切れ長の目を細めて、手をかざしながら、ミキの姿を探した。

「ミキさん！」

声が何度も庭に反復するけれど、振り向く影はどこにもなかった。
……どこ行っただよ。まったく。

しばらく歩き回って、もう戻ろうと体の向きを変える。そこで、自分の口元が緩みきっていることに気づいた。安心したせいだろうか。

……とりあえず、幸美は皆と仲直りできたみたいだし……。

よかったよかった、と上機嫌につぶやきながら、玄関の扉を開けようとする。けれど、ふとその手を離し、自分の目元に当てた。そして、その指先を見下ろす。

「……本当に幸美が好きなんだな、俺は」

「……どこに行っただのかしら」

中庭へ続く廊下を歩きながら、幸美は顔を俯かせてぼつりとつぶやいた。

ミキは結局食堂には現れず、朝食の後に幹土が部屋を見て回っても見つからなかったから、皆で手分けして探すことになった。

「……きつと、私の所為ね」

渡り廊下へ出ると、顔を上げて中庭を見渡す。ミキの姿はなかった。

……私は自分のことしか考えていない。こうして探しているのも、きつと幹土の為。でも結局、それは自分の為なんだ……。

昨夜の記憶が蘇る。自分の腕が振り上げられ、あの子の頭に落ちる瞬間、あの子は抵抗しようとしなかった。

頭を叩かれても何も言わず、あの子は唇を噛み締めてただ目を伏せただけ。それが、気に食わなくて。

「あなたがあんなことしたから、幹土が倒れたのよ！」

広間に響き渡る大声。周囲にいる皆の顔が、一瞬で固まったのを覚えている。

「……それから、他にもまだ私は」

自分の顔を両手で覆う。

……先生を、外海君を。

幹土を部屋のベッドに横たえた後、先生は看病しようと優しい手つきで彼の体に触った。それを見た途端、なぜか怒りが沸いてきて……そうやって触っていいのは、私だけだッ！

そう思った瞬間、先生の手を払い除けて、

邪魔なのよ！

そう叫んで、その手から濡れたタオルを奪い取った。幹土は私のも。誰にも渡さない。そんなうわ言をつぶやいて。

先生は啞然とした顔でじっと見てきて、その横で外海君が、「何も、そんな言い方ないだろ」と先生を庇った。すると、勝手に口が開いた。

「あなた馬鹿じゃないの？ 幹土の何を知ってるって言うのよ。私が一番知ってるの、幹土のことは。外海君はさつさと部屋に戻って寝なさい」

彼は「な」と驚いたように私を見た。先生は無言でベッドから離れると、ドアを思い切り強く閉めて部屋を出て行った。その後を、「おい、先生！」と基喜が追いかけて、美代子ちゃんもそれに続く。彼らを見送った外海君は、

「今の君に、何を言っても通じないな」

と呆れたように肩をすくめた。

彼のそんな仕草を見たらカッとして、「うるさい！」と近くにあった水の入ったペットボトルを投げつけた。彼はわずかに体を震わせ、それを身に受ける。

転がり落ちるペットボトルを、彼は黙って拾い上げると、私の横に置いて言った。

「幹土がそんなに好きなのか。でも、君の好きは、どこかずれてるな。自分のことが好きなんだろ、君は……一番ね」

外海君が部屋を出て行くのを目を見開いたまま視線で追い、その背中が見えなくなった後、やっと我に返って。

やっちゃった。

ぼつりとそうつぶやいて、片手で顔を覆ったのだ。

幹土が危ない目に遭うといつも、彼を失うことへの恐怖が一気に膨れ上がり、居ても立ってもいらなくなる。

支離滅裂な思考が頭に飛び交って、被害妄想が現れてしまう

そして、気付けば人にひどいことをしてしまっている。

……今まで、必死に気をつけてきたのにな。

幸美は中庭に出て、昨日の朝、幹土が座っていた石のベンチに腰を下ろした。

「涼しいなあ、風……」

なびく横髪に手を当てながら、ぼんやりつぶやいて、幸美は視線を落とした。その時突然、視界の内に、見慣れたスニーカーが入ってきて、それが目の前で止まった。幸美は、すぐに笑顔を上げる。

「幹」

けれど、その顔を見た途端、表情を暗くして、元のように視線を下げた。

「幸美、落ち込んでるのか？」

澄子が隣に足を組んで座って、幹土に借りたらしいスニーカーの先を、こちらに向けてくる。

「私、最低だなんて……思ってたの」

ぼつりとつぶやくと、突然澄子の顔が視界に入ってきて、いきなり「馬鹿」と言われた。

「馬鹿って何よ……」

「最低な人間なら、最低な人間らしく、もっと図太く構えているってこと」

澄子はそう言うつと、顔を離して笑みを向けてくる。幸美は、何よそれ、と顔を膨らませる。

「昨夜、皆は幸美の最低な一面を、これでもかってほど目の当たりにしたんだ。今頃、良い人間になろうつたって、遅い」

幸美は澄子を睨み、「よく言うわ。この盗人が」と、つぶやく。

澄子は一瞬顔を固まらせたけれど、すぐに苦笑して、空の噴水へ視線を向けた。

「盗人呼ばわりか。きついな、幸美に言われると」

「事実じゃない。……聞いたんだからね、幹土に。澄子が告白したこと」

「……言っちゃったのか、あいつ」

「でも、幹土は私に、今はお前だけだって言ってくれたの」

「あ、そ」

幸美は勝ち誇ったように、噴水を見て、そして寂しげに視線を伏せた。

「最低な人間が、ここに二人いるな」

ふと澄子がつぶやくと、幸美は、そうね、と小さく頷いた。

「でも、幸美」

澄子が真剣な声でこちらに向く。

「こんな最低な人間達を、皆は受け入れてくれたんだ」

その言葉に、今朝のことを思い出す。

「ごめんなさい。」

広間のソファーに座っていた先生へ頭を下げると、先生は苦笑しながら、「顔、上げてよ。幸美」と静かに腕を掴んできて、隣に座らせた。そして、

「もう気にしてないから」

その一言で、先生はいつも通りの笑顔を見せてくれるようになった。

外海君も彼なりに気遣ってくれたみたいで、いつ謝ろうかと言いあぐねていると、突然、「お砂糖、いくつ入れる？」とカップに紅茶を淹れながら、聞いてきた。

「……ふ、二つ」

戸惑いがちにつぶやくと、OK、と彼は薄く微笑んで、一つ二つ、と口で数えながら入れて、「はい、どうぞ」

と笑顔で渡してくれた。果然としながら受け取ると、ぽつりと、

「昨日のことはもういいから」と小さく囁いてきた。

基喜と美代子ちゃんにも謝った。すると、

「良いって良いって」

基喜は、手をひらひらさせてそう言い、

「私も、もし好きな人が大変なことになったら、取り乱しちゃうかもしれないし……」

美代子は頬を赤くして基喜をちらりと見ながら、そう言ってくれた。

……皆、こんな私を許してくれた。

「私、頑張って、変わってみようかな」

幸美がぼつりとそう言うと、

「私も、今そう思ってたところだ」

澄子も、一つ頷いてみせる。

「最低な人間同士、頑張ろう、澄子」

そう言くと、澄子は、ああ、と静かに頷いて、膝の上に載ったスニーカーを、どこか寂しそうな眼差しですつと撫でた。

……じゃあな、幹土。もう、ただの友達だ。

空中廊下の扉を施錠すると、幹土は真っ暗な廊下を壁伝いにゆっくり歩き出す。

外から伝わる風の唸り声が廊下に反復して、轟々と鳴り続けている。

先ほど階段でつまづいた際に、壊れてしまったのか、携帯は電源が入らなくて、ライトが使えない。

「暗闇ほど、怖いものってないよな」

そんな軽口を叩いてみる。しかし、その声は掠れていて、膝は今にも崩れてしまいそうだった。

あの日の事を思い出す。今までずっと、意識の底に沈んでいたその記憶。

母さんが逝った後、父さんは夜遅くまで働くようになった。幼い自分は、父さんの帰りを待って、部屋の隅にいつまでも縮こまっていた。

そう、あの部屋は真っ暗だった。何も見えない中、自分の息遣いや体の震えを、ただひたすらに味わい続けて。ただ父さんの帰りを待っていた。

あの日も、寢床に就かずにずっと待っていた。けれど、その時間がいっつもより、少し長い気がした。だって、毎晩ぐしょぐしょに濡れる頬が、あの日は既にかさかさ乾いてひりひりしていたから。

濡れた頬を拭ってくれる父さんの手が、恋しかったのに。いつのまにか、代わりに拭っていたのは、あの生暖かな空気だった。

帰ってこない　待ち続ける哀しみ、恐れ、胸の苦しさ　それらが溢れていって、幼い自分は、徐々にまどろんでいった。そして、居間のドアが、聞き慣れない足音を伴って開いた時、自分は部屋を飛び出して、そこに佇んでいた親戚の叔父さんを戸惑いがちに見上げた。

「父さんは急な用事が出来て、今日は……いや、しばらくは、帰ってこないんだ」

叔父さんの引きつった笑みをじっと見上げ、数秒の後、幼い自分は目を見開いた。わかってしまったのだ。その小さな頭で。父の死を。

「叔父さんの顔って、何考えてるかわかりやすいんだよな」

歩きながら、あの日の叔父さんの顔を思い浮かべて、ぼつりとつぶやく。

笑って言ったつもりだったが、実際、明りを点けてみれば、そこにある顔はひどく汗に濡れて歪んでいるだろう。

左足が床に擦れる音が、真下から聞こえる。

……まだ着かないのか？ 早く。早くしないと。

胸を上下する度に喉が震えて、高い息の音が廊下に響きだす。始まった。

突然、足の力が抜けて、うつ伏せに倒れた。顎が床板を叩き付け、頭蓋が揺れる。

「暗闇って、怖いな。全く」

正面へ向けた顔を震わせながら笑い、そして大きく息を荒げて、伸ばした手は痙攣した。

「暗闇って、怖いよ」

真っ直ぐ前方へ視線を向け、泣きそうな、震えた声で、もう一度つぶやく。

目を塗りつぶす暗闇の、底の知れない深さ、黒さ、それらを感じて、一層喉を潰されるような、呼吸のできない苦しさが強められる。

……闇はすべてを呑み込んで。体を孤独に浸らせる。

今まで孤独を感じなかったのは、あいつらが 幸美がいてくれたおかげだ。彼らがいてくれたから。だから、暗闇にいても発作は起きることはなかった。

けれど、今、自分は一人だ。本当に一人。閉ざされた空間の中で、あの日のように、自分の息遣いを繰り返し繰り返し、耳にし、

涙を口の中に含み、腕を震わせて。

だけど。

「ミキさんが……待っているんだ」

涙でぐちゃぐちゃになった顔を前へ伸ばし　手を伸ばして、床板に爪を立て、這って進み始める。

荒い息遣い、体の震え、涙の味。あの日と何一つ変わっていないと思った。けど、違う。ミキさんの笑顔が、この目には浮かんではいる。

それだけで、倒れ伏した体は再び動き始め、荒い息を吐く口は生気を噴き始める。例え、発作に体が侵されていても。彼女の元まで地を這ってでも辿り着いて　。

扉を開くと、その先から溢れ出した光が目を真っ白に染めてきて、幹土は堪らず瞳を閉じる。

ゆっくりと体をひきずって、扉の隙間から出ると、幹土はそのまま仰向けに横になって息を弾ませる。

足近くで、扉が音を立てて閉まるのが聞こえた。

「やっと、着いたか……」

幹土は胸を押さえながら、膝をついて立ち上がると、そのまま、今の自分が出来得る最高の速さで駆け始めた。ほぼ、歩いているのに近い。

「ミキさん！」

ドアを開いて、ベッドを見ると、そこには、静かに身を起こして、こちらを見つめて微笑むミキの姿があった。

「幹土兄さん」

小さく彼女がつぶやくと、幹土は息を弾ませながら彼女の顔をじつと見て、ベッドに大腿で近づいた。そして。

「良かった……」

彼女の頭を胸に引き寄せて、両手で包み、撫でる。震えた声で繰り返すつぶやく幹土に、ミキは顔をわずかに赤く染めて瞳を潤

ませ、「良かった」と同じようにつぶやく。

「平気なのか、もう？」

彼女の腕を掴んで体を引き離して訊くと、

「はい。発作は収まったみたいです」

と、微笑んで頷いた。

幹土は安心したように息を吐くと、彼女の腕を片手で握りつつ、ベッドに寝転がった。

「……ホントに、驚いたよ」

力の抜けたような声でつぶやく幹土に、ミキは握られていない方の手で髪を掬い、「心配かけて、ごめんなさい」と、一言。

「ミキさん、心臓が悪いのか？」

顔を傾かせて、彼女の顔を斜めに見ながら言う。

「はい、悪かったんです」

ミキは手を髪に絡ませたまま、それを自分の胸に当てる。すると、引つ張られた髪は指の隙間から零れ落ち、腕の中で揺れた。

「どうして、俺に黙ってたんだ？」

険しい視線をミキへ向けると、彼女は視線を逸らして、唇を結んだ。

「言いたくなかったんです。ただそれだけ。別に良いでしょう、兄さん」

彼女の腕を握っていた手に、彼女の細い指が滑り込んできて、懇願するようにぎゅっと握り返される。

幹土は、叱りたい気持ちを押さえるかのように、静かに息を吐いて目を瞑った。

「薬なんて、なかったぞ。みんな埃にまみれて、飲めそうなものなんてありやしなかった」

「そうですか」

ミキは、どうでも良いように小さく答えた。

「薬、持ってるのか？」

間髪入れずに、「持ってます」と無機質な声で返すミキ。幹土は

眉を寄せて目を開き、

「なら、何で別棟なんかに取りに行かせたんだ？」

「気が動転していたんです。ごめんなさい」

ミキは、例の大人びた暗い顔をまた浮べて脇を見る。

幹土は、ふう、と溜息を吐いた後、仕方ないとばかりに苦笑して、起き上がり、

「寝ていなさい」

と、彼女の肩に手を当て、背中を横たえさせた。すると、ミキは突然腕を掴んで、引っ張ってきた。

「幹土兄さんのカレー、食べたいわ」

小首を傾かせて、じつとねだるような視線を幹土に注ぐミキ。幹土は、肩をすくめて、「良いけど、発作の後にそんなもの食べて平気なのか？」と訊く。

「良いの。平気です平気です」

幹土の着るウインドブレイカーの袖をぶるぶると左右へ引っ張って、ミキは声を上げる。

「わかった。今、あつためて持ってくるから」

幹土は、彼女のおでこに手を載せて擦って笑い、ベッドから降りると、部屋を出た。

どうも訳がわからない。どうして黙っていたのか、叔父さんも、ミキさんも。話したくないって……一体何故？

幹土は、頭を手で押さえて髪をくしゃりと掴んで考えながら、春芳の部屋をノックする。返事がない。開いてみると、真っ暗。

「どこ居るんだ、あいつ」

途端に険しく眉を寄せて、基喜の部屋のドアもノックしてみる。

「基喜！ 居るのか？」

返事を待たずに握ったノブを押す。電気は点いていなかった。

幹土は、荒っぽくドアを閉めると、廊下を駆け出した。おかしい。みんなして、どこ行っただんだ？

女子の部屋も同じように回ったが、誰も居なかった。

「春芳！ 幸美！」

階段を駆け下りて、広間をのぞき、厨房をのぞき、食堂ものぞく。いない。

「風呂か？ みんなして」

広間の横の廊下を真っ直ぐ走って、そして曲がり角を左に折れる。青い簾と赤い簾。迷わず、青い簾へ。

「おい！」

段差の前で靴を脱ぎ捨てると、脱衣場へ駆け入る。真っ暗だった。幹土は舌打ちして、靴を履かないまま、廊下に出ると、そのまま反対側の簾の下へ潜る。この際、殴られる覚悟を持って行くしかない。

「幸美！」

その叫びは、空しく暗い部屋に木霊した。

「ここにも、いないのか」

一体、どこに行ったんだよ、あいつら。

青い簾の中に戻って靴を履くと、そのまま歩き出す。

ホールへ戻ってくると、幹土はあれ？ とつぶやいて、立ち止まる。違和感を感じた。

ホールの雰囲気は、どこか明るくなったような気がする。根拠はないけれど、絶対に何かが違う。幹土は、口を小さく開けたまま、ホールの天井を見上げた。

「何で」

目が見開かれると同時に、驚きの声上がる。天井の、シャンデリア。あの、錆びていたはずの金縁が、輝かくまでに光沢を放っていて。黒く霞んでいたクリスタルの表面は雪のように真っ白で。「どういう事だ？」

幹土は、顔を上へ向けたまま、後ずさる。そして、隣の広間を見遣って、思わず声を上げて驚いた。

ソファーや、テーブル、そして、その下に敷かれている絨毯までもが、変わっていた。全てが新しくなっている。どういう事だ。

「いわゆる、ドッキリって奴だな」

幹土は、ははん、と唇を笑わせてつぶやき、背後へ振り向き厨房を見遣る。

その厨房に明りが点いていた。

「やっと戻ってきたか。幸美達か？」

厨房の机に寄せられた椅子が、今しがた誰かが腰を下ろしていたように、机から引かれていた。そして、背後を見れば、コンロにはいつの間にか鍋がことごと煮えて蓋が揺れている。

誰かが温めてくれたのか、と近づいて蓋を開ける。そして、目を瞠った。

中に煮えていたのは、赤いスープに浸されたばらのかたまりの牛肉、セロリに、たまねぎ……これは、ボルシチか？

「にしては、臭いを全く感じないんだけどな」

顔を近づけてみるけれど、臭いがない。鼻を吸ってからもう一度嗅ぐ　　やっぱりない。

「誰だ、こんなの作れる奴は」

幸美のレシピにボルシチはなかったはず。それとも、また新しく加わったのか。

蓋を閉めて、厨房を出ると、幹土は階段を駆け上がる。その時、急に頭に痛みが走り、足が段を踏み外した。

また来た。

咄嗟に手を伸ばして手すりを掴む。滑った両足が段の上をずれ落ち、幹土は階段にうつ伏せに倒れた。手すりを握って体を支え、もう片方の手で段の突起を握る。

「何だ、この痛み」

冗談じゃなく、やばい。痛みは昨夜の何倍にも増して、目を開けていられない。

幹土の手が手すりを離れ、横たわった体は下へ滑っていき、階段の下に足先がついて停止した。

あ、あ　　小刻みに零れる幹土のあえぎ声。震える指先が、何か

を掴もうと、段の上を動く。

目を開くと、視界が歪んでいた。ぐにやぐにやに、階段が折れ曲がり、その先の廊下が折れ曲がり、そして自分の腕も。

「俺は……」

本気で、これはやばいかも。このまま、死んでしまうことも、もしかしたら。自分の死をどこか客観的に考えながら、幹土は、滅多刺しにされた頭をぐらぐらと左右に揺らせて、動かなくなったけれど、その時。

「お嬢様の容態はいかがですか？」

高い女性の声が、背後から聞こえた。自分に向けられたもののなか、それとも。

「さつき寝付きました。五木先生も、もう大丈夫だとおっしゃっていました」

突然、頭上から声が上がった。

「良かった」

背後の女性の安心したような声。

「さて、一段落ついたことだし、私達も食事とさせてもらいましょう」

こつこつ、と靴底が階段を叩く音が、徐々にこちらに近づいてくる。

「え、でも……」

「少し休まないで。昨日からぶっ続けて動いてたんでしょ？ ほらほら、行くわよ」

歪んでいる視界の端に、白い靴が横切るのが見えた。何だよこれ、夢か？

かもしれないな、と幹土は唇を笑わせる。だって、現実の人間なら、どうしてこの倒れた人間を助けてくれない？ ほうつておくなんて、あまりにひどすぎる。

「こうなると思って、ボルシチを拵えておいたのよ。ほら、良い匂いがするでしょう？」

「あら、本当に良い匂い」

くすくすくす、と笑い合う女性達の声。

その時、突然曲がりくねっていたはずの階段の段が、徐々に引き伸ばされて平らになり、そして元に戻った。

頭の痛みもいくらか引き、手に再び力が入って、幹土は呻きながら立ち上がる。

「誰だよ、今は」

あらかた幽霊ってどこか。だって、既に何回も目撃していることだし。

階段の手すりに掴まって、しばらくじっとして、弾む息を落ち着かせる。そして、幹土は冗談じゃない、と頭を押さえつつ、厨房へ振り向く。やはり、そこには誰もいなかった。けれど。

「ふざけるな」

幹土は唇を震わせて、目を見開いてそれを見た。厨房の机には、白い陶器の皿が二枚。そして、その中には、先ほどのボルシチが湯気を立てていいいた。銀色のスプーンが、二本。

「あいつら」

幹土は、周囲を見回して、彼女達の姿を探す。

「どこに行っただんだ？」

俗に言う不法侵入か。汗を拭いつつ、幹土はふらつく足で厨房へと近づき始める。けれど、内心、もうわかっていた。これは、もうファンタジーの世界だ。全く狂った世界。

「頭、いかれちまったのか、俺」

瞼を閉じて頭を押さえつつ、首を振る。そして、目を開けば。ほら、やっぱり、机の上から、ボルシチの姿は消えている。

いかれたな、こりや。幹土はつぶやいて、先ほどミキが吐いたカレーが床に広がっているのを見て、厨房から布巾を取ってきて、拭いた。そして、投げ出された椅子を元に戻す。

鍋の蓋を取れば、当然そこにはカレーが熱気を上げており、幹土は小皿を取ってカレーを移すと、お盆に載せて、厨房を出て。そし

て、階段を上がった。

「ミキさん。お待ちせ」

ノブを握って開く。

もし、そこに誰もいなかったら　そう思うと、思わず瞼を閉じてしまう。けれど。

『幹土兄さん、遅すぎ』

ふて腐れたような声が聞こえて、ゆっくりと目を開く。

両手をこちらへ伸ばしたミキが、早く早くとはかりに掛け布団の下足をばたつかせている。

「ごめんな。遅くなっちゃって」

幹土は、ベッドに近寄るとしゃがみ、お盆を絨毯の上に下ろして皿とスプーンを手取る。「しっかり持てよ」とそれをミキの手に渡す。頷いたミキは、スプーンを構えたが否や、皿にそれを突っ込んで、豪快にぱくぱくと口の中に放り込み始めた。

「おい。そんなに急いで食べたら……」

案の定、ミキの白いワンピースの胸元に、カレーが零れ落ちて、染みが広がっていく。幹土は、手に持って渡そうとしていたナフキンを下ろし、「あーあ……せっかくの綺麗な服が台無しに」と、彼女の胸に濡れた布巾を近づける。

服の生地を引っ張って、静かにごしごしと拭く幹土の顔を、ミキは間近でじっと見つめる。ぼつと、夢の中を彷徨うような瞳。

「幹土兄さんが、痴漢した」

ぼつりとつぶやいたミキの言葉。幹土は、えっ？　と訳のわからないといった様子で彼女を見る。

「はい」

無言で皿を手渡すミキ。無言でそれを受け取る幹土。

「自分で拭くわ」

胸に当てられた布巾を引っ張って、ミキは自ら拭き始める。そこでようやく、幹土は自分の手がまずい場所に置かれていることに気付いた。

「ごめん、ミキさん」

苦笑して手を離す幹土に、ふて腐れたように、「幸美さんに言うてやるうっ」と、痛いことを言う。

「それ、言わないで、頼むから」

幹土の目が、少し真剣な色を浮べる。

「あいつ、冗談通じないんだよ。本気で怒るんだ、そういうこと言う」と

ナフキンを彼女の膝に添えながら、懇願するように言う。

「きつと幹土兄さん、幸美さんの事を構ってあげてないんでしょ。

魅力ないのかしらって悩んでるよ、幸美さん」

子供の癖にませたことを。幹土は、拳骨を彼女の頭に乗せる。

「私だって、十五歳。もうそのくらいのこと知ってるわ」

「にしては、子供っぽいことを繰り返すよね」

笑って頭を撫でてやる。

「うるさいわ！」

ミキは、顔を真っ赤にして、その手を払い除ける。

「……染み、取れないな」

幹土は彼女の胸元に残る茶色い染みをのぞいて、零す。

「幸美の服、借りてこようか」

そうつぶやいてから、幹土ははっと気付いて眉を下げ、静かに黙りこくる。

「幸美さんの服、大きいんだもの」

そう首を振って、ミキはナフキンを胸の上に付け終ると、幹土の手から再びカレーの皿を受け取り、例のごとく掻きこみ始める。

「幸美も、鈴木も、先生も」

濡れた布巾を彼女の口元に当てながらつぶやく。

「春芳も、加賀も」

ミキが、ぴたりとスプーンの動きを止める、

「みんな、幻だったのかな」

幹土は俯いて、くせの激しい髪の毛の先を垂れた。ミキは、口元

に皿を寄せたまま、目だけを幹土へ向け、

「違うわ」

と、一言、つぶやいた。

「俺が自分自身で作り出した、ただの幻。そうなんだろう？ ミキさん」

幹土から視線を外し、無表情な顔をまっすぐ前へ向けるミキ。

「俺の現実には、きっと、ミキさんだけなんだよ」

静かにミキの両膝へ顔を載せて、ぼんやりとつぶやく。

ミキは皿を口から放して、違うって言うてるじゃない、とカレー色に染まった唇を動かせる。

「全ては、自分の孤独を紛らわせる為に作り出した幻」

「馬鹿幹土」

突然、片膝が突き上がって、載せた頭を蹴り飛ばされ、幹土は声を上げて床に倒れ伏した。頭を押さえて唸る。

「馬鹿馬鹿幹土。馬鹿幹土。馬鹿馬鹿アホアホ幹土！」

ミキは、握っていたスプーンを幹土へ投げつけた。カレーが飛び散って、幹土の頭にかかる。

「幹土兄さんは、そんなに馬鹿だったなんて。もう、あなたはただの馬鹿幹土。ただのアホ人間」

今度は皿を振りかざすミキに、幹土は顔を蒼白にさせて立ち上がり、「待って。落ち着け」とつぶやきながら部屋の隅へと移動する。「そんなこと言う馬鹿幹土なんて、知らない。見損なったわ」

ミキは、いつの間にか空っぽになっている皿を、ベッドの横のお盆へと下ろすと、付けたナフキンを取ってぐしゃぐしゃに丸めて、投げ捨てる。そして、そのまま掛け布団を被って、壁の方へ向いてしまった。

幹土は、それを見遣ってから、部屋の隅の壁に背中を寄りかからせて、足を伸ばして座り込んだ。そして、頭を壁に付けて、上を見る。

「頭で考えてもわからないのに、何となく感じて、わかってしま

うことって怖いよな」

そして、気付かなければ良かったと、後悔するんだよな。

「幸美達は、どこに行っただんたろうな、全く。かくれんぼでもしてるのかな」

そんなつぶやきに、ミキは答えを返すはずもなく。ただ、すすり泣く声だけが、小さく聞こえた。

幹土は顔を下げて、静かに目を瞑る。ゆっくりとした息遣いが、ウィンドブレーカーの襟の中で何度も繰り返され。そして、幹土は決心したように瞳を開いた。立ち上がる。

「ミキさん、ほら。起きてくれよ」

幹土は、彼女の被った掛け布団を剥ごうとする。ミキはぐずったような声で唸りながら、それを懸命に離すまいとする。

「えい」

一気に引つ張ると、ミキは掛け布団と共に体をこちらへ向けた。

「ミキさん。一緒に下へ行って、お茶でも飲もう」

彼女の赤くなった目に手を近づけると、静かに瞼は伏せられ、その上をすつと横へ撫でてやる。濡れた指先を離し、それをそのまま彼女の小さな腕へと当てて立ち上がらせる。

「何か、見知らぬ人間が徘徊してて、気持ち悪いけど、気にしないでね」

幹土はそう言って、彼女が靴を履いたのを確認してから、腕を掴んだまま、歩き出す。

「幹土兄さんにとっては見知らぬ人間。私にとっては、家族」

「そっか。なら、挨拶しとけばよかったな」

そう言うってから、幹土は、「いや、無理か」と苦笑して首を振る。挨拶する前に、向こうが消えてしまっただけは、仕方がない。

「幹土兄さん」

階段を下りると、先ほどのようにミキが背を向けて立ち止まる。

幹土は足を止めて、「何？」と微笑む。

「もし、この屋敷に、幹土兄さんと私、二人っきりでずっと暮らせ

たら、幹土兄さんは嬉しい？」 え？ 幹土は、彼女の長い髪

が垂れ下がった白い背中を、啞然と見る。けれど、静かに目を瞑って微笑むと、

「嬉しいな」

とつぶやく。そして、目を開き、けど、と付け加える。

「幸美を悲しませるのも、嫌だな。あいつ、俺にぞつこんだからさ」
そう言って軽快に笑う幹土。すると、ミキは無言でじっと佇み、
けれど突然後ろへ振り返ると、

「自惚れ幹土」

と、背中で手を組んで、体をこちらへ乗り出して言った。彼女の
白いワンピースの裾が左右へ揺れる。長い髪も。

幹土は広間で、テーブルにミキと向かい合わせに腰を下ろす。テーブルセットのプレートの上の、ポットを手に取って、カップへ傾け、熱い湯気を注ぎ口から立ち上げる。それから、座っているミキの前に、カップを一つ、そして、自分の前にもう一つ並べると、静かにチョコレートケーキの載った皿を渡した。

「良いんですか、本当に？」

ミキは皿を受け取りつつ、白い顔の赤い唇を動かせる。

「本当は、夕食の後、皆で食後のティータイムする時に出そうと思
っていたんだけどね。予定変更。……ミキさん、俺の分、半分あげるよ」

幹土は、自分の皿を手元に引き寄せ、ケーキをフォークで半分に割った。

「頂きます」

ミキは、静かに目を伏せてそう言つと、カップを手にして、ゆっくりと口に付けた。彼女の白い顔が、白い煙を纏って、肌が一層、人形のように真っ白に、綺麗に見える。

「いただきますっ」と

幹土は、カップを手にとると、軽く啜った。

「幹土兄さん、音は立てないでよ」

ミキが、眉をひそめつつ、顔をカップから上げる。

悪い悪い。幹土はそう言って、カップを下ろすと、半分になった
チョコレートケーキをさらに割って、口に運んだ。

「結構いけるな。箱入りの、スーパーで売ってる安い奴だけど」

「幹土兄さん、食べながら口を開けないで」

「悪い悪い」

ミキは、カップをソーサへ下ろすと、ようやくフォークを手に取り
つて、ケーキの皿を引き寄せた。その大きな瞳が見開かれて輝く。

「頂きます」

ぶすつとフォークを一刺し。そして。

幹土は、目を丸くして、彼女の挙動を目で追った。フォークに突
き刺したケーキを丸ごと口に放り込み、例の如く、あのひょうたん
顔をこちらへ見せ付ける。

「おいしいわ」

変な音を交えながら、ミキは横に引き伸ばされた唇を動かしてつ
ぶやく。

幹土は、「ミキさん、汚いぞ」と、眉をしかめて、食べる気も失
せて、フォークを置く。

彼女はしばらくもぐもぐ顎を動かせて、喉がごくりと鳴ると共に、
彼女の頬は元に戻った。

「幹土兄さんの、もらっわ」

すぐにフォークを差し向けてくるミキに、片手で皿を押しやる。

「全部食べて良いよ。俺、お茶だけで良いや」

幹土はミキの口元についたケーキのかすを手にとって、ティーセ
ットのプレートの上になすり付ける。

え？ 良いんですか？

まん丸の目をさらに丸く、彼女は幹土のケーキの皿を見下ろした。
そして、フォークによって切り取られたケーキの断面を見て、頬
を赤く染める。

「半分は手つけちゃったから、汚いなら残しちゃって」

幹土は紅茶を囓りつつ、ミキへ視線を向けずにそう言う。

「じゃあ……もらいます」

ミキは、おっかなびっくり幹土の皿を手に取ると、それを引き寄せて、見下ろす。頬を朱に染めて、一口サイズにケーキを切って、震える唇へと運び。ぱくりと思い切ってかぶりついた。

紅茶から上がる煙は、その頬の色を、白く隠すことはできなかった。赤すぎたから。

「ミキお嬢様」

突然、横から若い女性の声がして、幹土は、危うくお茶を口から零しかけ、慌ててカップを下ろす。

「あら、サエコ」

ミキは皿へフォークを置くと、横に佇む使用人へと顔を上げた。

「寝付けないのでしたら、何かお夜食でもお作りしましょうか？」

「結構よ。それよりサエコ。こちらは、私の恋人の、幹土さんよ」
は？ と、幹土は間拔けた声で、ミキを見遣る。ミキは、自慢げに唇をにっこり笑わせて、腕を組む。

「ミキ様とお付き合いなされているお方でしたか」

使用人は驚いたように目を丸くして、こちらを見てくる。しかし、すぐに顔を引き締めて。

「……私、サエコと言います。ミキ様のお世話役として、このお屋敷で働かせてもらっております」

いや、あの。幹土は手を伸ばして、使用人に弁解しようとする。使用人は、ショートの黒髪を垂れて、お辞儀をすると、「今すぐお茶をお運びいたします」と、その場を去ろうとする。

「結構よ、サエコ」

ミキのその声に、使用人は、「しかし……」と困ったようにつぶやいて振り返る。

「良いのよ。喉は乾いていないし。……幹土さん。そうでしょう？」
意味ありげな視線をこちらへ投げかけてくるミキに、

「……あ、ああ」

幹土は数回頷いて、使用人へちらりと視線を向ける。そして、カップに注がれた紅茶を見下ろして、握っていた柄を、音を立てないように静かに離れた。

使用人は、無言でミキの顔を見た後に、困ったような視線をこちらに投げかけた。苦笑を返すと、彼女は再びミキを見て、

「承知いたしました。……何もお出しできませんが、ごゆっくり」

礼をして、彼女は背を向けた。幹土は、足音が遠ざかるのを聞きながら、安心したようにカップへ手を伸ばし、一口飲む。そして、顔を上げた時には、もう使用人の姿はどこにもなかった。

「彼女、とても真面目で、器量も良くて、助かるわ。けど、ちょっと冗談が通じなくて困るの」

ミキは首を振ってそう言いながら、ケーキの上に乗ったチョコレート玉を指で摘んで口に放り込む。

「あれ、本当に冗談で言ったつもりだったのか？ 恋人って」

幹土が眉をしかめて訊くと、ミキは上機嫌に鼻歌を歌いながら、もう一玉。

幹土は、そんな彼女の様子を見ながら、ふと思いつく。

「……サエコさん、結婚式挙げたのか？」

突然訊いた幹土に、ミキは、え？ とばかりに顔を上げて幹土を見る。

「いや、もう結婚してるのかなあって……」

幹土は、脇へ視線を逃がしながら、紅茶を啜る。そして、ちらりと横目を向けて、ミキの顔が無表情になるのを見て、やっぱり別れたのか、と気付く。

「別れたらしいわ」

案の定、ミキの無機質な声が返ってくる。そうなんだ、と幹土は頷きながら答えた。

「そんなことより、幹土兄さん」

その声に、「ん？」と、顔を上げると。

「はい、あーん」

ミキが、何の漫画で読んだのか、お決まりのポーズで、ケーキを刺したフォークを近づけてくる。幹土は苦笑して、「あーん」と、調子はずれな声を上げて口を開く。

「と言いつつ」

差し向けてきたフォークを、ミキは突然自分の口元へと戻し、かぶりつく。

幹土はそれを見て息を吐いた後、膝の上で頬杖をついてカップを口に傾け、「お決まりのネタだな」と、肩をすくめる。

「つまんない、兄さんの反応」

ミキはぶすつとした顔で、もぐもぐしながら、紅茶をもう一口、口を含んで、カップの底を尽かせ、ソーサに下ろした。

「飲むか？」

ポットを手に取りうとする幹土を手で静止し、ミキは「いいの」と微笑んで、立ち上がる。

すると、幹土はカップを煽って、一気に飲み干して、それをティーセットのプレートに置き、ケーキの皿も一緒に載せる。

二人分のティーセットを載せたプレートを持って、立ち上がると、ミキを隣に従えて歩き出す。

「おいしかったな」

彼女を見下ろして微笑むと、ミキは背中を手を組んで、笑顔を見上げさせて。うん、と一つ頷いた。

その彼女の笑みを見て、その大きな瞳が細められるのを見て。微笑んだ直後に、視界が傾いた。

ホールに響き渡る 陶器の割れる音、砕け散る音、そして水が広がる音が。

床の上で伸びた自分の腕が、熱い湯に浸されるのを感じる。けれど、その泉から手を離すこともできず、痛みを感じることもできず、ただ視界が前みたいに変形で、頭が弾けているのだけを感じる。これは、死ぬな。たぶん。

「ミキさん」

唇だけが動いてくれた。

「幹土兄さん！」

ミキが膝をつき、床に広がった紅茶から腕を引き離してくれる。垂れたワンピースの裾が、オレンジ色の液体を吸って、じわじわと濡れていく。もったいない。

「いやよ！」

ミキは長い髪を胸に垂れ下げてきて、ひどく歪んだ顔を近づけてくる。

「いやったら、いやなの！」

胸板にこれでもかと、両の拳を叩きつけられる。唇が思わず微笑む。

「ミキさんと一緒にいられるんなら、別に良いよ」

指先をかすかに動かして、彼女の髪を握る。艶やかで柔らかい、彼女の髪。

「似ているよ、ミキさんは」

ミキは、胸に胸を重ねて、上体に覆い被さってきた。泣き声を上げて。

「母さんの目、ミキさんみたいにおつきくて」
色白で。美人で。明るくて。けど。

「心は、すぐに壊れてしまいそうに繊細だった」

ミキさんも、ね。幹土は静かにそうつぶやいて、息を零す。小さく笑って。

「私の所為で、幹土兄さんが」

ばん、と自分の頭を、胸板に叩きつけて自分を責めようとするミキ。痛いんですけど。

「別に良いさ。これも、運命だったって事で」

そうつぶやいて、目を閉じ、覚悟を決めようと思いを巡らせた時、急に頭痛が弱まった。幹土は、気まぐれだな、と笑って、力の蘇った体を起こして、ミキの伏せられた頭を膝の上に抱える。

「寿命はまだみたいだ」

そう軽快に笑うと、でも、もうすぐ来るわ、とミキはぐぐもった震えた声を上げる。

「それまでは、ゆっくりしているさ」

立ち上がる。彼女もすぐに立ち上がる。精一杯その小さな体を寄せて、この身を支えようとする。

「ありがとう」

静かにそうつぶやくと、ふらつく足を一步、一步踏み出して。階段を上って、廊下を歩いて。そして、部屋に入って。

「ベッドに横になって、と」

幹土は、ミキに支えられながら静かに横たわると、ふう、と深く息を吐いた。

「ミキさん、その鞆、開いて」

ベッドの横の鞆を指差す。

「これですか？」

そう、とつぶやく。ミキは鞆を開くと、顔を上げて、次の指示を促すように大きな瞳で見つめてくる。幹土は笑って、「その中に、ポーチがあるだろ？」と、顎を前へ動かした。

「これ？」

掴んで掲げるミキに頷き、彼女が持つてくるとそれを受け取って、開く。

「ミキさん、オルゴール好きだよね？」

「え？」

「これ、全部あげるから」

ポーチの中のたくさんの小さなオルゴールを示す。ミキは、目を大きく開き、良いの？ とつぶやいた。

「あげる。……あ、でもやっぱり、これだけは残しておく」

一つ引き抜いて、幹土は天井へ向けて、それを掲げた。ペールギユントの、「朝」。これを勝手にあげたら、怒るだろうから。幸美は。

「ありがとう」

ミキは、オルゴールを一つずつ摘み取っては、幹土の胸の上に並べていく。幹土はおいおい、と苦笑しながら、自分の胸に並んだオルゴール群を、顔を起き上がらせて見る。

「まずは、これから」

幹土のへその上にあった一つを、手に取ってぜんまいを巻く。そして、彼女は耳に近づけた。

「カノン」

ぼつりと、高い声でそうつぶやく彼女。

「ミキさんのお母さん、どんな人だったんだ？」

カノンの旋律と共に。幹土は静かに振り向いて訊く。

「意地っ張りで、わがままで、明るいい人だったわ」
そうなんだ。

「けど、お父様は、その逆。優しくて、落ち着いていて、静かな人少し、お調子ものだったけれど」

カノンの旋律を、オルゴールと声を揃えて口ずさみながら、ミキは言う。

「俺の母さんはね、自殺したんだ、実は」

ミキが、鼻歌を止める。

「皆、病気で死んだと思ってるけど。あれは、自殺。俺、見たんだ」
ミキが、こちらへ顔を向けてじっと見る。

「母さんが、私の所為、私の所為、つてずっと声を上げて泣いてるところを。見たんだよ。……何度も何度も自分の胸を叩いて、壊れる、と繰り返していたんだ」

壊れる？ ミキが、驚いて啞然とした顔でつぶやく。

「壊れるって、あれはたぶん、自分が死ねばいいって、そういうことだよ。母さん、ずっと願ってたんだ。自分が死ぬ事を」

その通りになったただけだね。幹土は、そう力なく笑って、天井を見つめる。

「だから、自殺なの？」

ミキはオルゴールのぜんまいを握って、音を止め、手の平に載せた。

「だって、健康って、結構心に左右されるだろ？ 死にたい死にたいって思ったら、体壊して、本当に死ねるだろうさ」

幹土は、ふ、と口から息を零して、引きつった笑みを浮べる。

「確かに、母さんの所為だったかもな。ミキさんの両親が死んだのは」

ぽつりとつぶやいた幹土の声に、彼女は目を見開いた。え、と小さく言葉が漏れる。

「ミキさんの両親が、仕事の関係でわざわざ遠方の都会まで足を運んだ時にさ、母さん、偶然その近くまで旅行に来てて。それで、頼んだんだよ、一度顔見せてって」

ミキは、固まったまま、瞬き一つせずに目を見開いている。

「だからさ、わざわざ叔父さんと叔母さんは、電話の向こうで駄々をこねる子供に、会ってやろうと、駅前でお土産買って、仕事の合間に時間見つけて新幹線に乗って」

ミキは、両耳を押さえつけて、目をかっと見開いた。彼女の肩から垂れた髪が、宙で小刻みに揺れる。

「そして、待ち合わせの駅で下りて。母さんが立っているバスターミナルへと早足で向かって……」

叔母さんは、遠くに見える自分に瓜二つのその顔を見て、たまらなくなつて駆け出して。道路を横切つて。危うく轢かれそうになった。

「そして、幹土兄さんの母さんは見ていられなくなつて道路に飛び込んだのね」

ミキが、ゆつくりと耳を覆っていた手をすり下げて、つぶやく。

「飛び込んだ母さんは、捻挫した叔母さんを支えて、バスターミナルへ戻つて。そして、叔父さんが駆けつけてくるのを見遣つた。その時、轢かれちゃつたんだ」

轢かれちゃつたんだ。幹土はもう一度繰り返し、まるでその光景

を見ているかのように目を天井へ向けて、自分の頭を両手で掴んで震えた。

「きつと、母さん、ものすごく驚いて、啞然として、息が止まって……。それでたぶん、すぐに、死のうって決意したんだよ。けど、その直後に、もう一人死んじゃってね。大切な人が」

目の前で、亡骸を抱きしめるもう一人の自分が、頭上を見上げた。そして、見開いた目に、太陽の眩い日差しが刺さり、彼女は真っ白な視界の中で、舌を強く噛んで。切れるほどに強く噛んで打ち震えて。そして、結局、それは命と共に断たれてしまった。

「母さん、もう頭の中、空っぽになっただろうな。病院に運ばれるまで、瞬き一つしてなかったらしいから」

幹土は、ベッドから身を起こす。胸に載っていたオルゴール達が、ばらばらと左右へ零れ落ちていく。

「ミキさんは、本当に似ているよ」

手を伸ばして、彼女の顔を掴み、こちらへ向かせて寄せる。

「ごめんな。母さんに代わって謝る」

ぼたぼたと、ミキの顔に、鼻筋に 透明の雫が落ちて、唇の中へと伝う。しょっぱい味が彼女の中で広がった。

「うっん。謝らなくて良いの」

ミキは静かに幹土の頬に手を当てて、無表情で見た。

「私、その後すぐにお母様達の後を追って死んだから。この屋敷で」

幹土は、声を漏らして、歯を食い縛った。俯いたその顔を、ミキは見下ろして微笑む。

「母さん達、何で帰って来ないのかしらってずっと思ってたわ。私が病気で寝込んでるのに、二人してずっと出かけて。寂しかったの」

ミキはすつと頬から手を離すと、ベッドから降りて、机に近づいた。そして、腰を折って、三段目の引き出しを開けて、その木箱を手取る。

くるんと一回転して、腕に収まったそのオルゴールをこちらへ向

けて、顔を傾いで微笑む。

「それ……ミキさんのだろ？」

ベッドの隅に腰を下ろすミキに、幹土は涙を拭いながら言う。そうよ、と彼女はオルゴールを開く。

「ごめんな。その鍵、壊しちゃったんだ。俺が落とした」

幹土は、鼻水を吸いながら、じっと彼女へ赤い目を向ける。いいんです、と彼女は微笑みを浮べたまま、蓋を倒した。

「綺麗な音色だな」

流れ出した旋律を聴いて、幹土は顔をにつこりとさせる。けれど、それが突然歪み、幹土は歯を食い縛って頭に手を当てた。

「これ、お父様とお母様が、外出先で買って、誕生日に送ってくれたんです」

箱の中で、針を点々と纏った円柱が、くると回転し、振動板を叩いて音を奏でる。それをミキは顔を近づけて、楽しそうに眺めている。

「そうなんだ。大事なもののなんだな」

震えた声を喉から絞り上げて、幹土は前髪をくしゃりと握り潰し、頭の痛みを必死に堪えた。しかし、幹土は口を開いて続ける。

「ミキさん、この屋敷で生まれてから、一度も外出したことないんだろ？ 寂しいよな、それって」

何にも変わり栄えのない毎日が淡々と、そして穏やか過ぎる時間が、時に体を締め付ける荒々しいものとなって流れすぎていき。いつしか彼女は外界への興味を失って、心に築いてきた明るさを捨てて、空虚な目で空を眺め出した。

病気な彼女は、いつもベッドの中に。調子が良くなって外へ出て、その世界は垣根の中の範囲内ではない。それは、寂しいことだ。

「俺、ミキさんとこれからずっと一緒に居るよ。そうすれば、退屈しないだろ、ミキさんは」

涙が零れた頬を懸命に緩ませて、ミキへ言う。ミキは、オルゴー

ルを握り締めて、首を振った。

「良いの。もう、いっぱい楽しんだから。これで、もう十分」

ミキは靴を脱いで、両足をベッドの上で伸ばした。幹土と向かい合う。

「このオルゴールに、私、死ぬ前をお願いごとをしたの」

どんな事、願ったの？

「まず、変な人達が来ますようにって」

それ、皆が聞いたら怒るぞ。それから、優しいお兄さんが私にできますようにって。体が元気になりますようにって。

彼女の肩が震えていき、声はか細くなっていく。

「苦しくなった時、誰かが側に居てくれますようにって。恋人ができますようにって。その人とずっと仲良く暮らせますようにって」

ミキは、顔を俯け、涙が、箱の中へ零れ落ちて、金色の円柱へ垂れて光る。オルゴールは止まない。

「すべて叶ったよ。……ただし、幹土兄さんを巻き込んで」

ミキは、オルゴールを膝から横へ払った。ベッドの上で傾く木箱

「幹土兄さんは、今、夢を見てるの。私が見えるってことは、それは夢なのよ。見えるものは全部、夢」

夢。幹土は震える顎をミキへと向けてつぶやく。

「ある日。ある女の子が、うたた寝をしていた一人の男の人の、頭の上に、薄いシーツを被せて悪戯しました」

ミキが、顔を俯かせて、ぽつりと掠れた声を出す。

「そのうち、そのシーツの上にも、風呂敷やナフキン、ハンカチまで、何でもかぶせていったのです。その人は、頭が重くなる夢を見ました。夢の中の彼は、息苦しくなって喉を押さえました」

色々なものをかぶせて、かぶせて。しまいには、本当に息が出来なくなっていました。彼の口は、シーツの中で苦しそうに歪んでいたかと言いますと、そうではありません。笑っていました。

彼は、頭に色んな物がかぶさっているというのに、まだ眠っていたのです。彼は、綺麗な女の子と友達になる夢を見ていて、だらし

なく口元を垂らしていました。しかし、彼は、目を覚ましました。何も見えずに真っ暗で、頭の上の物を取ろうにも、うまくいきません。

助けを呼びました。すると、側で、小さな女の子が声を上げます。「ごめんなさい。悪戯が過ぎました。さっそく取って助けてあげます」

彼女は一枚一枚、急いで剥がしていきました。側に、色とりどりの布が積み重なって、山になっていきます。

「彼は、ようやく全ての被りものを取って、晴れ晴れとした顔で、大きく息を吸って、目の前の女の子に言いました。もう、こんな事したらいけないよ。女の子は、涙ぐみました。けれど、ふんだ、と言つぶやくと、また元のように飄々とした顔で、彼の側を去っていったのです。彼は、安心して再び目を瞑りました。また、夢を見て、あの綺麗な女の子に会いに行こうと思ったのです。けれど、もうその夢は、その綺麗な女の子は、彼の前に現れることはありませんでした。彼は、悔しがりました。こんなことなら、夢をあのままずっと見ていたかったのに。けれど、そんなことは絶対に叶いません。彼がその綺麗な女の子と仲良しになって、恋人になる頃には、彼は天国への階段を全て上り切ってしまうからです。彼は来る日も来る日も、あのシーツを頭にかぶせましたが、とうとう女の子に会うことはできませんでした」

静かに声を下げて、語り終えたミキは、すぐに顔を上げて、幹土を見た。

「それ。ミキさんが作ったの？」

息を荒げて、頭をベッドに横たえた幹土が、引きつった笑いを浮かべる。

「即席で作った話です」

ミキは、ベッドに腰を下ろしたまま、じっと身動きせずに、つぶやく。

「そっか。つまり、俺、夢ばかり見て起きないから、このまま死

んでしまつと。そういうこと？」

ミキは、答えない。ただ、じつと、無表情な顔を向けてくるだけ。「それでも良いよ。だって、俺、妹と一緒にいて死ねるんなら、別に構わないよ。可愛くて仕方ないんだ。君をほったらかしにして、目を覚ますことなんてできないよ」

片手を頭に当て、そしてもう片方をミキへと伸ばす。それを両手で掴んで自分の頬へと当てるミキ。

「私は、兄さんのお母さんじゃないのよ。こんなに似てるけど、兄さんのお母さんじゃない」

幹土は、息を吞んで、汗だくの顎を震わせた。

「でも、俺は。ミキさんが、孤独になるのが許せないんだ」

あんなに輝いていた瞳。それが、こんなに空虚に　空虚に　。唇がそんな心のつぶやきを、気付けば吐き出していた。ミキは微笑んで、

「そんな事ないです。見てください、私の目」

ゆっくりと彼女の瞳を。その中に映る自分を、見た　それは濡れていて、光っていて、けれど決して空虚ではなかった。むしろ、輝いていた。透明に。

「私、とても楽しかったです。ありがとう、幹土兄さん」
掴んだ手を静かに離される。

幹土は、靴下のまま床に立ち上がったミキへ、おい、と手を伸ばそうとするが、頭が軋んで、すぐに押さえて唸る。

歪んだ視界。歪んだ部屋。歪んだ彼女の笑顔　それは涙に濡れて、とても綺麗で。その手に握られた木箱、そしてその中のオルゴール。光り輝いて、くると円柱が回っていて。音が紡ぎだされて。それが、突然止まり、ミキは箱の中に手を入れて、円柱を掴んでいたが、ゆっくりともう片方の手を箱から離す。そして。

「こんなもの、捨てていれば良かったのよ。サエコ」

腕を振り上げると、木箱が宙を裂き、ミキの頭上へ掲げられる。その腕を振るったミキは、泣き叫び、そしてそのオルゴールはなだ

らかな軌跡を描いて部屋の壁に激突する。

古びたオルゴールは、軋んで軋んで、蓋を割られ、金属が高く鳴り軋み、そして落下する。木箱が砕ける。

それと共に、頭を覆っていたシャツが脱げた。最後に目にする彼女の白いワンピースが、踊るように空中を流れるのを。

彼女は、最後まで微笑みを絶やさなかった。その七歳の命が、細い細い綱をようやくつなぎ止めており、彼女はその上を軽やかに舞って歩き、綱渡りを続けていたけれど。綱はいつしか断ち切れてしまった。彼女は落下する。助けの手を彼女に差し向けようと、誰一人、救う事はできなかった。彼女は、手元にあった一つのオルゴール、それだけを頼りに、心を繋ぎ止めて、底の知らない闇の中へと落下していったのだ。

いくつの涙が、そのオルゴールの上に流れただろう。その金縁の蓋を濡らしただろう。

落下する体が、くると宙で回る中、彼女は、オルゴールを開ける。そして耳にする。それを聞いている時、彼女は色んな想像を膨らましたのだ。

私の願いは ささやかなものです。私くらいの子のほとんどは、こんな願い、ありきたりで、ひどく退屈なものに過ぎないかもしれませんが。けれど、私にとっては、それは嬉しすぎるもので、もしそれを手にすることができたら、嬉しくて嬉しくて、屋敷の周りを何周もしてしまうでしょう。

彼女が死ぬ間際に書いた、一つの作文。何かの本で、小学校に通う彼女くらいの歳の子は皆、授業で作文を書かされると載っていた為、彼女はそれを真似したのだった。けれど、退屈なその作業はすぐに彼女の意識の外へ。そして、またオルゴールを手にして、うつとりして聞くのだった。

七歳の命が幕を閉じた時、綱が断ち切れてからずっと落下し続けていた彼女の心は、ようやく死という安泰な地へ降り立つことがで

きたのだ。

けれど、彼女はここに至るまでに心を削って、その心の砂を、あのオルゴールの中へと注ぎ込んできたのだ。何度も何度も願い、繰り返し繰り返しそれをオルゴールに聞かせたミキ。彼女の想いを纏ったオルゴールは、自分に触れたその人間の心へ、溢れる願いを想いを注いだ。

物に込められた想いは、とても美しく、そして儚げで。けれど、その夢は、彼の心の隙間を潤してくれた。

ミキはとうの昔に死んでしまったけれど。彼女の想いはあのオルゴールに宿って、そしてオルゴールと共に砕け散ったのだ。

俺は何も彼女にしてやれなかった。残された想いが形作った幻影へしか、俺は手を触れることも、優しくその髪を梳いてやることもできなかったのだ。けれど。

俺はきつと、あの幻影の彼女を救ってやることができたのだと思う。彼女の目が。そう信じさせてくれた。

白いワンピースが舞って、あの長い髪が舞って。そして、彼女の想いも風と共に軽やかに舞って。消えていったのだとそう信じてる。

幹土……幹土……。

弱弱い声と共に、誰かの腕が胸を揺さぶってくる。その細い手をすつと掴んでやると、ぴたりと動きを止めた。

静かに起き上がる。すると、幸美は顔を上げて、真っ赤になった目を見開き、「幹土」と呆然とつぶやく。

「……今、何時？」

ぼつりと、間拔けた声で言うと、幸美は、

「馬鹿幹土！」

いきなり胸に頭突きを食らわしてきた。

「痛って……。いきなりなんだよ、おはようぐらい言ってくれないのか？」

「何がおはよう、よ！ 馬鹿幹土！」

幸美は頭を下げたまま、肩を震わせる。

幹土は笑って、静かに彼女の頭を抱いて引き寄せた。そこで、男の静かな声が聞こえる。

「ようやく、目が覚めたか。……色んな意味で」

壁に背中を寄りかからせた春芳が、隈のできた目を、こちらへ向ける。窓から差す日差しが、その横顔を白く染め上げる。

「……春芳」

そう言った時、「幹土」と戸口から声がして振り向くと、鈴木が啞然とこちらを見つめていた。

もう一度、彼女の唇が、幹土、と震えた。その途端、彼女はこちらへ駆け寄り、突然目の前に立ったかと思うと。

「ふざけんな！」

思いつき頬を平手打ちされた。

反対の壁へ向いた顔を、幹土は呆然と戻す。

「もしかして、かなり心配させたか、俺？」

小さくそう訊くと、鈴木のロングの髪が肩の上で小刻みに揺れた。そして、突然彼女は幹土の首に腕を回してきた。

私は……なんでこんなことやってるんだろうな。もう、ただの友達だって自分に言い聞かせたはずなのに。

耳元でそうつぶやくと、静かに嗚咽し始める。幹土は驚いたように、自分の首にかけられた彼女の腕を見つめ、そして静かに微笑んだ。視線の先にいる春芳が笑って、やれやれとばかりに首を振る。

「み、幹土……何してんだよ！ そんなうらやましいこゝ」

突然、部屋に絶叫が響き、見てみると、基喜が、女性二人を纏った幹土を凝視して、戸口に立っていた。その背後には、うわあ、とかそんなつぶやきを零して、頬を赤くした美代子の姿が。その背中を、誰かが「ほら入って入って」と軽快な声で押す。先生だ。

「良かった。何とか立ち直ったみたいね」

先生は、安心したのか、肩を下げて息を吐いた。

「俺、どんなまずいことになってましたか？」

頭を掻いて訊くと、壁に寄りかかった春芳が唇だけ動かして答える。

「相当まずい事になってた。俺達のこと見えていないように、うわ言つぶやきながら屋敷中を歩き回って……とうとう幹土の頭がイッてしまったかとうな垂れたぞ、俺は」

それに、先生が続く。

「……本当よ、幹土君。夢遊病みたいになってたのよ、あなた。ひどい熱があつたし、意識が混乱したのね、きっと。……いきなり廊下で叫びだすわ、突然女湯に駆け込んでくるわで、大変だったんだから」

「……そ、そうだったんだ」

幹土はどこかちくちくする頬に、やっと納得したように頷く。

「何にせよ、良かったな、幹土。俺はてっきり、薬でもやったのかと思った」

部屋の隅の椅子に座り、ぼりぼりと金色の頭を掻く基喜。その横

で、美代子が机に片手をついて言う。

「突然意識を失って、どうなるかと思ったけど。こうして元の幹土君に戻ったみたいで良かったわ」

基喜が、本当にな、と頷く。

「でも、少し拍子抜けしたわ。部屋が騒がしいから駆けつけてみれば、幹土君、こんなにけろりとしてるんだもの」

先生はそう言うてから、幹土にしがみ付く二人を見遣り、苦笑いを浮べる。

「何だか、私も仲間に入りたい気分ね」

突然先生はベッドの前で靴を脱ぐと、とう！と大きく腕を広げて飛び跳ね、被さってきた。

先生の胸に視界を覆われた幹土は、苦しいんだけど、と頬をぼっこり寄せて言う。

「なあ、幹土。……呼んで来い、早く」

突然春芳が横からそう言った。

「きっと、まだ広間で蹲ってるぞ、彼女」

「……彼女？」

「そう。彼女が」

春芳は「早く行つてやれ」と顎で促した。

……まさか。

幹土は彼女達の腕を引き剥がし、ベッドから降りて靴を履く。そして、数歩歩いた後、立ち止まり　ミキさん　そうつぶやいてすぐに駆け出した。部屋を飛び出すその背中を、皆は静かに微笑んで見送る。

階段を走り下り、ホールを真っ直ぐ突っ切つて広間へ。そして、見る。ソファアの上で縮こまった小さな影を。

「ミキ……さん」

目を見開いて、つぶやく。

すると、その影はぴくりと震えて、肩をゆっくりとこちらへ振り向かせる。

ミキさん　唇がもう一度そう動く。ミキは、ソファアの背に手を載せて立ち上がり、兄さん！　と大きく叫び、飛び越えた。

走り寄ってくる。細い足が、白いワンピースの裾を揺らして。

彼女は、そのまま首に抱きついてきた。幹土は、頬に触れるその柔らかな髪感触に、ただ呆然とする。

ミキの足が、宙をゆらゆらと揺れた後、静かに床へついた。そして、彼女は見上げてくる。

幹土はゆっくりと、ゆっくりと視線を下げる。

「幹土兄さん」

見上げていたのは、違う瞳だった。あの瞳よりも少し茶色っぽい。それに、髪は肩までしかない。

彼女はぼつちやりした頬を涙で濡らせて、笑顔を向けてきて、

「……良かった」

……誰だ？

啞然としたが、すぐに記憶が蘇る。彼女は、天宮美希。良子叔母さんの娘で、俺の従妹。

何故忘れていたのかと、不思議に思いつつ。美希ちゃん、と優しくつぶやいた。

「幹土兄さん……　本当の幹土兄さんだ」

美希は、感触を確かめるように幹土の腕を掴む。幹土は瞬きして、歪んだ視界を元に戻し、微笑んだ。

「ずっと、ここで待ってたのか」

うん、と美希は涙声で頷く。

「俺という夢遊病者は、美希ちゃんに何か変なこと、してないよな？」

「したわよ」

幹土は本気で驚くような顔をしたが、すぐに複雑そうな笑みを浮べた。

「その時のこと、全く覚えてないんだ。今のは冗談？　それとも……」

「幹土兄さんが思ってるようなことはなかったわ。けど、変なことにしたのは事実」

美希はそう言って幹土に背を向け、腕を組んだ。

そのまま彼女は黙りこくる。その小さな肩が揺れているのを見て、幹土は微笑み、すつと背後から彼女を腕で包み、その小さな頭に自分の顎を載せた。

「……ごめんってば」

幹土がそうつぶやくと、彼女は涙声で何かを言って、そしてすぐに声を上げて泣き出した。

幹土はそのまま、彼女の背中を胸に寄せて、じっとする。寂しく、悲しそうな笑みを浮べて。

美希を連れて戻ってくると、ひとまず一階へ下りて、皆で軽い食事を摂ることになった。

その前に、先生は幹土を引き連れて広間へ行き、叔父さんに電話をかける。少し話した後、受話器を渡してきた。

「……ごめんな」

受話器を耳に当てた途端、幹土はそう言った。

「最初に言うことがそれか。なんでお前が謝る必要があるんだ？」

心配かけたから。

そう言うと、叔父さんは深く溜息を吐いた。

「確かに、心配したさ。けど、そんなことはどうでも良いんだ。とにかく、お前が無事でいてくれて……」

叔父さんの声がか細くなり、鼻を吸る音が聞こえてくる。幹土は、「昨日は朝から、どうも頭が痛かったんだ。それで夜にすごい熱が出て、その所為だと思うんだけど……やっぱり、帰ってから精神病院行った方が良いかな」

「馬鹿！ 何言ってるんだ！ ……幹土が熱のせいだと言っんなら、私はそれを信じる。病院なんか行く必要はない」

真剣だけれど柔らかい声で返してくる。幹土は「叔父さん」とつ

ぶやき微笑んで、

「俺、ミキさんに会ったよ」

と、ぼつりと言った。

「ミキさん……って、美希ちゃんのことか？」

「違う。もう一人の……ミキ」

その真剣な声に、叔父さんは押し黙って、

「どんな子だったんだ？」

と訊いてくる。幹土は視線を電話に据えながら、思い出すように笑って、

「明るくて、素直で。わがままで。……本当に優しい子だった。母さんによく似ていたよ」

叔父さんは、そうか、としばらく黙った。その後で、

「姉さんが死んで　そしてミキちゃんが死んで、十二年になるのか」

ぼつりとつぶやいた。

「義兄さんが交通事故に遭って、それで姉さんが自殺して　舌を切るなんて、本当に馬鹿なことをしてな。ショックを受けた幹土の母さんは、その後、病気で死んでしまった。ミキちゃんも、姉さん達が死んだ後すぐに、屋敷で亡くなった。……私は、」

何もしてやれなかった。叔父さんはそうつぶやいて、かすかに嗚咽が聞こえる。

目に手を当てて、歯を食い縛る叔父さんの姿が受話器の向こうに見えた。

「叔父さんは十分尽くしてあげたさ」

「そんなはずはないんだ。看取ってやることさえしてやれなかった」
「間に合わなかったのなら、仕方ないさ、こんな山奥だし。……ミキさん、叔父さんが花をいっぱい贈ってくれたこと、忘れてなかったよ」

幹土がそう言うと、突然叔父さんは嗚咽を止め、「お前、本当に……」と驚いたようにつぶやく。

「だから、本当だって言っただろ。ミキさん、十五歳になってさ、すごく可愛かった」

叔父さんは数秒の沈黙の後、堰を切ったように嗚咽し出した。

幹土は、「じゃあ、切るね。昼ごろ出発するから」と囁いた後、少し返事を待ってから、受話器を置いた。

食事の後、食堂を出る際に、先生に部屋で休むように勧められたが、平気ですと断った。

幸美と部屋に戻って、鉛筆とスケッチブックを抱えて出ると、ちょうど春芳が、階段から上がってきたところだった。

春芳は幹土の腕の中にある物を見ると、

「昔やった趣味に勤しむのか……いいかもな」

ジーパンのポケットに手を入れて何かを抜き出し、その上端を幹土に見せてきた。

幹土はそれを見て春芳に頷き、幸美へ振り向くと、「先に行つてくれ」と言う。

幸美は、ちらりと春芳を見遣ってから、「わかったわ」と頷いて、階段を下りていった。

幹土は階段の側の欄干に腕を組んで、春芳と肩を並べながら階下を見下ろす。

春芳は、黙って写真を差し出した。幹土は受け取ると、上下の向きを正して眺める。

「すまない……美希ちゃんに渡し損ねた」

「いや、良いんだ。元々これは、他の人にあげるつもりだったから」
幹土が独り言のように小さくつぶやくと、春芳は幹土を怪訝そうに見た。しかし、すぐに視線を再びホールへと落とす。

幹土が「迷惑かけた」とぼつりと言うと、まったくだ、と春芳は返す。

「昨日の幹土は、俺達が見えていなかった。何かに憑かれたように屋敷中を駆け回って……それで、いきなり、」

春芳は、横の階段を指差し、「ここで倒れるしな」とつぶやく。

「幸美、取り乱しただろ？」

「いや、平気だった。俺も最初、驚いている幸美さんを見て、これは駄目だと思ったけど、鈴木さんが何とか彼女を落ち着かせたから」

「……そうか。あの幸美が、よく引き下がったもんだな」

幹土は安心したように微笑み、ホールの天井から下がるシャンデリアを見る。一時、輝くまでに新しくなったはずのそれは、今はクリスタルは煤け、金色の縁は錆びて鈍く光っていた。

「幸美さんにも、謝っておくんだな」

幹土はああ、と頷く。二人は黙ってホールを見下ろしたが、ふと幹土が、あのさ、とつぶやく。

「俺の部屋にさ、オルゴール、なかったか？ 結構大きい箱なんだけど」

その言葉に、春芳は眉をひそめて、視線を逸らす。

「そんなもの、あったか？ 俺は知らないぞ」

それより、と春芳はすぐに話を変えてくる。

「書斎の鍵、貸してくれないか？ もう一度あそこ、見ておきたいんだ」

「良いけど、出る時はちゃんと閉めておけよ」

幹土は、ジャケットのポケットをまさぐって鍵束を取り出すと、春芳の手に載せた。

「ありがとう。行ってくるよ」

二人は背を向けて歩き出すが、「幹土」と春芳が呼び止めた。

「ありがとな、誘ってくれて。色々あったけど、この旅行、すごく楽しかった」

今までに見たことのない、明るい表情。幹土は驚いたようにその笑顔を見つめたが、その背中が廊下の先に消えると、笑みを漏らした。

……あいつ、やっぱり寂しかったんだな。

いつも澄ました顔して、人を寄せ付けない空気を出してて。そん

な春芳がいつか、部室のベランダで、珍しく煙草なんかを吸って、遠くを眺めていたことがあった。

その目が似ていると思った。鏡で幾度となく見てきた自分の目に。孤独に苦しむ人間の目に。

中庭に入ると、幸美はベンチに座って噴水の方を眺めていた。けれど幹土に気付いた途端、ぶんぶん腕を振って合図してくる。

幹土が近づき、「お邪魔しますよ」と言っただけで腰を下ろすと、お邪魔してください、と彼女は笑顔を見せる。

幹土は座った途端、いきなり彼女へ体を向けた。じっと見つめられて、幸美は戸惑いがちに、何よ？ とつぶやく。

突然幹土は、彼女の頭に手を載せて、強く撫でた。

「何？ やめてよ、恥ずかしい……」

幹土の手首に手を重ねて、慌てて辺りを見る幸美。幹土は笑いながら、

「よく頑張りました」

そうつぶやく。それで、幸美は気付いたのか、幹土を上目遣いに見ると、

「……本当。頑張ったのよ、私」

頬を赤くした。

幹土は幸美の頭から手を離すと、写真を取り出して、間に置く。

誰、この娘？ と、幸美が手に取る。

「子供の頃の母さん。美希ちゃんに似てるだろ？」

スケッチブックを開き、中庭を見渡す。

本当、そっくりね。幸美の声を耳にしながら、幹土はあの夢の情景を頭に思い描いた。

少女の足は軽快に跳ねて。黒いワンピースの裾はふわりと風に乘って、長い髪はなびいて。そして、あの綺麗な瞳は空を映して。

幹土は、写真を幸美の手から抜き取ると、顔に近づけて、その中の少女の顔をじっと見る。そして、無言でそれを渡し返すと、鉛筆を取った。

彼女の仕草、声、表情　　思い描ける全てを注ぎ込んで、彼女を蘇らせる。

鉛筆は止まらずに、紙の上をゆるやかに移動する。あの踊りを再現するように。

春芳は、書斎の扉を閉めると、微笑を浮べて窓際の机に歩み寄り、その肘掛椅子を優しい手つきで掴んで自分の方へ向ける。そうして座ると、息を吐いて書斎を見渡す。

「もう一度、顔見せてくれないかな」

何となくつぶやいたその言葉が、思いの他大きくて、書斎に響き渡る。

少しの間、じっと黙って薄闇に目を凝らしていたが、すぐに首を振って、そんな上手い話ないよな、と笑う。

……こうして昼間見てみると、この書斎、おばあちゃんの書斎よりも少し大きいな。

春芳は、頬杖をついて、暗い奥へと視線を向ける。……いた。

「なんだ、意外とサービスピス精神のある幽霊なんだな、君は」

春芳は、視線を斜め右へと向けたまま、つぶやく。返事はない。

「幹土が君を見たら、驚くだろうな。写真の少女に瓜二つだから」

春芳は視線を彼女の顔からゆっくりと下げて、白い靴下を履いた足が近づいてくるのを見る。

「何の用、俺に？」

真正面に立った彼女へ、恐がる様子もなくつぶやく。

彼女の赤い唇が、ゆっくりと動く。ミ、キ、ト……。

「何か伝えて欲しいのか？」

ずっと手を彼女の髪に伸ばしかけたが、春芳は思い留まるようにその手を引かせた。

少女は背中で手を組んで、大きな瞳をじっと春芳に向けて微笑み、もう一度、ミキト、と唇を動かせる。

「幹土がどうしたんだ？」

すると、彼女の唇が横へかすかに引き伸ばされ、そして、縦に小さく開かれる。イ、テ。

「居て……欲しいのか？」

彼女はただじつと笑みを浮べたまま春芳を見つめる。しかし、突然身を乗り出して、春芳に顔を近づけた。

間近で見える大きな瞳。それが、鼻先に迫って、春芳はようやく恐怖を感じ、喉から声を漏らした。

少女の顔は、触れそうな距離まで来て、止まった。その瞳に映っているのは 自分の顔ではなく。

白いワゴン車だった。それは、宙に浮いて垂直に傾き、運転席には、茂川先生、そしてその隣には幹土が見える。車の背後にあるのは崖、つまりこれは。

美世は、窓から中庭の二人を眺めていた。指先から立ち上る煙草の煙は、染みの多い天井の下をゆっくりと徘徊する。

「このゾッコンめ」

幸美が幹土の横顔を嬉しそうにじつと眺めているのを見て、美世は無表情でそうつぶやき、煙草を口から離して、細い煙を吹いた。

昨日の晩。幹土君が倒れた時、自分がいなかったら、きっとあの子達は混乱し、事態はもっと悪化していた。自分がいたから、こうして彼らは笑顔を取り戻せたのだ。

「自惚れかしら……」

……でも、あの時、皆を落ち着かせられたのは、やっぱり私だけだった。教師の、私だけ。

自然と頬が緩んで、笑みが零れる。……少し、誇っても良いのかしら。

…… 散々生徒に憎まれて、彼らの保護者には罵声を浴びせられて。役立たず。

…… そう言われた私だけ…… こうして役に立ってる。

この旅行から帰れば、たくさんの非難の声が、私を待ち受けてい

るだろう。けど。

「それでも私は……」

美世は煙草を、窓枠に置いた灰皿へ押し付けると、急に明るい笑みを浮べて窓を開け、顔を出す。

「幹土君！ 幸美が今、鼻ほじったわよ！」

その大声が中庭じゅうに響き渡ると、幸美がえ？ と顔をこちらへ振り向け、すぐに「何言ってるのよ！？」と顔を真っ赤にして叫ぶ。

幹土はわずかに幸美を見た後、別段気にしないようにスケッチに意識を戻す。

ちがうの、ちがうから、絶対に。黙々と描いている幹土に、幸美が横から必死に説明する。その様子を眺めながら、美世は箱からもう一本取り出して、微笑む口に銜えた。

「これで、もう良いんじゃないか？」

その重い木箱を机に下ろすと、鈴木は傍らにいる美希へ言った。

美希は、うーん、と浮かない顔で、その箱を指ですつと撫でた。割れていた部分から、でこぼこした感触がする。

「これ以上はもう、私の手では直せないよ」

困ったように美希の横顔へ言う鈴木。美希は答えずに、オルゴールの側面にじつと目を近づけ、

「……この辺りは、ヒビも消えて、良いんだけどなあ」

「大体どうして、あんなことしたんだ？」

鈴木 of 言葉にやはり答えずに、彼女は箱を引っくり返す。

昨晚、幹土はホールで倒れた後、美希に支えられて部屋へ戻り、ひどく頭が痛そうな様子で、ベッドに横たわった。

幹土は美希に鞆からポーチを取り出させ、そこに入っていたオルゴールを美希にプレゼントした。嬉しくなった美希は机の引き出しに一つのオルゴールがあるのを思い出し、取り出して見せた。すると、幹土はいきなり美希の頬を掴み、彼女の顔へ自身の顔を近づけ

た。

……幹土兄さん……な、に？

突然の事に、彼女は鼓動を高鳴らせて、幹土の瞳を見つめた。そして、そこに映ったものを見る。

自分の顔ではなかった。見知らぬ少女の顔。肌がとても白くて、大きな瞳が瞬きせずにじっと見つめてきて。

美希は慌てて顔を離すと、手元にあるオルゴールにふと目が留まった。

……誰、今のは。

そう驚くと同時に、頭の隅に、何故か彼女への憎しみが激しく沸き起こって 気付けばそれを手に取って、壁に投げつけていた。その古いオルゴールは、いとも簡単に壊れた。同時に幹土は気を失って倒れた。

おい、幹土！ しっかりしろ！

見守っていた皆が騒ぎ出す中、彼女は呆然と立ち尽くした。

どうして、私は。……あなたは。

美希は、オルゴールを開く。音は鳴らない。もう、あの綺麗な音を聞くことはできない。

「ごめんなさい」

美希は沈んだ顔でオルゴールに言葉をかけて、蓋を閉じると、机の引き出しを開けて、そこにしまう。

「……これ、誰のオルゴールなんだろうな」

ぼつりと背後で鈴木がつぶやく。

美希は返事をせず、目を閉じて手を合わせた。それを見た鈴木は、何故に合掌する？ と首を傾げたが、やっておくかと美希に倣う。

……どうか安らかに。

じつと祈った後、美希は瞼を開き、静かに引き出しを閉める。

「このオルゴールのことはもういいよ。ミキちゃんの叔父さんも、話したら許してくれたんだし」

背中を押されて戸口へ歩き出しながら、美希は「でもなあ……」

と、まだ気にかけるように振り返った。

「行こう」

そう強く促され、ようやく彼女は視線を前へ向けた。しかし、その時。

あの音階が、ゆっくりと部屋に響き出した。二人はびっくりと体を震わせて立ち止まる。振り向くと同時に、その音はすぐに途絶えた。

「……気にしない、気にしない」

鈴木は真顔になってそう言い、美希の腕を強く引いて部屋を出ると、ドアを強く閉めた。

「早く幹土達のところへ行こう。私達がいないと、あの二人、調子に乗っていちやつきはじめるから」

ドアへ振り返る美希の視界を遮るように、鈴木はわざと顔を傾けて、明るく言う。その笑顔が、もう関わるな、と無言で訴えかけてきた。

部屋から遠ざかっていく中、耳を澄ませば、かすかにその音が聞こえてくる。……彼女が、鳴らしているのかな。

広間は静まり返っていて、奥で開いていた大きな窓から涼しい風が流れ込んでくる。

基喜と美代子は、向かい合ってソファーに背を沈め、それぞれの前にはティーカップが置かれて湯気を立ち上らせていた。

「うるさい奴らがいないと、こうもゆっくりとくつろげるんだな」

基喜はいつもみたいに踏ん反り返ることなく、姿勢良くソファーに座っていて、わざとらしい丁寧な仕草でカップを口に運ぶ。それを見ている美代子が、くすくすと笑う。

「何だよ？」

「うつん、なんでもない」

美代子は首を振って、自分もカップを手取る。

「……本当に大丈夫なんだろうな、あいつ」

ぼつりと、基喜がつぶやく。その言葉に、美代子は少し黙ってか

ら、

「大丈夫だよ、きつと。さっきあんなに元気そうだったじゃない」
どこか暗い声でそう言った。

基喜は、何かを考えるように、手に持ったカップを口の前で静止させる。

「正直、どう思った？」

「どうって……」

基喜の質問に、美代子は視線を逸らして、カップを置く。

「本音を言つと、俺は引いた。熱だけであんなことになるか、普通？」

どこかいらいらしたような口調で、基喜が言う。

「ならないね。……普通なら」

「だろ？……本当のところ、どうなんだよ」

美代子の顔をじつと見つめる基喜。美代子は伏せていた目を上げて基喜を見る。

「昨夜の幹土君、すごく怖かった。さっき食事した時も、私、幹土君を避けてたの」

基喜はそれを聞いて深い溜息を吐くと、だよな、とソファーに踏ん反り返った。

「俺もだよ。今日はどうも、いつもみたいにエンジンがかからねえ」

二人は沈黙する。風が、ソファーの背に載った基喜の金髪を揺らした。美代子は、じつとカップの中の水面を見下ろし、でも、とぼつりとつぶやく。

「今日の幹土君、本当に何でもなさそうに見えたわ」

それを聞くと、基喜は、沈んでいた表情をわずかに明るくさせ、
「ああ、いつもの幹土だった。いつもの……幹土」

ぼんやりと繰り返す。美代子は顔を上げて、笑った。

「やっぱり、幹土君は良い人だよ。気さくで、優しくて。誠実で」
「べた褒めしてんな、お前」

基喜は、そう言って笑う。

「確かに昨日は変だったけど……幹土君は幹土君に変わりないんじゃないの？」

基喜は一瞬顔を固まらせた後、突然、

「そうだよな！」

そう叫んで、吹っ切れたように笑って立ち上がった。

「たえ薬中でも、あいつはあいつだ！」

そう言っで、大きく頷く。美代子は座るように手で促しながら、何言ってるのよ、と苦々しく笑う。

「とにかく今まで通りで良いよな」

自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、基喜は再び腰を下ろして、大股を広げる。

「ちよつと……何これ」

啞然とした美代子の声が聞こえて、基喜は、うん？ と、笑みを彼女に向けた。その途端、基喜の視線が彼女の手へ向かって釘付けになり、何やってんだよ、とすぐに美代子の顔を驚いたように見る。「私じゃないわ」

美代子は、基喜をじつと疑うような目で見ながら言っで、自分の手が握っているカップへ視線を戻した。

そこに盛られた大量の角砂糖。半分も飲まれていない紅茶が、カップから溢れ、細い線を伝わせている。

二人はお互いを探るような目で見てから、ほぼ同時に、「だから違っで」と声を漏らした。

少女は窓の欄干の上に座っで、にっこりと微笑み、二人を見つめていた。その髪はカーテンと一緒にひらひらとそよぐ。彼女の無邪気な視線に、二人は気付かない。

「荷物、これで最後ですか？」

「うん。このおっきなので終わり」

基喜のボストンバックを先生から受け取り、幹土は空いた隙間へと差し込む。少し体を離して、荷物がトランクに綺麗に収納されて

いるのを見ると、満足げに頷いてドアを閉めた。

先生が運転席に乗り込むと、幹土も迂回して助手席のドアを開く。
「寒いですね、相変わらず」

そう言っただアを閉めると、幹土は指先をダッシュボードのボタンへ向けようとして、しかしその指を掴まれた。

「良いの。……このぐらいがちょうど良いの！」

そう叫んで、先生は指を持ったまま、出納のコップを煽る。

「はいはい、そうですか」

指を先生の手から引き抜いて、そう笑う。

その時、春芳が玄関から歩いてきて、助手席の窓を叩いた。

「何だよ」

窓を開いてそう訊くと、

「俺が運転するよ。良いよな、茂川先生？」

幹土の頭越しに訊く。

「いいのよ？ 別に、私が運転しても」

「俺がします」

春芳は先生の言葉を遮る。

「そんなに運転したいなら、させてあげればいいだろ」

春芳の背後を通った鈴木が、美希の腕を引きながら、からかうようにつぶやき、後部座席のドアを開く。春芳は眉をひそめて彼女を見た。

「……わかったわ」

先生はどこか納得していないように言うと、コップを出納にかぶせて運転席から降りる。すみません、とつぶやいて入れ替わる春芳。

「……お前、免許持ってたのな」

「ああ。去年の冬に取った」

視線の先で、幸美が美代子と基喜を連れてこっちへ向かってくるのが見える。

「なあ、幹土」

突然、春芳が真剣な声でつぶやいた。

「なんだよ？」

振り向くと、春芳は真顔を向けてきた。

「信じてもらえないかもしれないけど」

どこか震えた声。春芳は口を開きかけたが、すぐに、思いとどまるように閉じて、静かに首を振る。

「……なんだよ、はつきり言えよな」

そう言っただけで、幹土は別段追求しようともせず視線を前へ戻した。

「さ、出発進行だぜえ！」

三列目の座席に乗り込んできた基喜が、ピシッと前を指差す。

「なにキメてんだよ、アホ。荷物運びも戸締りもやんなかった人間が」

その指先をデコピンで弾きながら、身を伸ばしてきた幸美から鍵束を受け取る。春芳は無言で車を発進させた。

「何だか、すごく疲れる旅行だったわね」

「本当。……誰が原因なんだか」

先生の言葉に頷く鈴木。うるせえ、とつぶやく。

「……でも、楽しかった」

そう嬉しそうに言う美代子へ、

「無事に成就したし、本当に言うことない旅行だったでしょ？」

幸美が言つと、美代子は恥じる風もなく、「うん」と大きく頷いた。基喜が、おいおい、と顔を赤くして肘をつく。

「もうわかってるんだから、隠すなよ」

鈴木がやれやれと肩をすくめる。美希だけが、「なになに？ 何のこと？」と、興味深そうに鈴木の腕を引いた。

次第に洋館が遠ざかっていき、車は花壇の並ぶ十字路を真っ直ぐ突き進んだ。けれど、門前で、突然停止する。

「どうした？」

春芳へ振り向くと、

「いや。不思議な屋敷だったなと思ってさ」

春芳は、バックミラーに映るその古びた建物をじっと見つめる。

他の皆も振り返って見る。

「なに感慨に耽ってるんだよ」

鈴木が、重苦しい沈黙を払いたいのか、そう言った。けれど。

「ああ、不思議なことばかりあった。……ここでは」

幹土が、バックミラーを煽いで、ぼんやりとつぶやく。その声に鈴木は俯いて、春芳は無言でアクセルを踏んだ。

車はアーチ状の門をくぐり抜けると、停止し、幹土は車から降りて、門扉を施錠すると、その先に見える大きな洋館を見た。

……じゃあな、ミキさん。

門前で広がっている花の景色を見るだけで、彼女の踊る姿が目につかぶ。この洋館のどこを見ても、それは一緒。

幹土は鍵束を握り締めると、車に乗り込む。

「出発進行」

ぼつりとつぶやくと、春芳は無言で車の向きを変えて、山道へ入った。

「こうして見ると、でかいわ、やっぱ」

基喜は窓を開けて、そう言う。美代子も顔を並べて、「一生にいつぺんだろうな、こんなところへ来れるのは」とどこか勿体無げに言った。

「また幹土に頼んで、連れてきてもらえばいいよ」

鈴木は、風になびく自分の長い髪をゴムでまとめながらそう言う。「やめとくよ。もう俺はここへは来ない」

幹土が無機質な声でつぶやいた。すると、鈴木は視線を下げて、「そうだな。やっぱり私もいいや」

山道を覆う青葉の隙間から下りた光が、小刻みに揺れる車体に斑点を浮かばせる。風は涼しく、車の走りは軽快で。けれど、車内はどこか重苦しい空気で満たされていた。

サイドミラーに流れる、無数の緑の横線をぼんやり見つめながら、幹土は欠伸する。そして、バックミラーを見遣って。息を止めた。

二列目のシート　類杖をしている鈴木と、ぼんやり外を眺めている幸美。彼女達の間に座っていたはずの美希が、消えて。そして「　ミキ、さん……」

そこで足をぶらぶらと揺らして座っている少女。長い髪を白いワンピースの肩に垂らして。真っ白な顔を、大きな目を。真っ直ぐ前へ向けて。

その瞳が、こちらへゆっくり動いた。

「幹土兄さん。行っちゃ駄目だよ」

突然唇をにつこりと笑わせて、顔を傾けて笑う。

行っちゃ駄目。もう一度そうつぶやいて、ミキは笑みを消す。そして突然、前、とつぶやいて顎を前方へしゃくった。

幹土は振り返り、ミキの視線の先を　道の曲がり角の向こうにかすかに見えたそれに、はっと目を見開き、

「止める！」

叫んだ。

その声に、春芳が歯を食い縛ってすぐにブレーキを踏む。

全員の頭がぐらりと傾き、沸き起こった悲鳴を、タイヤが地面を擦る甲高い音がかき消す。

車は山道を大きく横へスリップし、停止した。

ブレーキを強く踏んだまま、春芳は呆然と前を見る。

そこには、頭上高くまで隙間なく積もった土砂が、岩壁から降りて、反対の崖へ傾斜していた。

じつと沈黙が車内を覆った後、鈴木が降りて、車の背後へ回る。

息を切らせて前を直視していた幹土は、我に返って、後ろの座席へ振り向いた。そこにいるのは、彼女ではなく。

咄然として震えている美希だった。彼女は、幹土の視線に気付いて、すぐに身をすり寄せてきて、「怖かった……」とつぶやいた。

「……もうすぐだったな、これは」

サイドミラーに映った鈴木が、崖のラインを飛び越えかけた後部タイヤを見て、つぶやく。

先生は、どうなってるの？ と車から降り、彼女の背中に走り寄る。しかし、それを見た途端、

「あ……」

そうつぶやいて、鈴木を震えながら握る。

「どうなってるんだ？」

幹土もすぐに降りて、走り寄る。その後を美希が続いて、幹土の腕を握る。

「あ……ぶねえ……」

眼前にある崖を見て幹土はつぶやき、力が抜けたようにしゃがみこむ。

ゆっくりと近づいてきた春芳が、青白い顔で、宙に浮いた後部タイヤを見る。

「まさか、本当にこんなことになるとは。……不思議なことがあるもんだな」

何か弱弱しくつぶやく春芳に、鈴木が険しい顔を振り向かせ、

「何が不思議だ、馬鹿」

と、言い直す。

「……幸美」

ふと車の方を見遣って幹土は立ち上がり、崖を離れる。すると、その手を美希の細い手が掴んで後に続いた。

「春芳の言う通りだな」

幹土は歩きながらぼつりとそうつぶやく。

……不思議なことばかり起こる。

「……行かないで」

その時突然、彼女の声がして、幹土は足を止める。

「私、嫌だよ」

幹土は、震える顎を横へかすかに向ける。

「幹土兄さん」

懇願するような声。視界の隅に映る、長い黒髪。髪先が、風に上下に揺れて。

「……ミキさん。いつかまた来るよ。その時は、」

幹土は震えながら微笑み、

「必ず外へ連れ出してやるから」

その嘘は、枝が揺れる音にかき消されて。けれど、彼女は、うん、と嬉しそうに言ってくれた。

幹土は振り向く。その瞬間、唇に柔らかいものが重なった。

……ミキさん。

強い想いが、彼女の息と共に口になだれ込んでくる。幹土はその想いを吸って、唇を離した。

風が大きく吹き、頬に触れていた長い髪は離れ、掻き消えた。もうそこに立っているのは、彼女ではなく。不安そうな眼差しで見上げてくる美希だった。幹土は微笑む。

「……やっぱりませてるな、ミキさんは」

ぽつりとそうつぶやいて、美希の腕を引くと、後部座席のドアを開いた。

美希が背後で、「どうして私がませてるのよ!？」と、不服そうに言うが、幹土は気にした様子もなく、シート上の幸美に、「大丈夫か？」と明るく手を差し伸べた。

薄暗い部屋の片隅。そこに、足の折れかかった古いイーゼルが立てかけてあった。それに掲げられた一枚の紙。

そこに描かれた彼女は、瞳が大きく、髪は長く、微笑みは子供っぽくて……。

指を差し向けて、紙の上の細い線をすつと撫でてみる。

唇の薄さも、明るい表情も 何から何までそっくり。

「幹土兄さん……」

彼女はその紙を顔に近づけた。涙が落ちていく。けれど、その絵がにじむことはない。

……手に取ると、こんなにも、悲しくなるのに。でも、この絵を見ると、すごく嬉しい……。

そうして彼女は、微笑む。

……どうしてもっと早く、気付けなかったのかしら。これは私にと
って、最初で最後の恋。もっと早く気付けば、私は。

その時、ドアがノックされた。お嬢様、お茶の時間ですが、い
かなさいましょう？

「すぐ行くわ」

ミキは、すつと顔を引き、目元の涙を払ってドアへ近づき、ノブ
を握った。

けれど、もう一度振り返ると、窓の外を見る。

「約束だからね。兄さん」

山が連なるさらに遠くに 薄い青が広がっている。そのさらに
遠くに……兄さんに行きたい。

彼女はそう思ってみて、笑った。涙が頬を伝い、寂しそうに笑う
唇を濡らす。

彼女は出て行く。そして、床に点々と落ちた涙の跡が、すつと薄
くかき消えた。それは初めからなかったように儚げに 綺麗に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1096j/>

幻少女 ～ 儚げにほほ笑む彼女～

2011年9月10日23時55分発行